## 絶対君を見捨てない スクーパーズ来襲編 3

るな充120%

(アニメURAHARA同人小説)

注意

は、アニメ「URAHARA」をご覧になってからの方が、声の感じが掴め、より会話を楽しむ RA」をもとに書かれています。設定や内容はかなり変更されていますが、この小説を読む場合 ことができると思います。ですので、この小説は、アニメ「URAHARA」をご視聴されてか らお読みになることをお勧めします。 この同人小説は、春奈るなが主演声優を務め、2017年秋に公開されたアニメ「URAHA

なお、 この小説はフィクションです。実在の人物や団体などと関係はありません。

目次

(スクーパーズ来襲編 第3巻)

第6章 ラフォーレ奪還作戦

第7章 決戦

第8章 黒いスクーパーズ

(スクーパーズ来襲編 第4巻以降の予定)

第9章 ラフォーレの決闘

第10章 PARK動乱

第11章 原宿の結婚式

その後の予定

デストロイヤーズ来襲編

スクーパーズ・デストロイヤーズ大戦編

訳して掲載している。 ラックホークで長野県の地下坑道へ向かった。以下は英語での会話であるが、すべて日本語に翻 本にやって来た、 オッペンハイマー准教授は、自衛隊員が同乗した米軍のUHー60A汎用輸送へリコプター・ブ アメリカ合衆国ハンスコム空軍基地を出発し横田基地に到着したC-マサセッチュー工科大学のスコット ワトソン教授とハーバード大学のジョン -17輸送機に乗って日

「ジョン、楽しみだな。 どうやって、スクーパーズは、 光速を越えて地球までやって来るのだろ

能性もあります。」 「わからないです。物理学のレベルが全く違うのかもしれません。それとも何か抜け道がある可

「正直に話してくれるだろうか。」

「日本側の話では、素直に話しているということです。技術士官とのことですから、 超高速飛行

に関しては詳しいと思います。」

「おー、あっちに富士山が見える。」

「あれですか。噂通り綺麗な山ですね。 教授は、テンションが上がっているようですね。

「あー、スクーパーズと話せると分かってから上がりっぱなしだ。昨日はよく眠れなかったよ。」

1

「空軍の輸送機ですから旅客機と違ってうるさくて、私もあまり眠れませんでした。」

「なんだ、つまらないやつだな。」

「そうですか。私もスクーパーズと話せるのはすごく楽しみです。 日本政府は、 大学教員にイン

タビューさせているそうですが、賢明な判断だと思います。」

「合衆国だったら、国家安全保障局あたりが尋問しそうだ。」

「はい。そうすると、意思の疎通がとれなかったかもしれません。それでスクーパーズをグアン

タナモ湾米軍収容所にでも送りそうです。」

「テロリスト扱いか。」

ヘリコプターが到着すると、 自衛隊員がやってきて、 ワトソンに話しかける。

「お疲れ様です。」

「ありがとう。」

「注意事項に関してはお読み頂けましたか。」

「ああ、絶対にフレンドリーに対応するよ。」

「有難うございます。」

「いま、スクーパーズは。」

「朝食を取っています。 好みなどが良くわからないため、 100種類近い食事を用意して

す。

「地球の食べ物でも大丈夫なのか。」

「はい、大丈夫とのことです。 基本的にかなり雑食性が高いようです。」

「そうなのか。」

願いします。」 「では、 聴取室にお連れします。 日本の石橋教授、 諏訪教授がお待ちです。 事前打ち合わせをお

「有難う。お願いします。」

生が待っていた。まず、 前打ち合わせを始めた。 部屋に着くと、 そこには石橋教授、諏訪教授のほか、補助のために浦藤助教、 6名がそれぞれ自己紹介をした。そして、今日の質問内容に関して、 石橋教授が話を始める。 桐谷博士課程学 事

がまとめた報告書をお読み頂けましたでしょうか。」 「昨日は、スクーパーズ星やスクーパーズ星での生活について質問をしました。 浦藤君と桐谷君

ワトソンが答える。

24時間で1時間は60分というのが興味深かったです。これは、約数が多く初期に複数の文明 が、やはり、銀河間の戦争のためという感じです。1日の長さは地球とだいたい同じで、 を束ねるために適しているという、自然数の性質によるものなのでしょう。」 「はい、目を通しました。一般的な生活はかなり普通な感じです。君主制を取っているようです 1 日 は

り、飛行に集中したいのですが、よろしでしょうか。」 「そうですね。それで今日は超光速飛行について質問をしていきたいと思います。軍事的な話よ

「はい、私たちも、そこに一番の興味があります。」

と思いますが、よろしいでしょうか。」 「有難うございます。 何も知らない私たちが教えを乞う生徒のような立場で話をしていきたい

「問題ありません。実際そうなのですから。」

ったのですが、 「有難うございます。報告書にも書きましたように、 理解して頂けましたでしょうか。」 昨日、 スクーパーズが使う数式を少し教わ

「そうですね。それでは、 「もちろんです。我々が使う数式より、形式的に書けて誤解が少ない、良い書き方だと思います。」 今日はスクーパーズの数式を交えながら、 話を進めていきたいと思い

「望むところです。」

61 の指示にしたがって作成した、 スプレ た。 石橋教授がまず日本語で話を始める。 い打ち合わせの後、 イがあり、 研究室のような雰囲気を醸し出していた。ディスプレイには、スクーパーズ 自衛隊員がスクーパーズの2体を部屋に導いた。 スクーパーズの翻訳機から文字や図を表示できる装置が付いて 部屋には、 大きなデ

今日から英語での会話としたいと思いますが、 「お早うございます。昨日お話した通り、アメリカから大学の先生方もいらっしゃ 翻訳機の方を切り替えて頂けますか。」 いまし

ボナダ少佐が答える。

「はい、わまりました。」

ここから先は英語での会話である。

「ご飯は美味しかったですか。」

「はい、とても美味しかったです。」

「そうですか。美味しいもの美味しくないものがありましたら、どんどん言って下さい。

参考にメニューを考えます。」

「有難うございます。」

ぐらいかかるのですか。」 から5万光年程度離れているという話でした。スクーパーズ本星から地球まで、 「それでは、今日は超光速飛行に関して教えて頂ければと思います。 スクーパーズ本星は、 時間にしてどの

回は、輸送艦を連れてきていないため、 「主力艦は地球の1日で1万光年ぐらい進むことができます。輸送艦はそれよりも遅いです。 航行日数は7日程度でした。」

「5万光年の彼方からたった1週間で着いてしまうのですね。それは速い。」

きません。アンドロメダ銀河までは、主力艦で10カ月ぐらい、超高速艦でも1か月ぐらい かります。」 「はい。銀河間航行用の超高速船はその10倍ぐらい速いですが、あまり荷物を載せることが で

「それは、すごいです。アンドロメダ銀河まで行っちゃうんですね。

ちょっと途絶えています。」 「はい。少し前までは、デストロイヤーズとの交易も盛んで民間船も往来していましたが、

「戦争のせいですね。」

「はい、その通りです。 その戦争のために、 既に何億体ものスクー パ ーズが死亡しています。」

「そうですか。それは、お悔やみ申し上げます。」

ボナダはワトソンとオッペンハイマーの方を見ながら、謝罪する。

我々にこのような命令が下り、 負けるわけにはいきません。負けた場合、この天の川銀河の被害は想像も及びません。 たことを大変申し訳なく思っています。ただ、我々としてはデストロイヤー 「我々も、地球の方々にご迷惑をおかけして、特にアメリカの方々に多大な犠牲を出してしまっ 我々もそれに従っています。」 -ズとの、 この戦いに そのため

ワトソンが答える。

事情を説明して頂ければ、 「軍人として命令に従って行動されているボナダ少佐に言うことではありませんが、 もっとうまくできたのではないかとは思います。」 私たちに

「はい、以前にはその星の知的生命体に説明と協力をお願いしたこともあったそうですが、結局

せんが、我々2体で協力できることがあったら何でもおっしゃって下さい。」 うまく行かなくてこのようなことになっていると聴いています。 お詫びにならないかもしれ

のご協力は大変ありがたいと思います。少なくとも、我々の間ではわだかまりなくやって行きた んな意図はなかったのですが侵略者として排斥されてしまいました。ボナダ少佐とダルガ少尉 いと思います。」 「わかりました。 そうですね、 我々の国でもベトナムという国ではうまくやることができず、

「有難うございます。」

石橋教授が話を戻す。

うにして光速を超えるのでしょうか。」 「超高速飛行に関してですが、我々の物理学からの結論では、光速に近づくとどんどんエネルギ や質量が大きくなり、光速を越えられないことになっています。スクーパーズの方々はどのよ

ことはできません。」 よって亜光速、光速の3分の1程度までは出せます。ただ、我々の理論でも物体が光速を越える 「我々の宇宙船もマイクロブラックホールエンジンで質量を運動エネルギーに変換することに

「なるほど。では、どうやって地球にいらしたのですか。」

「この宇宙全体の創成期に指数関数的に急激に膨張した時期があります。

れたと考えられていますが、細かいところは研究中です。」 「はい、こちらの言葉ではインフレーションと言います。真空のエネルギーによって引き起こさ

フレーションが生じる前の小さな宇宙で、無数のワームホールが形成されたと考えられていま 「その通りです、細かい理論に関しては、また数式を使ってお話しようと思いますが、 これについては、 我々も理論と現在の観測結果からの推定です。 そのイ

「なるほど、そのワームホールがインフレーションで引き延ばされた。」

「はい、そして宇宙が膨張した後もそのまま引き延ばされながら残っています。」

「そのワームホールを使って航行しているわけですか。」

わけです。」 オデシックディフォー 「はい、ワー ムホ ルの出入口は素粒子程度に小さくなっていますから、それを見つけて、ジ メーション (測地線変形)により大きくして、そこを宇宙船が通って

「すごいですね。」

の最高速ということになります。」 にはエネルギーを使うため1日10回ぐらいが限度です。そのため、 「あまり長いワームホ レル の測地線を変形させることはできません。 1日1万光年が通常の艦船 また、ワー ムホ ル ルの変形

「そのワームホールはすぐに見つかるのですか。」

のですが、その出入口は、 「いえ、古来より千年以上かけて調べてきた結果です。ワームホー 基本的に重力の影響を受けるため、 その分布は宇宙の物質の分布と類 ル自体は極めて多数存在する

似しています。 うなものは航行に利用することができません。また、通常の空間にあるものは短距離のものばか 長距離航行に使いやすい千光年程度のものは非常に限られます。」 ですので、銀河の中心や恒星の中にその出入口がある場合がほとんどで、 そのよ

「千年以上もかけて、航路を切り開いてきたというわけですか。」

訳ありませんが、地球に勝手にお邪魔しました。」 行で約1日かけて地球に来ます。 離ワームホールがある51エリダヌスb星から、 通ってきます。太陽系のワームホールの出口は木星の衛星軌道上にあります。 「はい、その通りです。 太陽系には長距離ワームホールは見つかっていません。 今回は、その後、 10光年ぐらいの中距離ワームホールを9回 月の裏側で艦隊を整備してから、 そこから亜高速飛 そのため、長距 その、

行動と思います。 「ワトソン教授の言われる通り、 今回のことは、 ボナダ少佐は軍人さんでいらっしゃいますから、 個人的にはお気になさらないでください。」 命令に従った

「有難うございます。」

ワトソンが付け加える。

ると嬉しいです。」 し残念ではありますが、 「宇宙に行っても、軍人のお偉いさんは、 お気になさらないでください。それよりも、 敵にも味方にも無茶な命令を押し付けるんですね。 いろんなことを教えて頂け

答えします。 トの電子データは先ほどそちらの係りの方にお渡ししました。質問がありましたら、 れに関しては解説を付けてみました。このレポートを読んで頂いた方が速いと思います。 ンに関する教科書を翻訳機で英語に翻訳したものがあります。地球の言葉にない単語も多く、そ 「有難うございます。測地線変形の理論と測地線変形装置、またマイクロブラックホ いつでもお ルエンジ レポー

「これはすごいものを大変ありがとうございます。」

しくお願いします。」 「実際にこれを書いたのは、部下のダルガ少尉です。 極めて優秀なスクーパーズですので、

「そうですか。 うちの浦藤助教も優秀ですが、 13 いですね、 若い人が優秀なのは。

「はい、おっしゃる通りです。」

石橋委員長は受け取ったレポートを回覧した。全担当者がそれを見て、すぐにでも詳しく読みた いと思ったようだった。その雰囲気を察知して石橋委員長がボナダに話しかけた.

今日は短いですが、また明日ということでよろしいでしょうか。」 「とてもすばらしい内容で、我々もこれを勉強してから、 また質問をした方が良いと思います。

させて頂きます。」 分かりました。美味しい食事のお礼と言ってはなんですが、 こちらでもいろいろ準備を

は準備したいと思います。」 「ありがとうございます。欲しいものがありましたら、 なんでも言ってください。

「日本は美味しいものがたくさんある国ですから、 アメリカ人から見ても、

キーだと思います。」

「そうですか。それは良かったです。」

石橋委員長が締めくくった。

「それでは、また明日お願いします。」

「お願いします。」

スクーパーズや委員は部屋を出て行った。石橋委員長が他のメンバーに言う。

合意ができていますので、この資料はアメリカの国内で共有することは構いませんが、機密保持 には気を付けてください。」 マー准教授、食事が必要な場合は係りの者に言ってください。アメリカとは政府間で情報共有の 「それでは皆さん、明日までにこの理論を勉強しておいて下さい。ワトソン教授、オッペンハイ

「おっしゃることは分かりますが、機密保持に関しては、日本側の方が心配です。

衛隊も情報流出を起こしていますので、ネットにはつながないように注意します。」 「それもそうですね。我々も自衛隊のデバイスにしか情報を入れることはできませんが、その自

ません。 「お願いします。機密保持などに協力が必要でしたら、アメリカ政府に連絡しますので、ご連絡 人類にとって有史以来、農業の発明や蒸気機関の発明に匹敵する転換点の一つかもしれ 協力してこの問題に対処して行きたいと思います。」

「はい、理解しています。恥や外聞を捨てて対処したいと思っています。」

殺しにするような感じではなかったですね。」 わせている人、人ではないですが、良かったです。 「それにしても、ボナダ少佐はすばらしい人間、人間ではないですが、善悪感や判断力を持ち合 SFで出てくる、 地球人を奴隷にしたり、

「そうですね、話しがわかる方だと思います。しっかりとした協力関係を築いて行きたいと思い

「同感です。」

ボナダが翻訳した本をぱらぱらっとめくった桐谷が静かにつぶやいた。

は良い材料だしな。」 ても大したことにはならないだろうけど。それに地球人がスクーパーズと争えば、我々にとって 「いいのか、こんな情報を地球人に渡してしまって。まあ、地球人が宇宙に出られるようになっ

がことこに話しかける。 朝食を終えたPARKでは、 今日の作戦に向けて行動を開始しようとしていた。 まり

「ことこ、準備は大丈夫?」

「うん、大丈夫だよー。その前に、 今までの戦闘デー タからスクーパーズについて分かったこと

を話すね。」

「お願い。」

ことこがタブレットの画像を見せながら説明する。

「スクーパーズには、 裏側の奥に弱点、 急所みたいなものがあるの。

「そうなんだ。」

「いろんな力が、ここから出てるみたいで、ここが壊れるとすぐに死んでしまうみたい。」

りとが尋ねる。

「その急所に当たらなくても消えるスクーパーズもいるけれど。」

て、急所が死んでしまって、最終的には全体も死んでしまうみたい。逆に、急所の力が強いスク 「うん、急所の力が弱いスクーパーズは、それ以外の部分が壊れても、 ・パーズは、急所以外のところならば再生して死なないみたいなんだ。あと、 急所を維持できなくなっ バリヤーの力も強

「分かった。強いスクーパーズはそこを狙えということね。」

いみたい。」

「そういうことかな。あと急所が破壊した場合だと余計な信号が出ていない。 たぶん、

眠るように死ねるみたい。」

「そう。じゃあ、普通のスクーパーズもできるだけ急所を狙うようにする。」

まりがりとに言う。

「私には急所だけ狙うって無理かな。」

「それでいい。まりはスクーパーズにむけて散弾でどんどん撃てばいい。残ったスクー ーズは、

私が片づける。」

「わかったわ。」

りとが作戦の開始を促す。

「じゃあ。そろそろ始めようか。」

「わかったー。」

変身をした3人は道に出た。そして、 3人はことこを真ん中にして手を繋いだ。 ことこが言う。

「じゃあ、また、情報を送るね。」

りととまりが答える。

「了解。」「わかったわ。」

ことこが情報を送り始めた。まりとりとがつぶやく。

「これが、戦車。すごいわ。」

「これなら、スクーパーズの攻撃を防げそう。\_

情報の送信が終わったところで、 戦車の製作を始める。 ことこが言う。

「じゃあ、作ろうー。」

りととまりが答える。

さで丸みを帯びていた。最後の1台は少し小型だった。ことこが順番に説明する。 原宿の囲いの中が光に満たされて、しばらくすると光が納まっていった。すると、目の前に3台 の戦車が出来上がっていた。一番後ろの一台は大きく角ばっていた。もう1台は中ぐらいの大き

りとが言う。 たりできるよ。あと、本物の戦車より小型軽量で、ラフォーレの階段を登れるようになっている。」 がアメリカ軍のM4シャーマンから考えて作ったの。ビーム攪乱幕をまいたり、風で吹き飛ばし 「これが、ドイツのタイガー2型をヒントに作ったもので、これがソ連のTー34、 最後のこれ

まりが同意する。 「ことこは、一番頑丈そうなのに乗りなよ。私はこの小型ので動き回る。まりがこの中型のかな。

「そうね。たぶん、それしかないかもね。」

ことこは別の意見をいう。

「タイガ2型はまりちゃんのイメージで、 T 34はりとちゃんのイメージだったんだけど。」

まりが変なことを言う。

「でも、体の中からTー34にしろという声が聴こえてくるの。

ことこも同意する。 「そうなの?やっぱりことこが一番頑丈なものがい いと思う。 だから、 初めの案で行こう。」

「わかったー。二人がそう言うなら、 そうする。

まりが動かし方を聞く。

これどうやって動かすの。

「簡単だよ。左右2本のハンドルを前後させると、 それぞれのキャタピラが前後に動く。」

「なるほど。」

モートウエポンシステム、RWSって言うの。」 のジョイスティックとスイッチで砲塔の上の銃座を遠隔で動かしてビー のジョイスティックの2つのスイッチで、それぞれ主砲と同軸の機銃が発射できる。右ハンドル 「左右のペダルがブレーキになっている。 砲塔は左ハンドルのジョイスティック ム弾を発射できる。 で動かせる。 1]

「ちょっと、 複雑ね。」

りとは、早速動かしてみようとする。

「ちょっと動かしてみるね。その方がはやい。

そういうと戦車に乗り込んだ。ことこが説明を追加する。

「運転席は砲塔と一緒に回らないところにあるよ。 照準はモノアイディスプレイに表示されるよ。」 外部の様子は運転席のディ スプレ

とが戦車の中に入ると、運転席の上にマニュアルが置いてあった。 それを手に取って運転席に

座った。 されていた。最初に、メインスイッチをいれた。運転席を囲んで配置してしてあるディスプレイ 他、ビーム攪乱幕発射スイッチや、 弾発射装置にエネルギーを供給する反応炉が始動した。 ンジンの始動スイッチを押す。スターターの音と共にエンジンが回り出した。 が周りの様子を映し出した。まりやことこが左側からこちらを見ているのが見えた。ガソリンエ マニュアルを見ながら確認する。 運転席の周りを見渡すと、ことこが説明した以外にも多数のスイッチがあった。 メインスイッチ、 逆に攪乱幕を吹き飛ばすためのファンのスイッチなどが設置 エンジン始動スイッチ、室内の電灯、 同時に、 主砲、 空調の りとは

「反応炉のエネルギーを駆動に使わないところが、ことこらしいか。

りとは少しあきらめ顔で思った。外からことこが話しかける。

「りとちゃん大丈夫?」

「うん、 マニュアルもあったから、だいたいわかる。 ちょっと前進してみるね。」

りとは運転席の両側のレバーを前に押し出した。そうすると、 戦車は後ろに進みだした。

が叫ぶ。

「わーー、危ない。」

前だった。 りとは急いでフットブレーキを踏んで、 戦車を止めた。止まったのは、 後ろの戦車にぶつかる寸

てしまった。まりがあきれる。 今度はレバーを引いて前進を開始した。 「ごめんごめん。 レバーの方向が逆だった。ちゃんと、 そして、どんどん前に進んで右に曲がって見えなくなっ マニュアルを読まなくっちゃ。

「全く。ことこ、りとの位置は分かる?」

まりは、 はバックしながら戻ってきた。 で、それを聞いて少し安心した。りとは右折4回でキャットストリ 「うん、 いまキャットストリートをこちらの方向に進んでいる。もうすぐ戻ってくると思うよ。」 りとがこのまま一人でスクーパーズに突っ込んで行くんじゃない ことこに戦車の中から話しかける。 を通って1周して、最後 かと心配していたの

「うん、だいぶ慣れた。すごくいい。」

「りとちゃんすごいね。運転、もうマスターしちゃった。」

「簡単だよ。次は主砲を撃ってみる。」

りとは砲身を上に向けて、主砲のビームを発射する。

「主砲、エネルギー充填よし。照準。」

とを確認して発射することにした。 そうは言っても、 特に照準を合わせるものがなかった。 とりあえず、 主砲軸線上に建物がない

「発射。一

砲塔上部のリモー ビームが発射され、 トウェポンシステムの機銃の試射を行った。 ビームは天井に当たって跳ね返されていった。 その後、 主砲同軸の機銃や、

「うん、これならいける。」

まりが戦車に乗り込みながら提案する。

「私たちも練習しないと。」

りとが答える。

「じゃあ、ついてきて。さっきの道を1周してみよう。」

「ゆっくり行ってよ。」

「わかってる。」

ことこも戦車に乗る。

「まさか、本当に戦車に乗れるとは思わなかったよ。」

全員が乗車し、マニュアルを読んでスイッチの位置を確認した。 まりが声をかける。

「それじゃあ、練習に出発しようか。」

りととことこが答える。

「わかった。ゆっくり行くね。」

「パンツァーフォー。」

りとがゆっくりと前進を始めた。そして、同じコースを少しずつ速度を上げながら何周もまわっ

た。途中少し広いところで戦車を止め、りとが全員が射撃の練習も行うことを提案した。

「まり、射撃練習をしよう。まりが指示を出して。」

「そうね。でも今回の指示はことこからの方がいいんじゃない。 戦車に詳しそうだから。」

「そうだね。まりの言う通り。ことこ、指揮をお願い。」

「わかった。やってみるよー」

まりが目標に困る。

「射撃練習といっても、原宿のものはあまり壊したくないし、目標がないわわね。」

「さっきもそう思った。そうだ、 囲いに標的になる絵を描いてくる。」

「大丈夫?」

「大丈夫。」

「わかった、りとに任せる。でも標的なんだから、あまり熱心にならないでね。」

「うん。じゃあ、行ってくる。」

新宿側の囲いまで到達すると、戦車が見える高さまで上昇した。

「ここなら万が一ビームが囲いを抜けても、東京に被害は起きないよね。高いところにいるとス

クーパーズから見られそうだから手早く描かなくちゃ。」

りとは、急いでスクーパーズの駆逐艦と戦艦の絵を描いた。

「でも、これだけだと、やっぱり殺風景。」

それで、宇宙船の周りに木や花、太陽を描いた。

「いい感じ。」

「やっぱり、りとね。」

「なんで。」

「スクーパーズの宇宙船まで可愛くなっちゃう。」

ことこも同意する。

「うん、なんか標的にするのがもったいなくなっちゃった。」

「二人とも、気にしなくてもいいよ。アマツマラの道具があれば、 あのぐらいの絵ならばい つで

も描ける。」

その言葉で、まりが気を取り直す。

「そうよね、 今はスクーパーズを追い出すことに専念よね。 じゃあ、 戦車に乗って練習を再開す

るわよ。」

「了解。」

「ラジャー。」

3人が戦車に乗り、エンジンをかける。M4とタイガー2型はガソリンエンジンをTー

ィーゼルエンジンを始動する。そして、 まりがことこへ呼びかける。

「じゃあ、ことこ、指揮をお願い。」

エンジン部を攻撃。タイガーからTー34へ、タイガー 「わかった、タイガーからM4へ、タイガーからM4へ。M4は100m前進。 からT 1 3 4 ↑° T 34は75m前進、 右の小型宇宙船

タイガーとともに左大型宇宙船エンジン部を攻撃する。 攻撃終了後は直ちに現在地に戻れ。」

「M4了解。」

「Tー34了解。」

「主砲へのエネルギー充填始め。移動開始!」

「M4了解。」

「Tー34了解。」

3台の戦車が所定位置についた。

「M4、Tー34目標へ主砲照準。」

「M4射撃準備完了。」

「Tー34射撃準備完了。」

「M4、T-34撃て!」

3台の戦車の主砲が発射される。ビー ムは目標にプラスマイナス1m ぐらいの精度で命中した。

「M4、Tー34初期位置へ戻る。」

3台の戦車がPARKの前に戻った。 人が変わってしまったことこが今の行動を評価する。

「M4前に出すぎだ。Tー34行動が遅い。もっと迅速に動け。」

ことこはすかさず次の行動を指示する。

理だ。 「次は、キャットス したがって、停止から射撃までの時間を詰めるぞ。」 トリートから攻撃する。射撃精度の問題で、 まだお前らには行進間射撃は無

「M 4 は T - 3 4、 タイガーを先導。 タイガーから停止の合図があるまで、 キャット ストリ

を前進せよ。」

「M4了解。」

「Tー34了解。」

「主砲へのエネルギー充填始め。目標は追って指示する。

りとを先頭に、3台の戦車が移動を開始する。 角を2回曲がって、 キャットストリ

「M4、Tー34目標は前回と同じだ。」

「M4、T-34停止、撃て!」

3台の戦車が停止して射撃をする。T-34の発射が遅れ、 弾も大きく外れた。

「M4、T-34、300m後退し停止。」

3台の戦車が後退し停止する。

「Tー34何をやっている。 照準が遅い上に不正確だ。 そのつけ は、 我々の血で払うことになる

んだぞ。もう1回同じ行動を繰り返す。 一旦PARK前に戻る。 M4は先導しろ。

まりが不思議にそうにことこに話しかける。

「ことこ、どうしたの?」

「T―34不用意な会話避けろ。 それに私はことこではない。 デリカ ヘクセライだ。」

「はい?」

「それより、M4何をしている。直ちにPARK前に戻れ。」

りとも何か変な感じがしたが、 オタク的な何かかなと思って従うことにした。

「M4前進開始。PARK前に戻ります。」

まりがりとに話しかける。

「ことこ、おかしくない。」

「前に戦車アニメにはまっていたから。」

「そうか。デリカ・ヘクセライはそのアニメの登場人物かな。

3 4 M4不用意な会話は止めろというのがわからないのか。 帰ったら営巣にぶちこむ

ぞ。

「こちらM4、申し訳ありません。敵らしき影を見つけたので、T 34と確認していました。」

「そうか、敵を発見したら、まずは私に報告しろ。Tー34もいいな。」

「こちらTー34、了解しました。」

こんな調子で1時間ぐらい機動と射撃の訓練を繰り返したあと、 PARKに戻ってきた。

「M4、Tー34これで訓練を終了する。 M4だいぶ腕を上げたな。 特に機動性が素晴らしい

その機動力は遊撃には最適だ。」

「こちらM4、有難うございます。」

「Tー34もだいぶ良くなった。これなら作戦で十分役に立つ。」

「こちらTー34、有難うございます。」

「では総員下車。1時間の休憩後、作戦行動を開始する。」

「わかりました。」

3人が戦車を降りた。まりがことこに話しかける。

「ことこ、何なの、デリカ・ヘクセライって。」

ことこが普通に返事をする。

「デリカ・ヘクセライ?何?洋服のブランド?」

「ことこが言ったんじゃない。私は、デリカ・ヘクセライだ、

「えー、知らないよ。私が言ったのー?」

「戦車物のアニメのキャラか何かじゃないの?」

「そんなキャラ知らないよー。」

あまり物事を気にしないりとが止める。

「まあ、いいじゃない。ことこのおかげで戦車の操縦だいぶ上手くなった。」

「それはそうだけれど。」

今は、休もう。」

「そうね。ラフォーレを取り返して、原宿からスクーパーズを追い出すんだもんね。」

「そう。ことこも頑張ろう。」

ことこは答えなかった。不思議に思って、りとが問いかけた。

「どうしたの、ことこ。何か心配事?」

「デリカ・ヘクセライ、どこかで聞いたことがあるような気がして。」

「そうかもね。今はいいよ。気にしなくても。」

「それに、思い出そうとしているんだけど、この1時間の記憶がないんだよー。私、大丈夫だっ

たし

「えっ、 だろう。これもアマツマラの力で、スクパーズの軍人としての情報が取り込まれたのかな。」 この1時間の記憶がないの?うん、でも、 なんか軍人さんみたいだった。大丈夫?なん

「そんなことあるのかなー。落ち着いたら調べてみるけど。やっぱり少し心配だから、 今回の作

戦ではまりちゃんが指揮を取って。」

「わかったわ。 戦車隊の指揮なんてしたことがないけれど、やってみる。」

「まりちゃん、ありがとう。これで安心だよー。」

りとが休憩を促す。

「まり、ことこ、話しがまとまったところで、PARKで休もう。」

「わかったわ。」「わかったー。」

スクパーズ側でも、朝から攻勢のための準備を進めていた。ガーチュー ンがアルドアに尋ねる。

「どうだ調子は。」

昼までには3台の主砲を用意できると思います。

「そうか、そのころまでには第11連隊も到着するとのことだ。第11連隊と作戦の分担を決め 午後には作戦を決行する。」

けて射撃するのを見ると、絵を鑑賞している余裕が無くなったことを自覚した。 っている構図が興味深かった。しかし、その後に道を走る砲を装備した乗り物や、 裏原に隠れていたゴモは囲いに描かれた絵を見て楽しんでいた。 戦艦と駆逐艦を木や花が飾 それが絵に向

「あの絵は砲撃の練習用の標的なのか。 早く連隊に伝えないと。」

ゴモは東急プラザに向かい、仲間をテレパシー呼び出した。

「こちらは第111分隊のゴモです。聞こえますか?こちらは第111分隊のゴモです。 聞こえ

ますか?応答して下さい。」

「おおゴモか。ガジメだ。 今裏原から聴こえてくる音の正体のことだな。」

「はい、そうであります。」

「あれは、ビーム砲か。」

「はい。敵はビー ム砲を搭載した乗り物を用意しています。 裏原の道を走って、 射撃練習をして

いるようです。」

「そうか。」

「ただ、空を飛ぶことはできないようです。」

いうものも考えるのだろう。」 「そうか。スクーパーズには飛べない乗り物など考えられないが、 人間は飛べないために、

「はい。」

「それで、いつ頃こちらを攻撃してくると思う。」

「わかりません。直ちに攻撃してくるか、 明日以降か。

「そうか、わかった。それでは監視を続けてくれ。敵がこちらに向かうようならばすぐに連絡を

してくれ。」

「わかりました。」

明らかだった。 ガジメはそのことをすぐガーチューンに報告した。ガーチューンは敵の攻撃ポイントはラフォ レだと考えた。理由は分からないが、今までの戦闘から敵がラフォーレに固執していることは

通にはビー いる防弾板とビーム攪乱幕タンクの数を増やせ。 「ラフォーレ1階に防弾板を多数用意しろ。ビーム攪乱幕のタンクも増やせ。各階にも設置して ム攪乱幕のパイプラインが多数設置されているからなんとかなる。 足りない場合は、竹下通りから運び出せ。竹下 押し返すのが無

理でも、少しでも時間を稼ぐんだ。\_

ガーチューンが第1中隊に命令する。

攪乱幕を有効に使え。 命じる。 ただし、 たぶん間もなくラフォ これ は遅滞戦闘だ。犠牲を最小にしつつ、 無理はするな。 ーレに攻め入ると考えられる。 中隊の判断で撤退して構わない。」 相手の占領を遅らせるんだ。 第1中隊にはラフォーレの守備を ビー Ĺ

ガジメが質問をする。

口の入口を制圧されて、 「ゴモは敵の兵器にはかなりの防御力があると推測してます。ラフォーレでなく、迂回し 外部と遮断されるとやっかいなことになると思います。」

る可能性も高い。」 パワーラインも切られ、 「軍事的な常識ではその通りだ。その戦術を取られると、ビーム攪乱幕のパイプや戦艦の主砲 我々には反撃の手段さえ無くなってしまう。 何もできないまま、 全滅す

ると考えられます。 「はい。それに、あの入口を抑えられると、 第11連隊が救援に来ることもほとんど不可能にな

直ちにこの囲いから撤退する他はない。」 そのため最初にラフォーレを攻撃して来る可能性が高いと考えている。そして、 かもしれない。 「ガジメの言うことは正し 明治通りから竹下通りに入ってくると思う。 もし、 先に入口を抑えてくると想定するならば、 61 しか 理由は分からない 確証はない。 が、 敵はラフォ もしかすると、 我々は王女様の救出を諦めて、 レ に固執し 希望的観測なの ラフォーレの占 て

準備が整うまで遅滞戦闘に努めます。」 「了解しました。私も、 敵のラフォーレへ の固執は感じております。 ラフォーレでこちらの攻撃

頼む。」

隊員に対してカジメが作戦について説明した。 ラフォー 第1中隊がラフォ レの後ろの入口から搬入し、各階に設置し始めた。ラフォーレ屋上にいた第111分隊 レに集まり、竹下通りに置かれてい た防弾板やビー ム攪乱幕のタン クを

戦闘においては必ず退路を確保し、 撤退ができる。現在の戦艦の主砲の準備から考えて、何とか昼ごろまで長引かせる必要があるが、 第1中隊全体がその任に就く。 は難しい可能性がある。 ちらの戦艦の旋回主砲を利用する準備がまだ整っていない状態では、 「ゴモからの情報により、 階を移動して迎え撃つ。 その準備が終わるまで、 敵は新たな武器を使ってラフォ 建物両サイドの窓は開くようになっているので、 各小隊が各フロアで迎え撃つ。 犠牲は最小限にするように心がけろ。」 戦闘を長引かせることが今回の作戦の目的だ。 レに攻め入ることが予想される。 我々は遊撃が任務だ。 敵の武器を撃破すること

第111分隊の全員が答える。

「わかりました。」

ソクチュン一等兵がゼクール上等兵に話しかける。

「一筋縄では行かしてくれないですね。

フォーレ内に足止めできれば、 「そんなの戦争では当たり前のことだよ。だけど、ここで敵を撃破できれば、 王女様のまわりに敵がいなくなって救出が楽になる。」 それが無理でもラ

「上等兵はいつも積極的ですね。 見習いたいと思います。」

ガジメが割って入る。

「ゼクール軍曹、すまん、 取り込んでいたので忘れていた。

「軍曹?」

これが辞令だ。」 「ああ、お前の活躍が認められて、 昇進の通知が来た。 今は昇進式はできないが、 おめでとう。

「有難うございます。 当たり前のことをしているだけですが。」

「いや、 あの活躍はなかなかできるものではない。 誇っていいぞ。 あとゴモも昇進して、

分隊の全員がゼクールを祝福する。 ゾロモも祝福する。

「同じ階級ね。 この作戦頑張りましょう。」

「有難うございます。 はい、 ζ ý つも後方からゾロモ軍曹の支援がありますので、 私は前で本当に

安心して戦えます。」

「無理はしないでね。」

「はい、わかっています。」

ガジメが話を戻す。

になる。 迎撃する場所、攻守切り替えのタイミング、 「ゼクールの言う通りだぞ。王女様の周りに敵がいなくなることは、 ワクチュン、連隊との連絡しっかり頼むぞ。」 戦艦の主砲が準備ができたら、 救出のチャンスでもある。 主砲との連携が重要

「はい、 分かりました。」

機した。ラフォーレの中では、第1中隊隊員が強力な敵を迎え撃つために、千年以上前に作られ そして、 たと伝えられる曲「美しき母なる星スクーパーズ星」を歌う声が鳴り響いていた。到着した第1 - 1 分隊隊員も、それに合わせて歌い始めた。ゼクールは王女様のことを考えながらつぶやいた。 「早く来い。」 第111分隊は、まりとりとがあけた屋上の穴を通って、ラフォー レ6階のホール で待

PARKでは、 出発の時間を迎えていた。りとがみさに話しかける。

「今からラフォーレに行って、ラフォーレをスクーパーズの手から奪還してくる。そして、 パーズを地球から追い出す。だから安心して地下室で待ってて。」 スク

「わかったですな。行ってらっしゃいですな。」

みさは力なく答えた。りとは、昨日のことがあったからと思って、あまり気にはしていなかった。 相手の特に速いスクー パ ーズの出方と対処を考えていた。

た。逆に私の方がまだまだだけど、 「ことこのおかげで、サイコレセプターの反応が速くなって、だいぶ自由に動かせるようになっ これでなんとかしなくちゃ。」

まりが出発の準備の号令をかける。

「それじゃ行くわよ。 先頭は私、 ことこが真ん中で、 りとが最後をお願い。」

りとが反論する。

「ことこが真ん中なのは分かるけど、私が先頭を行く。」

ラフォーレまでは私が先頭に行く。ラフォーレに入ったら、 「うーん、それだと、りとが先走りそうだわ。りとがいなくなると、ことこが先頭になっちゃう。 ことこが1階入口を抑えて、

先頭。私は両者の間を繋ぐ。」

「さすがはまり。 いつもの通り良く考えてある。 わかった。 まりの作戦で行こう。」

「それでは全員乗車。」

「了解。」「わかったー。」

3人が戦車に乗り込む。まりが通信装置で連絡をとる。

「りと聞こえる?」

「聞こえる。」

「データリンクも大丈夫ね?」

「大丈夫。」

「ことこ聞こえる?」

「うん、良く聞こえる。データリンクもバッチリー。

「わかった。それでは前進開始。ゆっくり行くよ。」

「了解。前進!」「パンツァーフォー。」

まりのTー34を先頭に、タイガー2型、 トを歌い始めたが、りととまりは歌を知らなかったため、 M4シャーマンが続いた。ことこが、パンツァ 足踏みで拍子をとった。

て東急プラザの脇に到達して、 今度は明治通りの西側に向かうことを確信して、隊への連絡を急いだ。戦車がキャットストリー トを渡る間、防衛線の機能が止められていたため、簡単に渡ることができた。そして、先回りし 遠くから3人の様子を観察していたゴモは、 連隊にテレパシー通信を入れる。 戦車3台がキャットストリ トを横切ったとき、

「分隊長!ガジメ分隊長!聞こえますか。敵がやってきます。」

「ゴモ、ゴモか。どんな様子だ。」

「敵は装甲が施された乗り物3台に乗って地上をやってきます。 目標はラフォーレだと思われ

ます。」

「そうか、連隊長の予想通りだな。こちらも迎撃の準備はしている。

「わかりました。 敵が明治通りを渡るときには、 防衛線の攻撃が止むと思います。 そのときに、

そちらに合流します。\_

「頼む。我々は運び込んだ戦艦の主砲の準備が完了するまで時間稼ぎをしなくてはいけない。」

「運び込んだ戦艦の主砲?よく分かりませんが、 遅滞戦闘のお手伝いをします。

フォーレ6階のホールに来てくれ。」 「こっちでも、 何かが近づく音が聞こえてきた。 こっち側に来たら、 裏手から屋上に上がり、ラ

「了解です。敵の隙をみて、 6階のホールに向かいます。それでは、 ホー ルの合流まで通信を切

「ホールで会おう。」

明治通りの前に到達したまりが指示をする。

「明治通りで3台が横に並んで射撃後、ラフォ レに突入するわよ。 ラフ オ では、

先頭はりと、ことこは1階からスクーパーズが入るのを防いで。」

「了解。」「わかったー。」

3台の戦車が明治通りで横に並んだ。 まりが、 攻撃開始を指示する。

「射撃用意。 ラフォーレ入り口に設置されている装甲板。

「照準よし。」「照準、大丈夫だよー。」

「発射。」

「発射。」「ファイエルン。」

戦車からの射撃で装甲板が吹き飛んだ。 中のスクーパ ズは大騒ぎになった。 まりが、

を指示する。

「次は、ラフォーレ内部の装甲板に向けて発射。」

「発射。」「ファイエルン。」

建物内部に設置されていた装甲板も吹き飛んだ。無事だったスクーパーズたちは、上の階や横の

通路に避難したが、気を取り直して、戦車への攻撃が始まった。前や上、 ムが飛んできた。 しかし、戦車は無傷だった。 まりがことこをほめる。 左右からスクー

プビー

「やったわね、ことこ。完璧な防御力。」

「えへへへ。有難う、まりちゃん。」

「それじゃあ、ラフォーレに突入するよ。」

りとが答える。

「今度は、私が先頭ね。」

りとの戦車がラフォーレ1階に突入し、 まりとことこが続いた。戦車に向けてビー

が無傷なため、 スクーパーズたちはすぐに逃げて行った。まりがりとに指示する。

「りとはフロアの右を見てきて。 私は左を見てくる。 ことこは入り口を見張っていて。

一了解。」

「わかったー。ビーム攪乱幕を吹き飛ばすファンを作動させるよ。」

お願い。」

た。スクーパーズはファンが動作すると退避していったため、 ことこがファンを作動させると、 りとがまりに連絡する。 視界がだんだん開けてきた。まりとりとが、 抵抗なく建物の端まで到着した。 通路に入ってい

「こっちにスクーパーズはいない。」

「こっちもそう。それじゃあ、まず、地下を制圧しましょう。」

「ことこを残していくのは心配だけれど、了解。」

2台の戦車を階段を降りて行った。

るアルドアのところへ持っていき、 司令部に、戦車の映像や情報が届いた。ガーチューンはいそいで戦艦主砲の移設作業をし 緊急に指示を出す。

と同時に通信ケーブルを引いていましたので、それで戦艦のコンピュータを使わせてもらいま 「わかりました。戦艦主砲の移設は部下に任せて、至急対応を検討します。戦艦のパワーライ 「アルドア、 これが敵の武器だ。作業中で申し訳ないが、至急対応策を検討してくれ。

「頼む。急いでくれ。」

状のもの などを計算した。 早速、アルドアは戦艦のコンピュータにアクセスして分析を開始した。武器の威力、装甲の強度 止められそうなことがわかった。その結果をガーチューンに伝えた。そして、ガーチューンは いそいで、ガジメに連絡する。ワクチュンがガジメを呼び出す。 (履帯、 キャタピラー)の継ぎ目が弱点で、 装甲はスクープビームで破壊できそうもなかった。唯一、地面に接している帯 そこにスクープビームを当てれば、 動きを

「分隊長、連隊長から連絡が入っています。」

「わかった。」

そう言って、ガジメは回線を受け取った。

「ガジメ、よく聞け。敵の武器の弱点を伝える。 ただ、実行はかなり困難だ。それをできるのは、

ゾロモだけだと思う。」

「わかりました。どんな作戦でしょうか。」

こを狙って、 「敵の武器が進むために使っている、帯状ものがあるだろう。 スクープビームで撃ってくれ。それで、敵の武器は動けなくなる。 その継ぎ目が弱点とのことだ。そ

「了解しました。あの強力な武器の動きさえ止められれば、 だいぶ楽になります。」

頼む。」

ガジメが分隊員を集め、 作戦の趣旨を説明した。 そして、 最後に付け加えた。

は休んでいろ。それ以外の隊員は、 の砲の威力から考えて、 「この作戦は、 分隊全員で行う。 我々のサイコバリヤーではどうにもならない。今回は、ゼクー ゾロモ、 ゾロモが敵に見つかった場合に多方向へ退避して敵の照準を ゼクール、 ゴモ以外の隊員はゾロモをカバーする。 -ル、ゴモ

ゾロモからそらすんだ。いいな。」

「敵の照準をこちらに引き付ければ良いわけですね。 はい、 わかりました。」

ゼクールだけが反論する。

「私も、行きます。」

てくる。 「いや、敵の兵器自体を破壊できるわけではない。ただ、動けなくなったら必ず棒人間が外へ出 そのときが、 お前の出番だ。それまで6階で待機していろ。」

「わかりました。分隊長は。」

っていろ。」 「おれは、少し離れたところで指揮をとる。 あの武器が動けなくなったら呼び出す。それまで待

「わかりました。」

ゼクールはあまり良い予感がしていなかったが、 6階で待機することにした。

を吹き飛ばし、赤外線画像でスクーパーズがいないことを確認しながら、フロアを制圧した。そ S(リモートウェポンシステム)で簡単に制圧することができた。ファンを使ってビーム攪乱幕 して、地下1階、最下階の地下1.5階のフロアを制圧した。 ーズが残っていて、攻撃を仕掛けてきたが、戦車の装甲を破ることができず、 りととまりが、地下0.5階に降りた。地下からは逃げるところがないため、 砲塔の上のRW 何体かのスクー

位置に来ると、攻撃を指示した。 ビーム攪乱幕はなかったが、お店の商品に隠れながら接近した。そして、タイガー2型が見える ガジメの分隊は、ラフォーレ通路の北側の壁の穴から1階に入って行った。 ファンのために、

を攪乱するために全員一度前に出てから退避しろ。ゾロモ、そうなったら俺たちは全力で下がる 「射撃が確実な位置まで、おれとゾロモが前に出る。 もし、 敵に気付かれたら合図するから、

「わかりました。」

ガジメとゾロモが少し前に出た。

「ゾロモ、目標は1センチメートルぐらしかないが、 当てられるか?」

「はい、静止していますので、可能と思います。」

「撃ったら、後退する。」

「はい。」

「撃て!」

ゾロモがスクー プビームを発射する。 狙い通り帯輪ピンに当たり、 履帯が切れた。

「総員撤収!」

ガジメの指示と共に全員が来た道を急いで撤収した。

を見ると、 ことこが1階入口の方を監視していると、左後ろの方で軽いショ スクーパーズが逃げていくところが見えた。 ックがあった。 そちらの方向

「追わなくちゃ。」

エンジンをふかして追おとしたが、戦車が回り出した。

あれ、あれ。

前を見ると、左側の履帯が外れていくのが見えた

「履帯を切られたのかー。」

ことこはエンジンを停止して、りととまりに連絡した。

「りとちゃん、まりちゃん、履帯、キャタピラがスクーパーズに切られて動けなくなっちゃ つ

気を付けて。」

りとが尋ねる。

「大丈夫?」

「うん、車体は無事。 切ったスクー パ ーズは逃げて行った。 りとちゃんたちは、 そのまま作戦を

続けて。」

まりがりとに話しかける。

「私と撃ち合ったスクーパーズかな。」

「そうだと思う。あのスクーパーズはとても射撃が正確。 どうする。

「地下の制圧は終わったから、1階に戻るわ。」

「うん、それがいい。」

2台が1階に戻ってきた。りとがことこに尋ねる。

「ことこ、どう?」

「動けなくなっちゃった。 アマツマラで直すには、 全部作り直しになっちゃう。 それに、 また履

帯を切られるかも。」

「そうか。」

「ここで、入口を見張っているから、りとちゃんとまりちゃんは上の階を制圧してきて。そして、

全部制圧したら、建物に散弾発射装置を設置して、スクーパーズが近寄れないようにするよー。」

「わかった。」

まりも同意する。

「とりあえずスクーパーズのビームでは装甲は打ち抜けないようだから、 このまま作戦を続け

ましょう。」

「了解。ことこ、周りを見て、何かあったらすぐ連絡して。」

「わかったー。大丈夫だと思う。全周を監視しているよ。」

「そうして。できるだけ急いで制圧する。」

りとがまりに話しかける。

「スクーパーズが少しだけ残って攻撃してくるけど、目的はなんだろう。

「無理に攻撃を続けないですぐに撤退しているわよね。 うーん、 時間稼ぎじゃない かな。」

「やっぱり、そうか。 とすると、稼いだ時間の後に、 何かあるということ。

「もう、本当にしつこいわね、スクーパーズ。」

「うん。だけど、今はラフォーレを取り戻す。」

「賛成。じゃあ、上の階に行くわよ。」

2台は1.5階に上がった。1.5階のスクーパーズはすぐに逃げて行った。そして、 りとがまりに提案をする。 5階、3階と制圧していった。スクーパーズの抵抗はなかった。3階の制圧が終わったところで、 2 階、2.

上の階を制圧する。」 「このまま進むと、2台ともことことの距離が遠くなりすぎると思う。 まりは3階にい て。

「1台で大丈夫?」

「うん、なんとかする。」

そして、りとは3.5階の制圧を開始した。まりも、慎重に周辺の監視をしていたが、 が外れていくのが見えた。 て、右後ろからショックを感じた。 が多数あり、完全に見張ることはできなかった。 戦車を動かそうとしたが回転するばかりで、 そしてその時、かん高い「カン」という音がし 店のも

「りと、りと、 ごめん。私もキャタピラーをやられた。 今は動けない。」

「大丈夫?」

「撃った奴らはすぐに逃げて行った。」

「わかった。気を付ける。」

「ただ、洋服の店の中から撃ってくるから、 赤外線でも発見が難しい ね。

「どうしようか。」

「ことこにも攻撃はないようだから、このまま作戦を続けられる?」

ら外に出て戦うだけ。ことこのおかげで、ボードの反応速度が上がっているから、なんとかなる。 「慎重にね。」 「うん、ここで逃げても振り出しにもどるだけだから、やってみる。 私の戦車の履帯も切られた

ふわっとしたスカートの後ろ。 「りとの戦車を狙うとしたら、 りとは4階に上がり、 4階の制圧を開始した。 どこから狙うかな。 とすると、 あそこかな。 まりは4階フロアーの配置を考えていた。 やっぱりファッションの店だわよね。 ここから狙えるかな。 前列の

まりはその位置に戦車砲の照準をつけた。1階上だけれど、そのフロアの下を狙うことができた。 の引き金を引いた。 りとが4階の制圧をしている途中、やはり「カン」という音がした。まりは間髪入れず戦車砲

の移動兵器の観測装置が回る隙間を利用して、 ガジメの部隊は、 3階で停止している敵の兵器を攻撃することにした。ビーム攪乱幕はかなり薄かったが、<br />
敵 1階の敵の移動兵器を動けなくした後、偵察をしている他の分隊からの連絡 ガジメとゾロモが移動兵器に対して射線がとれ

測装置が、反対側を向こうとしたときガジメが命じる。 る店の中に隠れることができた。そして、 最前列の大きな服のすぐ後ろに前進した。そして、

「撃て!」

ゾロモのビームが正確に履帯のピンを打ち抜き、 3階の兵器も動けなくなった。 ガジメが撤収を

「下がるぞ!」

「はい、分隊長。」

「さすが、ゾロモだ。やったな!」

「有難うございます。」

「あと1台、いくぞ。」

「はい!」

階に入ると、その1台は反対側に向かっていたため、容易に店の中に隠れることができた。やが 一度、ラフォーレの外に出た。そこで、もう1台の移動兵器が4階に上がった報告を受けた。4 その戦車が戻ってきた。少し離れていたガジメが少し前に出て指示をする。

「俺が様子を見る。ゾロモは隠れてろ。」

「わかりました。」

ゾロモは、そういってスカートの後ろに隠れた。

「綺麗な色、面白い柄。今度、着てみようかな。」

そんなことを考えながら、ガジメの指示を待った。

「よし、撃て!」

ガジメから指示が来た。半身を乗り出して照準し、得意の細くて強力なビームを発射した。

ムは狙いどりに飛んでいき、正確に履帯のピンに命中した。

「やった!」

が床や天井を突き抜けるときの衝撃で飛ばされた。 ゾロモが喜んだ瞬間、下から強力なビームが床を突き抜けてゾロモを貫通した。 ガジメはビー

「ゾロモ。」

されたガジメは、 ロモが消えたことを悲しむ時間はなかった。残った隊員に命じた。 ガジメは叫んだが、ゾロモはガジメの方を見ながらも、何も言い残せず消えて行った。 店の中の壁に当たって止まった。サイコバリヤーのために怪我はなかった。 吹き飛ば

「敵の移動兵器から距離をとって隠れろ。」

移動兵器も回るだけで、 動けなくなったことを確認したガジメがワクチュンに命じた。

「ゼクール、ゴ モを呼び出せ。4階の外、北側で待機するように連絡してくれ。やつが出てくる。」

わかりました。」

ジャモチャは、 リコに続いて女性隊員のゾロモが消えてしまったことに衝撃を隠せなかった。

「このやろう。」

砲撃のために4階フロアにあいた穴から、まりの戦車の方に向かって行った。 ガジメは止める。

「戻れ。隠れて相手の様子を見るんだ。戦闘の目的を忘れるな。」

「大丈夫です。3台とも動けません。死角から狙ってみます。」

「わかった。まかせる。だが、無理はするな。」

「わかりました。」

ジャモチャはまりの戦車に取り付き、 同じところに何度も何度も、 何回も何回もスクープビ

を撃ちこんだ。

「この。この。この。」

装甲がだんだんと赤くなってきた。

「生きてる限り、何度でも撃ってやる。」

履帯を切られたりとがまりに連絡をした。

「私も履帯を切られて動けなくなった。でも、下から撃ったのはまり?戦車を撃ったスクー

ズは消えたみたい。」

「ほんと?!良かった。隠れるなら、あそこかなと思って撃ってみたの。」

「うん、ドンピシャだった。ありがとう。 スクーパーズは一度下がって様子を見ている。

はどう。」

「1体に取りつかれた。こちらからは、 攻撃できない位置にいるわ。そして、 ビームを何発も連

続して撃たれている。」

「大丈夫?」

「だんだん、装甲が赤くなってきている。」

「ことこ、まりの戦車だけど大丈夫。」

「同じところに300回ぐらい撃たれると、装甲に穴が開くかもしれないかな。」

「そうか。わかった。」

まりを助けるために、りとが車外に出ることを決心する。ただハッチから出ると集中的に狙わ

れる可能性があった。

「ことこ、戦車を壊してごめん。」

そう言いながら、りとは戦車の砲塔と車体の継ぎ目一 周を切り裂き、砲塔を押し出しながら飛び

出た。それを見た、ガジメがゼクールとゴモに言う。

「来るぞ。作戦開始だ。」

少しだけ離れた、3体がりとに同時攻撃をかける。

「今日は、3体か」

りとはビー ムをかわしながら、真ん中のガジメに迫った。簡単にビームが当たるとは考えていな

かったが、 スピードを落とさずにガジメに迫るりとを見てゼクールが叫ぶ。

「分隊長、避けて下さい。動きが昨日より速いです。」

ろからビームを発するが当たらない。 それを聞いたガジメは速めに退避行動を開始し、りとの攻撃をなんとかかわした。ゼクー つが当たる気はしなかった。 りとは反転してゼクールに向かう。 ゼクールはビームを放 -ルが後

「じゃま。」

向かった。ガジメがジャモチャに連絡する。 りとがゼクールに迫るが、ゼクールも早めに退避した。りとはゼクールを追わずに、まりの方へ

「ジャモチャ、そこから離れろ、 棒人間がそっちに行く。 こちらでは抑えきれない。」

あとは、 抑えます。ビームの反対から出る移動用のガスジェットぐらないらば、私のバリヤーで防げます。 ゼクールとガジメが追いかけながらりとを狙うが、ことごとくかわされてしまう。尋常な手段で は勝てる相手ではないと悟ったゼクールがガジメに進言する。 ゴモとで棒人間をお願いします。 私があのビームが出るタンクを

「それは、危険すぎ・・・。分かった、頼む。」

尋常な手段では勝てないことはガジメもわかっていた。

ころにビームを撃ち続けていた。 ガジメから退避の指示が出されていたが、 ジャモチャはまりの戦車にくっ つ いたまま同じと

「この。この。」

ビームが当たっている場所に、もうすぐ穴が開こうとしていた。

「あと、もう少し。」

りとがガジメ、 ゼクール、ゴモを引き連れてやってきた。 ガジメが叫ぶ。

「ジャモチャ、そこを離れろ。」

ただ、ジャモチャは離れずにビームを撃ち続けていた。 まりからりとに連絡が入った。

「戦車に穴が開いたわ。私も外に出て戦う。」

「その必要はない。」

戦車に達したりとはジャモチャを右足で蹴とばした。 の穴の方を見るとまりが少しだけ見えた。 いけないと思って、ビームや棒は使わなかった。この階もビー 装甲が弱くなっている戦車を傷つけると ム攪乱幕で煙ってはいたが、

「中にビーム攪乱幕を張って、穴から離れていて。」

まりに伝えた。りとは反転して3体の方に向かっていった。

まりは車内に攪乱幕を張りながらも、RWS(リモートウエポンシステム)操作盤に飛びついた。 「3体をここから引き離したけれど、穴の開いた戦車のまりをおいていくわけにもいかない。」

「りと!りとを援護したいけど、速すぎて狙えない。」

「じゃあ、銃身は固定して。 その前を通るから、 私の後を追うスクー パ ーズがいたら撃って。

「わかった。」

まりは斜め横に銃身を固定して、 射撃のチャンスを待つことにした。 ガジメが叫ぶ。

「来るぞ。」

りとは一番強敵と思うゼクールをルナ銃で狙う。

「まず、あいつ。」

ガジメとゴモが迎撃の準備をする。ゼクー ルは少し上昇して、ビーム攪乱幕の濃い部分に隠れる。

「避けた。じゃあ、 あいつ。」

とうとする。 りとがガジメを狙う。 その瞬間、 ガジメとゴモが射撃をする。 りとは難なくかわしてルナ銃を撃

「何?!」

捕らえて、床に押し付ける。 モチャに注意する。 ルナ銃が勝手に動き出したのがモノアイディスプレイの情報でわかった。 それを見たジャモチャが加勢して、 銃身を抑える。 ゼクー

ゼク

ール

が

-ルがジャ ルナ銃

「ジャモチャ、銃身を抑えると危ないぞ。」

「射線上にはいないので、大丈夫です。撃ったら銃身が熱いかもしれませんが、離しは

バンクスもやってくる。ゼクールが指示をする。

「おれを上から押さえろ。」

バンクスはゼクールに覆いかぶさった。 りとは推進用のガジェット を最大出力で噴射してみた

が動かなかった。 ルナ銃を撃ってみたがやはり動かなかった。

「アチーな。」

ジャモチャはつぶやいたが、ルナ銃を離さなかった。ガジメとゴモは3体の前にい て、 ビー ムを

連射して、りとが3体の方に進めないようにしていた。

「絶対に前に進ませるな。」

りとは、ビームかわしたり、 棒やボードで防いだりしていたが、 ビームが使えない状況で、

進むのは危険だった。そして、 ザトム、 バンクス、 ガビー も集まってきた。ガジメが指示をする。

「一斉射撃をするぞ。」

全員がりとを狙った。

「撃て!」

りとは一度棒を手放しまりの戦車の方に向かった。 ザトム、 バ ンクス、 ガビー が、 後を追った。

ガジメが、大声で命じる。

「追うな。戦闘目的は遅滞だ。」

ザトム、バンクスは迷いながらも減速したが、 に気が付かなか つた。 ガビーたちはTー34のRW だが、 Sの射線に近づい 若いガビー は追うのに夢中でガジメの指示 てい った。 りとがまり に支

パーズが射線に入る。 お願い。」

「まかせて。」

RWSが火を噴いた。ビームがガビーに命中して消滅した。 んとか射撃をかわした。 ガジメから悲嘆の声が漏れる。 ムとバンクスは急停止して、

「ああっ。」

しかし、続けて命令を発する。

「全員退避だ。ゼクールはやつのタンクを持って行け。」

煙っているため、有効な攻撃にはならなかったが、スクーパ まりがりとに指示する。 さえた。まりは、 ゼクールたちはルナ銃のタンクを抱えたまま、 RWSの銃口を前部に向け、 再度射撃した。ただ、 柱の陰に隠れた。ザトムとバンクスは棒の方を押 ズをけん制することには成功した。 部屋全体がビーム攪乱幕で

「砲塔のハッチの上に来て。リア銃を渡すわ。」

「ありがとう。」

そう言いながら、砲塔から顔を出しているリア銃を受け取った。

「モード6ポジション1でエネルギーは充填済みよ。」

了解。

りとは、棒を押さえているスクーパ ーズを狙った。それを見たガジメが指示を出す。

「やつは、ゼクールたちを狙っている。 棒をビームで吹き飛ばして、 退避しろ。」

持って、様子を見ていた。ビームがあまり有効でないことはスクーパーズも同じだった。 効かもしれないが、散弾の有効性は低い考えた。りとは戻って戦車の砲塔の後ろに立ちリア銃を 離れらないため、 なビームが飛んできたが、ザトムとバンクスはぎりぎりビームを避けることができた。棒は ザトムとバンクスが離れると、 ルのビームで跳ね飛ばされてラフォーレの西側の壁に当たって床に落ちた。 柱の陰に隠れてりとの様子を見ていた。 棒を取りに行くことはできなかった。ビーム攪乱幕のため、 ゼクールが棒をビームで吹き飛ばした。 ゼクールがガジメに尋ねる。 その瞬間、 リア銃の1発は有 りとはまりから リア充の強力 ゼク

とうします。

「我々の目的は遅滞だ。向こうが動くまで様子を見る。」

りともまりに相談する。

「どうしよう。 敵も接近できないみたいだけれど、 こっちも動けな

「あまり時間をかけると、別のスクーパーズが応援に来るかな。」

「やっぱり、棒とルナ銃を取りに行くしかないわね。」

「私も出てリア銃で援護するから、取りに行ける?」

でも、速いスクーパーズがいるから危ないよ。」

「大丈夫。そいつら、 りとのストー カーのようだから、きっとりとを追い かける。

そうか。私がそいつらを引き付ければいいのか。わかった。

まりはRWSを発射した。りとは、リア銃をまりに渡して、 に奥の柱に退避する中、 かった。まりは、 戦車からでて、通路の入り口まで進みながら散弾を乱射する。 ゼクールが叫ぶ。 少しだけ速度を落としてルナ銃 他の隊員がさら に向

武器を持っていません。 チャンスです。

そう言ってりとを追った。ガジメがゴモに指示する。

「おれも追う。 ゴモは、 射撃手を頼む。」

りとが後ろ確認した。

「2体しかいない。」

強敵の3体のうち1体はまりの方に向かったことに気づいた。

まりが散弾を射撃していると、 スクーパーズ1体が散弾をかわしながら自分の方に向 か つ てき

「りとが前に いる。ここで下がるわけにはいかないわ。

とき、 接近できないでいた。散弾の数発ならば大丈夫でも、 をかわしながら接近していったが、接近すると散弾の威力も上がり密度が高くなるためあまり ボードを自分の前に置いて盾にして、その1体に向けて散弾を集中して発射した。 ゴモにガジメから連絡が入った。 多数の散弾を受ける危ないと思えた。 ゴ モも ド

「棒人間がそっちに向かった。 丸腰だが抑えらきれなかった。

ったが、 したが、 てきたのである。りとはゴモに向かって真っすぐ向かっていった。ゴモは攻撃すべきかどうか迷 りとはルナ銃を取りに行くことをやめて、ガジメとゼクールの攻撃をかわして、まりの方に戻 退避することにした。りとはそれを見て、 再度ルナ銃を取りに取りに行こうとした反転

「まって、 つぎは3体でまりを攻撃するかもしれ ない。」

と思ったりとは再度反転して、まりに連絡した。

早く戦車の中に退避して。」

ガジメがジャモチャとバンクスに命令する。 を持っていなかったため、まりがりとにリア銃をわたし、りとが再び戦車の砲塔の後ろに立った。 まりに状況はわからなかったが、りとの指示通り、 戦車にのりこんだ。戻ってきたりとがルナ銃

「2体で、棒を外へ運び出せ。」

様子を見ていたジャモチャとバンクスが、 ムをかわして3体が追いつく前に棒を取り返せると考えた。 西側の壁に向かおうとした。それを見たりとは、 まりに告げる。

「少しだけ待ってて。 少しだけ、 戦車の中で待ってて。」

ガジメ、 リア銃をまりに返して、 ゼクー ル、 ゴモがビームを撃ってきた。 タイミングを計って西側の壁に向かってダッシュ りとはダッシュ したままビー した。 ムをかわ 。通路に

して、棒を取りに向かった。ゼクールは驚いた。

「3体のこの同時攻撃をかわすのか。」

ガジメは、ゼクールとゴモに命じる。

「ジャモチャがあけた穴から射撃手を攻撃するぞ。」

ゼクールが反対意見を言う。

「しかしそれでは、 棒人間が棒を取り返して、 ジャモチャとバンクスがやられます。」

「くそっ。」

ガジメには迷っている時間はなかった。 すぐに戦闘の目的を思い出して指示した。

「ジャモチャ、バンクス、棒人間が追ってくる。 作戦を中止して横に退避しろ。ゼクール、 ゴ

通路に攪乱幕をまけ。」

取って、まりのところへ急いで戻った。 たが、その直前に2体は左右に分かれて隠れた。そのまま進んだりとはルナ銃に達するとそれを りとは先行するスクーパーズ2体をビームを、 途中にスクーパーズがいたが、 かわしながら蹴り飛ばすつもりで接近して ビー ム攪乱幕が濃いため

攻撃してはこなかった。

「まり、

ルナ銃を取り返してきた。

「良かったわ。これで少し安心。」

「うん、手ぶらで突っ込むのは緊張した。 でも、 これで大丈夫。 今度は棒を奪われ ない。

りとはまた砲塔の後ろに立ったが、さっきよりかなり余裕があった。

「今はあいつらをラフォーレから追い出すこと。」

すこし時間が経過した。何も起きなかったため、りとが言う。

「向こうは攻撃を仕掛けてくるつもりはなさそうだから、 行ってくる。」

「でも、それは向こうの罠じゃない。」

「大丈夫、無理はしない。1体倒したら戻ってくる。 もし危なくなったら呼んで。

くる。」

「うん、わかった。待ってる。」

「あと、ビーム攪乱幕を吹き飛ばすファンもお願い。」

「わかった。」

ガジメが残った隊員全員に指示をする。

に攪乱幕の援護を頼む。」 て待ち伏せをする。ジャモチャ、一番前で棒人間が来たら連絡してしてくれ。 い。連絡したら隠れろ。 「棒人間が棒を取り戻した状況では、こちらから攻撃を仕掛けるのは無理だ。 攻撃は俺とゼクー ル、 ゴモが担当する。 他の隊員は、 必要と判断した時 攻撃はしなくてい 遅滞のため、

「了解しました。」

いか、 退路を確保するんだぞ。 それと、 ピ ム攪乱幕のタンクの場所を覚えて、 逃げるとき

には有効に使え。」

「わかりました。」

全員がそう答えて配置に着いた。

階段のあたりにスクーパーズがいなかったため、りとはゆっくりと通路の方に向か 通路

方のをのぞいた。通路がビーム攪乱幕で煙っていた。

「まり、ファンをお願い。」

一了解。」

Tー34に備え付けられていたファンが作動して、後ろから風が来た。そして、 通路の攪乱幕が

少しずつ晴れて行った。通路の方を覗いたが、 スクーパーズは見えなかった。

「待ち伏せをするつもり。」

通路だけ晴れていると不利と思って、まりに連絡する。

「ごめん、ファンを止めて。スクーパーズは隠れているみたい。」

「わかった。無理はしないでね。」

うん。

部屋から流れ込む攪乱幕のため、また、通路が煙っていった。

ゼクールがガジメに話しかける。

「慎重ですね。」

「待ち伏せをしているのが分かっているようだ。 だが、 そのうち仕掛けてくる。」

「その時がチャンスですね。」

「ああ、今度はあのビームが出るタンクを自分から離すようなことはしないと思う。今度は我々

で近寄って3方向から攻撃する。」

「了解です。」

りとが通路の左端をゆっくりと進み始めた。 ジャモチャがガジメに報告する。

「棒人間、前を通過しました。」

「了解。奥へ下がっていてくれ。」

「了解。

ジャモチャが奥に下がって行った。そのとき、攪乱幕の煙が乱れたことを、 りとが気付いた。

して、そちらを良く見るとスクーパーズが見えた。

「普通のやつ。でも、あれを追えば、あの3体が出てくるかもしれない。

りとは、そのスクーパーズに迫って行った。ジャモチャもそれに気付いた。

「棒人間!」

ガジメに連絡した。

「棒人間、こっちに来ます。」

「いそいで、退避しろ。」

に出てきた。みんながいる方向にりとがいたので、反対側に逃げるしかなかった。 言われるまでもなく、ジャモチャは商品を挟んで棒人間の脇を通って通路に出た。 まりに連絡する。 棒人間も通路 それを見たり

「まり、ごめん。1体がそっちにいった。」

「わかったわ。」

チャは死角になっている下側にかわして、 まりは、RWSで通路側を狙う。 に射撃を止めた。りとから連絡があった。 スクーパーズが1体来たので、それに向けて射撃した。 そのまままっすぐ進んだ。まりは、 りとが見えた瞬間 ジ ヤ

「まり、ありがとう。あとは任せて。」

ジャモチャは、低空を必死に逃げる。

「こんなところでやられてたまるか。リコのかたきを討つんだ。」

しかし、棒人間がどんどん迫ってきた。三日月の部分を星の部分に固定したアクセサリー

つぶやいた。

「リコ、俺に力を貸してくれ。」

ゼクールがガジメに進言する。

「ジャモチャを助けに行きましょう。\_

だが、ガジメは苦渋の決断を下す。

「こちらを誘いだす。棒人間がジャモチャ1体を追いかける理由はそれだろう。 いま出ていくと、

こっちが不利だ。」

ジャモチャもそれは分かっていた。

みんなちゃんと隠れてるな。 よかった。 じゃあ、

せて、棒人間の方に加速させた。りとは、店のものをあまり壊したくないため、それを上手にか わしながら進んだ。それを見たジャモチャは驚いた。 ジャモチャは、逃げながら、スクープビームで店のものを手当たりしだい引き寄せると、反転さ

「これをかわせるのか。」

矢を報いることを考えていた。ジャモチャは、最後にまた店のものを引き寄せてりとの方に飛ば りとは、飛んでくるものをかわすため接近が遅れたが、スクーパーズのすぐそばにまで接近して した瞬間に横から撃つつもりだった。 した。そして、 いた。りとはこのスクーパーズを早く片づけてまりの所に戻ることを、ジャモチャはなんとか一 一番たくさんの物を飛ばした後にディプレイの棚の後ろに隠れた。棒人間がかわ しかし、冷静に見ていたりとはそれに気付いていた。

「あの後ろにスクーパーズ。」

てしまった。 そして、棚ごと棒で真っ二つにした。真っ二つにされたジャモチャはビー ムを放つことなく消え

「リコ!」

他の隊員もその最期の声だけ聴くことができた。ジャモチャが消えた床には、三日月の部分と星 の部分が二つに切り裂かれて分かれたアクセサリーが落ちていた。棚が倒れた衝撃でアクセサ リーがまた転がって、 壁の隅で重なって止まった。

まりのところに戻ったりとが言った。

「1体片づけてきた。商品が散乱しちゃったけど。」

「お疲れ様。片づけはお店の人に任せましょう。 私たちじゃ配置が分からないし。

「うん、今はスクーパーズを追い出すことが先。」

ゼクールが上申する。

「今度は私が前の見張りに着きます。やり過ごせたら、 後ろから攻撃できます。 そうでない場合

も、私らならば逃げることはできると思います。」

「分かった。頼む。」

ゼクールが前方の店の中に潜んで前の様子を見始めた。

りとがまりに尋ねる。

「ことこは大丈夫?」

「うん、連絡は取っているけど、 周りにスクー パーズが少しいても、 今は様子を見ているだけっ

~ ∟

「そうか。良かった。」

「スクーパーズはこの階と、後は上の方の階にいるみたい。」

「こちらを攻撃してくるのは、あいつらだけということ。」

「そうみたいね。」

「あいつらさえ、何とかすれば、ラフォーレを奪還できるね。」

「うん。普通のスクーパーズならば、私でもなんとかできる。 二人で追い出しましょう。」

「わかった。今はあいつらを1体1体片づけていく。」

「ごめんね。りとにばっかり無理させて。」

「ううん、私が始めたことだから。」

「がんばって。」

「ありがとう。」

そう言うと、りとは、また通路の方に向かった。そのとき、ワクチュンに連隊から連絡が入った。

ガジメに伝える。

「戦艦の旋回主砲の準備ができた。 第111分隊は、直ちにその護衛にあたれ。とのことです。」

「そうか。何とか間に合ったか。」

そして最後に連隊長からの伝言がありました。遅滞戦闘ご苦労だった。 まだ、苦しい戦

闘は続くが、感謝する。とのことです。」

「もったいない、 お言葉だ。ゾロモ、ジャモチャ、 ガビーを失ってしまったが、 ここから残った

みんなを無事に連れ出すぞ。」

その時見張りをしていたゼクールから連絡が入った。

「棒人間来ます。目の前を通過していきました。」

「くそっ、こんな時に。ゼクール、戦艦主砲の準備が整った。建物からの撤退命令が出ている。

「わかりました。私がおとりになります。 隊長は残りの隊員を撤退させて下さい。」

「いや、おれがやる。お前は撤退しろ。」

もう、 隊員を失いたくないガジメは、棒人間に向けて突撃していった。

「竹下通りで集合だ。全員、退避しろ。ゴモ、撤退の指揮を取れ。」

他の分隊の隊員も建物の各所にいるため、ガジメは3分は時間を稼ぎたいと思っていた。

りとは前からスクーパーズが接近してくるのを見て、後ろを気にした瞬間、 後ろからビー ムが

飛んできた。それを棒で防いだ。

「2体で挟み撃ち。もう1体はどこ?」

が、まりから離れたくないため、牽制だけして急速Uターンして後ろのスクーパーズの方に向か りとは、 後ろからのビームをかわしながら、 全速で前のスクーパーズに向けてダッシュした。 だ

った。ガジメが叫ぶ。

「ゼクールそっちに行った。」

けて、 ガジメの言った通り、ビームが出るタンクをあまり離さずに接近してきた。ゼクー 棒人間をやり過ごした。ガジメとゼクールが横に並んだ。 ゼクー ルがガジメに言った。 ルは店側に避

「あと、2分は稼ぎたいですね。」

「お前の言う通りだ。」

「じゃあ、行きましょうか。」

「ああ。」

そう言った瞬間、ゼクールが壁の穴の方に飛ばされ、建物の外に出てしまった。 ガジメがゼクー

ルに逆スクープビームを放ったのである。ゼクールが叫ぶ。

「分隊長!」

「お前は、主砲を守れ。時間を稼ぐのは俺一人で十分だ。」

そう言い残して、分隊長は単身、棒人間の方に向かって行った。

「分隊長!」

兵をまとめて、建物のそばの物陰で待機した。しかし、3分経ってもガジメが出てこなかったた ゼクールは、後ろからそう声をかけたが、 め竹下通りの方に向かっていった。 自分の役割を認識して、振り返り第11 1分隊の残存

ガーチューンが第111分隊のゼクールたちの労をねぎらう。

「ご苦労。戦艦主砲の移設は完了した。 これより、 明治通りの防衛線の敵散弾発射装置を破壊す

る。お前たちには、その援護を命じる。」

「はい。わかりました。全力で戦艦のビーム砲を守ります。」

涙を流している隊員を見て、哀悼の意を述べる。

「ゾロモ少尉が戦死したそうだな。3台の移動兵器の活動を停止させ、 ゾロモしかできない任務

を全うした。連隊長として、 ゾロモ少尉に天の川銀河勲章を推薦することにした。」

「はい、有難うございます。ゾロモ少尉も喜んでいると思います。」

「ガジメはどうした。」

ゼクールが答えた。

「全員が撤退する時間を稼ぐためと言って、隊長が私をビームで押し出して、 に向

かって行きました。」

「それで、どうなった。」

「最初、ビームの発射音があり、戦闘があったと思われますが、すぐに止んでしまいました。 建

物の外で待機しましたが、 3分経っても出てこないため、 命令に従いここに集合しました。」

「そうか・・・あいつが・・・」

「第111分隊はどのようにすればよろしいでしょうか。」

「ガジメがいなくなった以上、ゼクール軍曹、 お前が指揮を取れ。 主砲を棒人間から守るんだ。

お前の気持ちも分かるが、相手を倒すより、 今は主砲を守る方を優先してくれ。」

「わかりました。王女様を助け出すことを優先させます。 その後で敵を殲滅し、 ガジメ隊長の仇

を討ちたいと思います。」

そのとき、突然、後ろから声がかかった。

「おいおい、勝手にスクーパーズを殺すなよ。」

第111分隊のみんなが声の方向を見て、喜びながら叫んだ。

「ガジメ隊長!」

ガーチューンも顔をほころばせて呼びかけた。

「ガジメ、無事だったか。」

のタンクを破壊して、隠れていました。棒人間が居なくなったのを確認するのに手間取ってしま 「連隊長、遅れて申し訳ありません。棒人間を攻撃すると見せかけて、残っていたビー ム攪乱幕

い戻るのが遅れてしまいました。」

「そうか、さすがだな。 遅れたことは問題ない。 ただ休む暇もなく申 し訳ないが、 主砲の守備に

ついてくれ。」

「了解です。ゼクー ル、 ゴモ、 俺について来てくれ。 他の隊員は我々の近くで身を潜めて、

があったら知らせてくれ。」

全員が元気に答えた。

「わかりました。」

ゼクールがガジメに話しかける。

「隊長、幽霊じゃないですよね。」

「何を言っている。ちゃんと体に色がついているだろう。」

「ほんとですね。」

ゴモがゼクールに話しかける。

「私は、最初から隊長は無事だと思っていましたよ。」

「本当か。さっき、しょんぼりしていなかったか。」

「それは、ゾロモ・・・」

途中まで言いかけて、2体はそれ以上話すことができなかった。 ガジメが注意する。

「おしゃべりは、そのぐらいにしろ。 油断できる相手ではないぞ。 それに王女様を助けた後、

ロモの仇を討つんだ。」

ゼクールが答える。

「申し訳ありませんでした。ゴモ、集中だ。」

「わかりました。」

3体は、ラフォーレと竹下通り途中のビルの陰に隠れた。すぐに、運んだ戦艦主砲による攻撃が

開始されてようとしていた。アルドアが指示をする。

「ビーム攪乱幕の濃度を調整する。こちらの砲の威力をなるべく落とさないため、 敵の散弾の攻

撃を無力化できるぎりぎりの濃度にする。」

技術参謀直下の部隊員が濃度の調整を行う。

「濃度調整終わりました。」

「ありがとう。 正面の敵の散弾発射装置を破壊しだい砲を押し出す。敵の攪乱幕を散らすファン

の動作も始まる。 防弾版も使うが、濃度調整に最新の注意を払ってくれ。」

「はい。」

「目標位置入力。これは、第3連隊や我々の連隊の第4中隊の犠牲の元に得られたデータだ。

対にミスをするな。 彼らの犠牲が無駄になるばかりか、 われわれも無事では居られなくなる。

「わかりました。」

砲の位置や、散弾発射装置の位置が入力された。距離が短くビー ムは直線に飛ぶため、 補正が不

要で入力は短時間に終わった。

「入力完了しました。」

「早いな、二重にチェックはしたか。」

「はい、三重にしました。」

「そうか。では、この状態で待機。」

「わかりました。この状態で待機します。」

アルドアがガーチューンに連絡する。

「準備はすべて終わりました。後はエネルギーを注入し、安全装置を外して引き金をひくだけで

う。計画にしたがって敵の攻撃装置を破壊してくれ。 「わかった。第11連隊の到着にはまだ少し時間がかかるようだが、先に敵の防衛線の破壊を行 指揮はお前にまかす。

「わかりました。」

要があるかもしれないと思い、 を見ることにした。 ガーチューン自身は、ラフォーレにいる敵を抑える任についている第111分隊と協力する必 第111分隊の後方、 ラフォー レと竹下通りの中間で両方の様子

アルドアが発射を指示する。

「初めに、3台のうち2台で攻撃する。 1号砲が左側、 2号砲が右側を攻撃する。 エネルギ

「エネルギー注入開始。 エネルギー注入正常。 エネルギー注入完了しました。」

「安全装置解除。」

「安全装置解除しました。」

が高いものから攻撃するように。」 「この砲は2秒間隔で撃てる。 照準選択は各班に任せるが、 敵が反撃してくる場合、 脅威レ べ

「了解です。反撃があった場合は脅威レベルが高いものから攻撃します。」

「よし。では、各班攻撃開始だ。撃て!」

「攻撃開始。」

戦艦主砲にによる攻撃が始まった。 とも砲撃を止めた。アルドアが戦果を確認する。 ることはなかった。少しして、現在位置から攻撃できる防衛線の発射装置を破壊したため、 ていった。散弾が砲に向けて発射されたが、 1基また1基と建物に置かれていた散弾発射装置を破壊し ビー ム攪乱幕のために、 大きなエネルギーが到達す

に気をつけろ。」 「よし、ここから見えるものは全て破壊した。5メー トル前進するぞ。 ビー ム攪乱幕の班は濃度

「はい、わかりました。」

各砲の班は主砲を5メートル前進させ、 再度発射体制に入った。 アルドアが命じる

「撃て!」

乱幕のタンクを撃って、そのまま隠れてしまった。 つけることがすぐにはできそもなかったため、 スクーパーズが撤退していくとき、1体のスクーパーズがりとに向かっていったが、ビー りとはまりのところへ戻ることした。 ビー ム攪乱幕が濃く、 そのスクーパーズを見

「まり、まり、スクーパーズは撤退したみたい。」

「それは良かったわ。りとは大丈夫?」

た。跳ね返ってくる衝撃も大きくなったけれど、 「うん、大丈夫。ことこのサイコレセプタの改良のおかげで、 私が頑張ればもっと速く反応できそう。」 ボードやルナ銃の反応が早くなっ

「そう、 それは良かった。 これからどうする。」

「まりとことこはラフォーレの防衛力の強化をお願い。 その間、 私はまわりを監視する。

「わかった。 ことこ!ことこも大丈夫?」

「大丈夫だよー。そこに散弾の発射装置を設置するね。 それで、 ラフォー レの奪還完了だね。」

「うん、 やったわ私たち。 と言っても、 りとのおかげだけど。」

「ううん、戦車はことこのおかげだし、まりがここにいてくれて、帰れる場所があって助かった。

人じゃできなかった。」

「りとの役に立って良かったわ。」

ことこもその意見に賛成する。

「3人いれば、

宇宙最強だよー!」

「うん、ことこの言う通り。」「そうだわね。」

まりが作業の開始を告げる。

「じゃあ、私はことこのところに行って穴を塞いでくる。 りとはまわりの監視をお願い ね。

「わかった。二人から少しだけ離れたところに居るから。」

「そうだわね。 その方が安全ね。 じゃあ、 いっしょにことこのところに行こう。」

手順で、まりとことこが2.5階で作業し、 設置を行った。 きな音がした。ラフォーレとは直接は関係なさそうだったが、そんなに離れてもいなそうだった。 りとは急いで、 とが1階のフロアを確認し、 ぐ作業を開始することにした。戦車についているビーム攪乱幕を吹き飛ばすファンを回して、り 1階に着くと、ことこが戦車から出てきた。3人は手を取り合った。そして、ラフォーレを寒 まりとことこのところに戻った。 設置の間、りとは1.5階に上がって、そのフロアを確認していた。そのような 、その後、 まりとことこが、 りとが3階のフロアを確認しているときに、外で大 りとがことこに尋ねる。 1階フロアの壁の修復と散弾発射装置の

「なんの音かわかる?」

「スクーパーズのビーム砲の音かな。なんか、防衛線の散弾発射装置が壊されていってるよ。

撃しているけど、 だめみたい。」

まりが同意する。

「わかった。

とりあえず、

屋上に上がってみよう。\_

散弾発射装置も反撃しているが、 ら強力なビームが発射され、防衛線の建物の散弾発射装置が壊されていくのが見えた。防衛線の 3人が屋上に上がった。 建物の周りにスクーパ ビー ム攪乱幕に邪魔されて、 ーズはい なかった。 スクーパ 下の方を見ると、竹下通りか ーズの砲まで届かないよ

うだった。まりが尋ねる。

「りと、どうする。」

「あそこに行ってビーム砲を壊してこようと思うけど、たぶん、あいつらがどこかに隠れている。

私が行くと、二人が心配。」

「私は大丈夫。ここで、りとを援護する。ことこには戦車の中にいてもらおうか。

「うん、それがいいと思う。ことこ、戦車の中に戻ってて。」

「えー、大丈夫だよ。」

「お願い。」

「わかったー。りとちゃんがそう言うなら、戦車の中にいるね。」

「じゃあ、ボードに乗って。戦車まで連れて行くから。」

「わかった。」

まりが言う。

「私はここで見てるわね。」

「有難う。でも、あいつらが来たら、私に連絡して逃げてきて。」

「一発撃って、当たらないようならば、そうする。」

「お願い。じゃあ、行ってくる。」

ことこをボードに乗せて、りとが階段をつたって1階へ向かった。 ことこは、 りとを信用し てい

るのか、ボードで飛ばしても喜んでいた。

「すごいすごい。」

一階でことこが戦車に乗った。

「よいしょっと。」

「私かまりが来るまで、戦車から外に出ないでね。」

「わかったー。」

「じゃあ、また。」

りとは、ボードで屋上に急いで上がって行った。

備している部隊に告げた。 そして同時に、防弾版によって守られた通路を構築していった。そのような状況でも、 ラフォーレ屋上で棒人間を視認したガーチューンは安心できなかった。 しづつ砲を押し出し、 アルドアたちの防衛線破壊作業は順調に進んでいった。正面の散弾発射装置を破壊すると、少 防弾版やビーム攪乱幕で守りながら、 左右の発射装置を破壊していった。 第111分隊や砲を守 少し前に

「いつ、棒人間が出てくるかわからない。油断するなよ。」

屋上に戻ったりとは、まりと作戦を立てていた。

「スクーパーズのビーム砲を壊すことが最優先。」

「ここからじゃ、 建物の陰になっているから、 竹下通りまで行かないと。」

「わかってる。」

「じゃまをするのは、あのグループかな。」

「たぶん。あのビルの裏側あたりにいると思う。」

「どうする。」

「まりは、あの辺りにビーム攪乱幕を撃って。その煙に隠れてビー ム砲に接近する。」

「わかったわ。」

「無理はしない。一撃したら戻ってくる。」

「了解。気を付けてね。帰りもビーム攪乱幕撃つから。」

「ありがとう。まりも気を付けてね。」

「わかってるって。それにスクーパーズ化が進んで、バリヤ も強化されているわ。

ビームが当たっても大丈夫そう。」

「うん。早く終わらせないと。」

「頼むわよ、PARKの王子様。」

「それ嬉しくないって。せめてジャンヌダルク。」

「それじゃあ、最期に火あぶりで死んじゃうわよ。\_

「そうか。」

「りとは、りとね。それ以外の何物でもないわ。 頼むわよ、 PARKのりと。」

「うん。じゃあ、行ってくる。」

まりがビーム攪乱幕を撃ち始め、 りとが砲がある方向へ飛び出した。 予想通り、 建物の陰から3

体のスクーパーズが出てきた。

ラフォーレ屋上からビーム攪乱幕が発射されるのを見て、 ガジメが作戦開始を指示する。

「来るぞ。」

ゼクールがりとが出てくるのを確認する。

「来た。」

ガジメが指示をする。

「よし、三方から囲んで攻撃だ。三方ならば、正面に味方はいない。

過して、スクーパーズの三角形の中心めがけて突っ込んでいく。 3体が三角形になり、りとを向けて連続してビームを放つ。りとはビームが到達するより先に通 ゼクー ルがつぶやく。

「速い。」

りとが三角形の中心を過ぎようとするとき、ガジメが命じる。

「追え。」

ゼクールはすでに棒人間を追い始めていたが、追いつけそうもなかった。 正面にガ チュ ンが

現れた。

とビームをかわしていった。後ろから見ていた、ガーチューンがつぶやく。 はじかれてしまった。すると、砲の周りにいたスクーパーズからビームの射撃があったが、軽々 りとはそう思ったが、そのまま突っ込んでいった。 ・ンを通り越した。4体のスクーパーズを引き連れたまま、 攪乱幕はそれほど濃くなかったため、すぐに砲が1つ見えた。 ビームが飛んできたが横にかわし、ガーチュ りとはビーム攪乱幕の中に入ってい 砲身にルナ銃を放ったが、

「戦艦の砲兵じゃ、棒人間に対応するのは無理だ。」

離れて逃げて行った。 た8体をホースで切断した。その8体は消滅していった。それを見た残りの砲兵たちは持ち場を りとは棒に付いているホースをルナ銃のタンクのスラスタで高速に操って、ビーム砲の前 戦艦のダウザ艦長から砲兵の指揮を委任されていたアルドアが命じる。 61

「逃げるな。立ち向かえ。」

後、棒を突き立てて砲身に穴をあけようと急降下していった。 しかし、接近戦をしたことがない戦艦の砲兵には戦うことは無理だった。りとはすこし上昇した ガジメが指示をする。

「棒人間が、ビーム砲を壊す瞬間をねらう。」

棒をつかんで逆立ちして避けた。りとの真上にいたガ た。りとがビーム砲の砲身に棒を突き立てた。同時に、3体がスクープビームを放った。りとは、 との戦闘経験から得た感で、ゼクールが叫ぶ。 最も速かったゼクールがビーム砲の向こう側に行き、 ーチューンがビームを放つ。今までのりと 棒人間の上空で三角形になる陣形を取っ

「ビーム、蹴られます。」

のビー れ、ガーチューンに向かった。 ゼクールの予想通り、りとはビームをガジメの方に蹴り飛ばした。ゼクールの予告があったため、 ンは無言だった。ガジメは、 ガジメは避けることができたが、 ムは蹴られ、再度、ガジメの方に飛んで行った。ゼクールのビームはボードで跳ね返えさ 2体ともかわそうとしたが、体の端の方にあったた。 ガーチュー りとは体勢を戻した。 ゼクールとゴモがビームを放った。 ゴモ

「いてっ!」

き抜き、そのまま、ラフォーレの方に飛んで行った。ガーチューンが指示をする。 とだけ言った。 反射でビームが弱まっていたため、 2体ともかすり傷程度だった。 りとは棒を引

「射撃手の攻撃もある。追撃はよせ。再度、待ち伏せる。」

ガジメがガーチューンに言う。

「砲を1つ破壊されてしまいました。」

次はなんとか止めないと作戦が成り立たない。 ア ルドア、 予備の砲を前に出

の破壊は続けてくれ。」

アルドアが答える。

「わかりました。」

ガジメが、ゼクールとゴモに命じる。

「三角形での包囲では間に合わない。相手が速すぎる。」

ガジメがガーチューンに上申する。

「壊れた砲、小さな穴があいただけですので、穴をできるだけ見えないようにして、 移動して撃

っているように見せかけていただけませんか。」

「それを棒人間に攻撃させるのだな。」

「そうです。 私たちは砲の近くにいて、棒人間が攻撃するところを狙います。\_

を外から見えないようにしろ。大至急だ。そして、撃っているように見せかけるため、 に兵を配置しろ。もう一つ、 「わかった。そうしよう。アルドア、さっきの命令は取り消す。2つの砲を下げろ。この砲の穴 私とカジメが隠れる場所を作ってくれ。 そこで待ち伏せる。」 砲の周り

アルドアが答える。

「わかりました。」

ゼクールがガジメに問題点を指摘する。

「しかし、誰も迎撃に上がらないと怪しまれます。 私とゴモは迎撃にあたります。

「頼む。そうしてくれ。 無理はしなくていいぞ。砲の近くに来たら、 俺が至近距離からビ

かましてやる。」

「俺もガジメの反対側で待ち伏せる。」

ガジメがガーチューンに言った。

「しかし、連隊長。連隊長が倒れると指揮は誰が。」

「私が倒れたら、もうすぐ来る第11連隊の指揮に入ってくれ。もう半分以上の隊員が殺されて

いる。私が先頭に立たんでどうする。」

「わかりました。連隊長は私がお守ります。」

「いや、ガジメはそれより棒人間を倒してくれ。」

「こんな戦闘は、ビギール星での戦闘以来ですね。あの時は、 デストロイヤー ズが我々の3倍い

ました。」

「そんなときもあったな。私がまだ中隊長のころか。」

「はい、私は上等兵で、 いまのゼクールみたいな感じだったと思います。」

「そうだな。それでも生き残った。今回も成功させる。」

「はい。」

「おしゃべりはここまでにして、作戦に取り掛かろう。」

「わかりました。 あっ、ゼクールとゴモは配置についていますし、 アルドア少佐もほぼ作業を終

えています。」

「おしゃべりしていたのは、 年寄りだけか。 では我々も配置に付くぞ。」

「刺し違えても倒します。」

「ああ、彼らを死なせてはいけないな。」

「はい。」

ガーチューンとガジメは、覚悟を決め少し微笑みながら、 アルド アが作ったビー ム砲の隠れ

所に入った。ガジメがつぶやいた。

「扉の開閉も完璧だ。これならば奇襲をかけられる。」

ラフォーレに戻ってきたりとに、まりが話しかける。

「どうだった。」

「ビーム砲の1つに穴をあけてきた。」

「すごい。りとが行ってから防衛線へのビ 砲の攻撃がやんでいる。」

「よかった。」

「じゃあ、もう一度行ってくる。」

「休まなくて大丈夫?」

「うん。」

「わかった。ビーム攪乱幕を撃つわね。」

「ありがとう。」

そのときである。竹下通りの入り 白から、 多数のスクーパーズが入ってきた。

第8連隊の隊員が喜んで叫んだ。

「援軍だ!」「第11連隊だ。」

その声を聞いてガーチューンが隠れていた場所から出てきた。

「モーガンのやつ、やっと来たか。」

ガーチューンが1000体ほど、 ほぼ連隊の全数がいることを確認して、第11連隊と作戦での

分担を考える。

「第11連隊の隊員は、 この敵と戦い慣れていないから、占領したところの防衛が精一杯だろう

な。早くモーガンと話して、我々は総力を挙げて王女様の救出に行かなくては。」

しかし、様子を見ていたガーチューンの顔色が変わった。 第 1 1連隊は広めの隊列であったが、

上空をゆうゆうとやって来ているのである。

「何だ、第11連隊のやつらのデーターを見てないのか。」

ガーチューンは連隊付きの通信兵を呼び出した。

「通信兵。第11連隊と連絡を取れ。内容は、やつらは普通の地球人とは違う。 そんなところを

飛んでると全滅するぞ。 至急、 地表近くのビーム攪乱幕の中に隠れろ、

他のスクーパーズ兵も上空のスクーパーズに向かって叫び始めた。

「危ないぞ!。早く降下しろ。」「建物の陰に隠れるんだ。」

ゼクールがガジメに進言する。

「ビーム攪乱幕を撃っていた射撃手がラフォー レ屋上にいます。 このままだと、 やつの散弾に第

11連隊がやられていまいます。牽制に行きましょう。」

ガジメはビーム砲を見ながら、ゼクールを制止する。

「いや、俺たちに任務は、あの砲を守ることだ。」

そのときである。 ラフォーレの屋上から、 立て続けに散弾の発射があった。 ゼクー ル が息を漏ら

「ああっ。」

ばかりか、傷つくものもいなかった。ゼクールは少し驚いた。 しかし、そのスクーパーズの部隊の隊員は、 その強力なサイコ バリヤー によって、 消えるも

「えっ、すごい。」

た大きな蟹爪フライのような生命体が飛び出してきた。そして、強力なビー そして、ラフォーレの屋上から強力なビームが発射された。 少し後ろに飛ばしたが、そのハサミの部分ではじかれてしまった。それを見た第8連隊の隊員が そのとき隊の中から、 ムは、 その生命体は に乗っ

「蟹爪ふりゃー様!」「第7連隊だ!」

そう、 スクーパーズ最強の第7連隊がやってきたのである。 ガーチュー ンも驚い てつぶやい た。

「第7連隊!大本営がよこしたのか。 それにしては早いな。 しかし、 これで助かった。」

ゴモがゼクールに向かって叫ぶ。

「第7連隊です。」

「そうだな。 さすがに散弾ぐらいでは誰も傷さえつかない。 さすが第7連隊だ。」

「蟹爪ふりゃー様は、あの強力なビームも跳ね返します。」

ああ。」

「すごいです。これで、王女様も安心でしょうか。」

「うん、たぶん。でも。」

棒人間が超高速で竹下通りの上空へ向かっ ができた。それでも、高速な棒人間の動きについていけるか一抹の不安が残っていた。その直後、 ゼクールには第7連隊が散弾をものともしないところを見て、 ていくのが見えた。 それを見たゼクールがゴモに指 かなり安堵の気持ちを抱くこと

「棒人間だ。行くぞ。」

示をする。

「はい。」

「棒人間と砲の間に割って入るんだ。」

「わかりました。」

ム砲を守る任務は変わらないため、 ゼクール、 ゴモがりとと砲の中間の位置に向かっていった。 ガジメも同じ所へやってきた。 第7連隊が登場しても、 戦艦の

PARKの地下で戦況を見ていた、エビふりゃ も驚いて叫んでい

「姫様、第7連隊、第7連隊でございます。」

が台無しになるからですな。」 「そうですな。 でも、 おかしいですな。父上が第7連隊を寄こすはずはないと思うですな。

「どうなさいますでございますか。」

「そうですな。さすがに、3人では第7連隊には敵わないですな。 作戦はここで打ち止めにする

「それがよろしいと思うでございます。

しれないですな。戦闘を停止しても、 ん、まりちゃん、ことこちゃんともスクーパーズの仲間になるですな。 「父上にはスクーパーズや天の川銀河のみんなのため、兵士の犠牲を厭うなと命令されて でも犠牲は少ない方がいいですな。ここまで情報が集まれば、 そのままアマツマラは持っていてもらう必要があるです 戦闘を止めても、 ただ、時間はかかるかも りとちゃ

「わかりましたでございます。どうやって戦闘を止めれば良いでございますか。」

稼ぐですな。」 は、たぶん敵わないので一度PARKに戻ってくるですな。 - チューンに、 第7連隊が戦闘を停止しないと私が殺されると連絡するですな。 りとちゃんたち 「そんなことは自分で考えるですな、と言いたいところですな。でも、しかたがないですな。ガ あとは、PARKでなんとか時間を

ださいませ。それならば、 「わかりましたでございます。早速取り掛かるでございます。王族専用の緊急通信機をお貸しく スクーパーズの全通信機が受信するでございます。」

「わかったですな。 はいですな。」

エビふりゃーが通信機のスイッチを入れ、 第8連隊を呼び出した。

「あー、もしもし、もしもし、侍従長のえびふりゃーです。 蟹爪ふりゃ ガーチュ ン、 聞こ

えていますか。あー、 もしもし。」

しかし、通信機が壊れて通話ができないようだった。

「どうしたですな。」

「通信機が壊れているようでございます。」

「乱暴には扱っていないですな。

「秘密保護回路が働いて、通信機自体が自分で自分を壊したようでございます。」

故障ですな?」

「直せるですな?」

「自己破壊ですので直すことは不可能かと思うでございます。」

秘密保護回路が働いたですな。」

でございますが、 「わからないでございます。デストロイヤーズのような敵が触れば、壊れる仕組みになって 地球人では何もできないので壊れない設定でございます。」

「デストロイヤーズが触るはずないですな。オンボロですな。」

「はい、おっしゃる通りでございます。どうするでございますか。」

もそんなに出ないと思うですな。」 「直接行くわけにはいかないですな。今は見てるしかないですな。戦闘はすぐに終わって、

考えれば、そうするしかなかった。 すぐに戦闘を止める機会を失ったエビふりゃーは残念だったが、 「直ちに戦闘を止められないのは、本当に残念でございます。しかし、そうでございます。」 みさが危険な目に会うことを

まりがビーム攪乱幕を撃とうとしたとき、りとがそれを止めた。

「原宿駅の方から、またスクーパーズが入ってきた。」

進んできた。 まりがそちらを見ると、多数のスクーパーズが囲いの中に入り、上空を広めの隊列を組みながら

「ヨーロッパにいたスクーパーズかな。」

「たぶん。」

「また、1000体ぐらはいそう。でも、 11 い的。 散弾で攻撃するわ。」

「お願い。私はまりをカバーする。」

りとがまりの少し前に出る。まりがリア銃を構える。

「りと、ありがとう。行くわよ。」

そう言いながら、散弾を数回発射した。しかし、スクーパ ーズは消えることも落ちることもなく、

そのまま飛んでいた。

「散弾が効かないわ。 ビームで撃ってみる。 モード6ポジション1。 エネルギー充填。

スクーパーズがゆっくりとしかし確実に近づいてきた。ただ、まりの攻撃をあまり気にしていな いようだった。

「エネルギー充填完了。発射。」

ビームがスクーパーズの集団の方に飛んで行った。 しかし、ボードに乗った蟹爪ふフライの よう

な生物が出てきて鋏の部分で弾かれてしまった。まりが、 驚いてりとに話しかける。

「何あれ。蟹爪フライ星人?」

「その話は後でいい。 何かヤバイ気がする。 まり、 ことこを連れてPARKまで下がって。

その時間を稼ぐ。」

「一人で大丈夫?」

「何とかする。」

出てきた。まりは、りととそのスクパーズの間にビーム攪乱幕を撃つことにした。出てきたスク ーズはりとを直接追うことはせずに、 竹下通り上空の方に飛んで行った。そうすると、建物に隠れていた数体のスクパ ビーム砲とりとの間に位置しようとしていた。 ·ズが

蟹爪ふりゃーがその様子を見ていた。第7連隊が撃つと、 性があるため、 りとは竹下通りの上を通り、新しいスクーパ スクープビームを撃てないでいた。 ーズの集団に接近していった。 竹下通りにいる第8連隊に当たる可能 第7連隊の連隊長

「あれがデータにあった棒人間か。 いい位置取りだ。 こちらが射撃できないようにしてい る Ō

弾ならば大丈夫だが集束したビームに当たると、第7連隊隊員と言えども耐えきれない。気を付 けるんだぞ。」 りとは高速で第7連隊に接近してい 「棒人間は私が引き受ける。 ダイル、指揮をとって、 た。 蟹爪ふりゃ ーが第1中隊のダ ラフォ レ の屋上に イル中隊長に指示を出す。

ダイルが返事をする。

「わかりました。連隊を率いて射撃主を倒します。」

一頼む。

かうのが見えた。 りとは、蟹爪ふり の方に向かっていった。 しかし、 普通のスクパー ズはラフォ レ

「まりが。」

先頭で隊を先導するスクー パーズが見えた。蟹爪ふりゃーと交戦するまでに、 まだ0.

「あれがリーダ。」

そのスクパーズに向けて、 の鋏がぶつかりあった。 甲高い音がした。そのまま少し離れた。 ルナ銃で攻撃した。射撃が終わると同時に、りとの棒と蟹爪ふり 隊員が叫ぶ

「ダイル中隊長!」

離れたところをすれ違って行った。りとはUターンしながら、向かって来るスクーパーズをルナ 銃で1体1体を連続して攻撃した。数体が消滅した。蟹爪ふりゃーも、 今度はルナ銃で蟹爪ふりゃーを攻撃したが、かわされてしまった。りとと蟹爪ふりゃーはすこし まりの方へ向かうものがいなくて少しほっとした。 たため、その場に止まるもの、逆に中隊長の仇を討つためにりとに向かうものがいた。 爪ふりゃーはUターンしながら、再度接近しようとしていた。りとは少しだけ集団の方を見たが、 後ろから撃たれたダイルは消えて行った。 いる状態を避けるために指示を出そうとする。 中隊長を失い命令をするスクーパーズがいなくなっ ただ、 まりはこちらを見ているようだった。 連隊の大部分が静止して りとと蟹

指示が終わる前にりとが迫って来た。指示を途中でやめて防戦に入る。 「ベナ、ダイルに代わって指揮をとれ。 壊すことはできなかった。 ーのボードに切りかかる。 蟹爪ふりゃーが指示を続ける。 お前らがここにいても役に立たない。 しかし、 りとのボード -と同じで、 りとは蟹爪の鋏をかわし ボードは装甲されて

「棒人間は私一人で対応する。 その他の隊員は全員で射撃手を攻撃しろ。 ベナ、 自分の位置は、

棒人間に分からないように行動するんだぞ。」

としたが、蟹爪ふりゃーは、 りとの蟹爪ふりゃーへの攻撃間隔が詰まってきた。りとは爪でないころもの方に切り 心配でだったが、 命令に従うことにした。 なんとかそれをかわした。第2中隊中隊長のベナは蟹爪ふりゃ つけよう が

「わかりました。射撃主を攻撃する指揮をとります。」

分に命中して、 りとは、棒と爪がぶつかる瞬間に、蟹爪のころもの部分に向けてルナ銃を射撃する。 ころもが少し焦げたが、 本体には影響ないようだった。

二人の戦闘を見ていたゼクールがガジメに話しかける。

えます。 「まずいです。パワーはともかく、 大丈夫でしょうか。」 スピードで負けています。 棒人間の方が余裕があるように見

「確かに、だんだん押されてきている。」

「援護に行きますか。」

「いや、 我々の任務は砲を守ることだ。蟹爪ふりゃー隊長にお任せするんだ。」

PARKで戦況を見ていたエビふりゃーが悲痛な声を上げていた。

「ダイルが。あのダイルが。」

兵学校を最優秀の成績で卒業したダイルは、初めから第7連隊に所属し、 エビふりゃーが第7連

隊で鍛えて成長させてきた。そのダイルが消えてしまったのである。

隊を先導して任務に当たっていたのに。 「こんなに悲しいことがありますでしょうか。あんなに真面目で一生懸命だったダイルが。 それが消えてしまうなんて。」

「りとちゃんを恨んではいけないですな。」

「はい、それは承知しているでございます。 みんなを騙しているのは、 我々でございます。

に悲しいことでございます。」

「休戦に持ち込むための何かいい方法はないですな。」

うに思うでございます。」 「私が行って参りまして、 話をつけてくるというのはいかがでございましょう。それしかない ょ

密がばれると反乱が起きて、スクーパーズ軍の一部がスクーパーズの王家を攻撃するかもしれ ないですな。 いですな。」 「みさも本当に戦いを止めたいんですな。でも、それでは秘密がばれる可能性があるですな。 そうすると、 この天の川銀河の内戦に発展するかもしれないですな。それは避けた

お怒りになられるでございましょう。わたくしめはともかく、 「そうでございますね。 どうしたものでございましょうか。」 千体以上のスクーパ ーズが亡くなっていますでございますから。 姫様と王家は絶対にお守りしない

りとと蟹爪ふりゃーの戦闘は続いていた。 レの方に向かうのに気が付いた。 りとはスクー パ ーズたちが蟹爪だけを残してラフ

追いかけることができずに、自分は竹下通りの方に落下していった。蟹爪ふりゃーはつぶやいた。 そらした。そして、そらした勢いで最大の力で棒人間の棒を弾いた。その勢いでりとは体勢を崩 棒を蟹爪に向けて、蟹爪の方に飛び込んでいった。蟹爪ふりゃーは、 りとは、蟹爪ふりゃーを今すぐに倒すのは無理と考えた。りとは蟹爪ふりゃーの上方に位置して、 しながら横に飛ばされていった。蟹爪ふりゃーが棒人間を追いかけてとどめを刺そうとしたが、 「また、まりの方。このスクーパーズの部隊の足を止めないとPARKに戻れない。」 その棒を払うため一度体を

そして、棒人間の方をみると、自分の飛ぶためのボードが棒から出ているホースに巻き取られて のである。 いるのが見えた。みさやエビふりゃーもそうであるが、スクーパーズは擬態すると飛べなくなる

「なんだ。」

「しまった。」

蟹爪ふりゃーはそう叫んだが、落ちていく他はなかった。

りとは巻き取ったボードをできるだけ遠くの方に放り投げた。 まりに連絡する。

「リア銃の準備をお願い。強いビームの方。」

「了解。」

「合図したら、 私に向けて撃って。 射線上に敵のリーダーがいるようにする。

「わかった。気を付けてね。」

「うん。」

ラフォーレに向かった隊員たちも、蟹爪ふりゃーが落ちていくのに気が付いた。

「蟹爪ふりゃー連隊長が、ボードを奪われ落ちていきます。」

対処する。そうしないと後ろから攻撃される。ここで対アムロディ用に準備した三日月陣形を使 「連隊長がボードを?連隊長は落ちたぐらいでは大丈夫だか。作戦を変更して、

「ここで、あのフォーメーションを使うんですか。」

「ああ、テストのためにもいいチャンスだ。全員、配置に着け。」

隊列をりとを焦点とした三日月状の形に整えた。りとがつぶやく。

「集中砲火する気。」

りとはルナ銃から目くらましのビーム攪乱幕を発射する。 ベナが号令をかける。

「射撃用意。照準。撃て。」

1000本ものスクープビームがりとの方に向かってくる。

りとは、超高速で後方に下がって、 ボードを盾にしてビームを防ぐ。 それを見ているゼクー ル が

「追いついていない。ビームを棒人間に集中できていない。」

りとは落ち着いて横に移動し、三日月の長手方向がラフォーレを向くように誘導する。三日月陣

形は方向転換に時間がかかるようだった。ベナが指示する。

「次は、照準を棒人間がいる位置の後ろ20メートルにずらせ。」

そのときりとは右側にビーム攪乱幕を発射した。

「照準を変える。攪乱幕の後ろあたりにビームを発射しろ。撃て。」

た。そして、三日月の先のスクーパーズの方に向けてダッシュした。 てきたが、それらをかわしたり棒で払ったりして、前に進んだ。 1000本のビームが攪乱幕の後ろあたりに突き刺さる。 りとは、攪乱幕のさらに右前に出 いくつかのビー ムが向か つ

「さっきから指示しているのはあのスクーパーズ。」

こちらを見ていた。自分とそのスクーパーズとそしてまりと同一直線状る寸前に、まりに連絡し りとは、りとや隊の陣形を様子を見ているスクーパーズに目を付けていた。そのスクー パ ーズは

「まり、撃って。」

りとの高速な動きに付いて行くのが精一杯だったため、 何か言う前に引き金を引いた。

そして叫ぶ。

「避けてね。りと。」

た。指揮官が消滅したため隊の動きが止まった。 リア銃のビームが伸びて、三日月を縦にビームが貫いた。 ベナと数十体のスクーパーズが消滅し

「これで二人をPARKに戻せる。」

りとはビームを横にかわした後、三日月の後ろ側を通って、 まりのところへ戻ろうとした。

PARKでは、エビふりゃーがまた悲痛な声を上げていた。

あー、ベナまで。」

「またエビふりゃーが知っているスクーパーズですな。本当に悲しいことですな。それにしても、

スクーパーズ最強の第7連隊にしてはもろいですな。」

「りと様の速さについて行けず、翻弄されているようでございます。」

「そのように見えるですな。しかし、 簡単に補充がきかない第7連隊の犠牲がこれ以上増えるの

は避けたいですな。」

ゼクールが悲痛な表情でガジメに話しかける。

「わかったですな。」

RKに撤退すると思うでございます。そのときに何とか方法を考えるございます。」

「おっしゃる通りでございます。たぶん、りと様はまり様とことこ様のことを考えて、

゙あー、また。やっぱり速さについていけていない。」

「隊形の転換が間に合わず、 逆に隊形を棒 人間に利用される形になっているな。

「はい。」

「ただ、棒人間はこちらには向かって来ないようだ。」

ガーチューンは別途対応策を練っていた。

経験から、や 「アルドア、 つらの団結意識は固い。必ず仲間が二人いるラフォーレに戻るはずだ。そこを狙う。 主砲をラフォーレ屋上を狙える位置に移動し、 照準をそこに向けておけ。 今までの

「了解です。照準ラフォーレ屋上で待機します。」

「やつも屋上へ着陸する直前には速度を落とす。 そこを狙うんだぞ。

「分かりました。」

「ビーム攪乱幕散布班、 ビー ム攪乱幕の濃度を最適化して、 こちらのビ ムは有効だが、

から気が付かれないように調整してくれ。」

「了解です。」

「アルドア、チャンスは1回だ。頼む。」

「はい。」

アルドアは機器を操作し、 照準をラフォーレの屋上の少し横、 棒人間の予想帰還経路と交差する

ように定めた。

「照準完了です。」

アルドアが緊張して、ガーチューンに伝えた。

「よし、安全装置を解除しろ。 タイミングが重要だ。 アルドアの判断で発射し そい

「了解です。安全装置解除。」

アルドアは砲の照準装置を凝視し、自分に言い聞かせた。

「チャンスは1回、集中だ。」

りとがラフォーレ屋上に戻ってきた。急いでまりに通信する。

「まり、 ごめん。数が多くて、すぐには追い払うことができない。 ラフォ レに戻ったら、

こを連れて一度PARKに戻る。」

「わかったわ。 PARKで一休みしましょう。 お腹も空いてきたし。

「いや、うん。」

もうすぐPARKの屋上のところまで来た。 振り返って見るとスクーパ ズの集団は混乱

がら、建物に隠れるために下降していった。

砲の照準の中心にりとが入りそうなとき、 アルドアが砲を発射する。

発射!」

砲からのビームはりとの方に伸びて行った。まりが叫ぶ

「りと!」

中を舞った。 その瞬間、 りとも横から来る巨大なエネル りとにビー まりが、 ムが届いた。 一心にボード ギー 「バーン」ととても大きな音がして、 に乗って飛び出し、 の気配に気付いて、 りとを空中でキャッチした。 ードを盾にしてボードに陰に隠れた。 りとが弾き飛ばされ空

「りと!りと!」

「ことこ、りとがスクーパーズの大砲に撃たれて気絶しちゃったの。 とりあえず、 りとを運ん

「わかったー。PARKにもどるよ。ちょっと待ってて。」

PARKに戻る。

ことこも戻れる?」

「待てない!急いで!スクーパーズが来ているの。」

迫ってきた。 なかった。無念でもことこを置いていくしかなかった。それでもスクーパーズがまりのところに りとが動けなくなったことを見たスクーパーズが大量にまりに向かってきた。 ーズは、ラフォーレの中に入っていった。ただ、りとを抱えているまりには逃げることしか ことこから通信が入った。 一部のスク

「まりちゃん、 りとちゃん、 スクーパーズが戦車の周りにたくさんきたー。」

「ことこ、なんとかPARKまで逃げられない?」

「このスクーパーズたち、RWSもきかないの。 助けて。 お願い。」

隔てた。 た。そのとき、明治通りの代々木側からとても強力な白いビームが、まりたちとスクー まりは返事をすることができなかった。 まりたちを追っていた、 第7連隊の第3中隊隊長が叫んだ。 まりの方もすぐ後ろまでスクー パ ズが迫ってきて パー ズを

「なんだ、白色いデストロイビームか。」

中隊付きの観測隊員が機器を見ながら答える。

「はい、デストロイビームです。」

「敵はデストロイヤーズなのか。 ビームが白かったが、 アムロディのものか。

「いえ、それがアムロディのビームより、3倍は強力です。」

「何だって!そんなやつがいるのか。」

「分かりません。ただ照準からしてこちらを攻撃するのではなく、 牽制射撃と思われます。」

「そうか。アムロディかそれ以上の敵がいるとすると、うかつには近づけないな。 戻って

蟹爪ふりゃー隊長の指示を仰ぐ。」

「わかりました。」

たことを不思議に思いながら、 PARKに到着したまりは、背後に強力な白いビームを感じた後、 りとをPARKのソファーに寝かせつぶやいた。 スクーパーズ追ってこなか つ

「とりあえず、PARK逃げてこれて良かった。」

フォーレの方を見た。 さっきから助けを求めることこの通信が聞こえていたので、 たくさんのスクーパーズがラフォーレを取り囲んでいるのが見えた。 PARKの建物の上に上昇し

「まりちゃん、りとちゃん。まりちゃん、りとちゃん。」

ことこが泣きながら何度もそう叫んでいた。まりが、

「ことこ、ごめん。絶対助けに行くから。今は頑張って。」

と連絡した直後、受信機から何かを切り裂く大きな音が聞こえた。そして、

「わー、こっち来ないで!」

という叫び声を最後に通信が途絶えた。まりにはどうすることもできなかった。PARKに戻る

と、りとはまだソファーで気を失っていた。

行状況を尋ねていた。 デストロイヤ ーズ本星では、 皇帝が参謀長を呼び出し、 スクー パ ズ本星を攻撃する作戦 の進

「天の川銀河攻略部隊の様子はどうか。」

としている銀河系内のデリッサ星域に到着するものと思われます。」 「はい、第17、 第28、 第41艦隊とも順調に航行を続けています。 あと100日ほどで目標

きる。だた、現在の我々の艦隊はわずか3艦隊だ。発見されれば勝利する可能性はほとんどない。」 築するんだ。それができれば30艦隊を送り込んで、一気にスクーパーズ本星を急襲して制圧で ありません。」 と思わせるように配慮しています。定時連絡でも、まだスクーパーズに発見されたという情報は 「デリッサ星域に我がアンドロメダ銀河からの長距離ワープウエイの出口を、 「はい、艦隊を小さく分け、慎重に天の川銀河に進んでおります。また発見されても、 なんとしても構

そかに派遣し、 進基地を建設しようと互いに何度が侵攻してきたが、結局はその補給の困難さのために侵 艦隊へ継続的に補給することは極めて困難となっている。そのため、相手側銀河の辺境の星に前 ぼそれと拮抗した戦力を保有している。しかしながら、天の川銀河とアンドロメダ銀河間の移動 33艦隊程度が今回のスクパーズ侵攻作戦のために使える総戦力となる。 地上の補助要員1億人からなる極めて大きな宇宙軍である。その中で半数近い20艦隊はアン デストロイヤーズ宇宙軍はそれを約50艦隊を配備し、デストロイヤーズ宇宙軍は兵員2億人、 ドロメダ銀河内や銀河周辺宙域の防衛のために配置されており、それを少し無理して削っても 0、揚陸艦100、補給船2000からなり、総数400万人の兵員で構成されている。そして、 の本星の近く星域との間に、3つのワ 距離ワープで到達できるワープハイウエイのための拠点を短時間に建設 てきた方が敗退するということを繰り返してきた。今回、デストロイヤーズは初めに3艦隊をひ には艦隊では200日以上を要し、その距離が壁となり、 デストロイヤーズ宇宙軍の1艦隊は、 パーズ本星を急襲する作戦計画を立てていた。 デリッサ星域に新規に開発したアンドロメダ銀河から天の川銀河へ1回の超長 ープハイウェイを構築して、一気に30艦隊を派遣しスク 空母300、戦艦300、 脆弱な補給線を維持し、展開している 巡洋艦40 し、アンドロメダ銀河 スクーパーズ側も、ほ 駆逐艦7

3惑星の地球に向かわせているところです。 「よろしい。 「現在は、テロリスト逮捕のために、スクーパーズが支配する天の川銀河オリオン腕太陽系 スクーパーズ本星攻略の鍵となるアムロディーの部隊は今どうしているか。」 あと10日ほどで到着するかと思われます。」

「馬鹿な。なぜそんなところに。」

る領域です。 不意の戦闘において特別高等憲兵を援護するために派遣しました。 それにしまして 「テロリストの逮捕は特別高等憲兵の仕事ですが、なにせ天の川銀河はスクーパーズが支配す

れほどまでにご心配を。」 国民にも本人にも知らせてはおりませんが、 アムロディは前皇帝の忘れ形見です。 そ

破することは不可能だ。 そのとき、スクーパーズのエビふりゃーや蟹爪ふりゃーが出てきたら、 は勝負にならない。スクーパーズ王を捕らえるまでは、生きていてもらわないと。」 「ゆくゆくは考える必要があるかもしれない。だが、スクーパーズ本星の防衛網は大艦隊でも突 少数精鋭部隊が潜入して、 短時間でも防衛力を無効化する必要がある。 アムロディを当てなくて

情報が入り、その捜索のために特別高等憲兵を地球に派遣したのであります。特殊高速艦を使用 死した時に前皇帝派のブルシチュアが先に述べた地球という惑星に皇女と共に逃げ込んだとの していますので、デリッサ星域まで地球から1日で到着できます。作戦遂行には支障はありませ 「前皇帝の妃は病で亡くなられ、 それに、 スクーパーズの戦闘艦に補足されても容易に振り切れます。 皇女も宇宙船の爆発事故で死亡しています。 ただ、皇女が事故

ブルで、 点でのスクーパーズとの戦闘は絶対に避けるようにする必要がある。」 きるようならば、是非逮捕してきてくれ。ただ、スクーパーズとの戦いの前だ、 「そうか、わかった。ブルシチュアは当時、最強の兵士で前皇帝への忠誠も強かったな。 作戦が台無しになっては元も子もない。慎重に行動するように厳命してくれ。 つまらないトラ

「はい、そのように命じておりますが、再度念を押しておきます。」

本参謀長は皇帝の部屋から出て行った。

少数の部隊がアムロディーなしで、エビふりゃーや蟹爪ふりゃーと戦うことになれば、敗退は見 ものを。どこかに前皇帝、王妃、皇女を死に至らしめた自責の念でもあるのだろうか。まあい 「皇帝もお甘い。アムロディーなどさっさと殺してしまった方が、後顧の憂いを断つために良い ここは皇帝のご意見に従う方が懸命か。」

とこは、 と通信していた。心の中は不安で一杯で、 ラフォーレ1階では、第7連隊が戦車を取り囲んでいた。RWSが効かないことが分かったこ 主砲を使うことも考えたが、当たるわけがないので撃つのはやめて、 名前を呼ぶのが精一杯だった。 通信が通じるまり

「まりちゃん、りとちゃん。まりちゃん、りとちゃん。」

って到着した。 ラフォーレ1階に、蟹爪ふりゃーが2. 5階の入口を通って、 ガーチューンが正面の 入口を通

ことを上申します。」 「蟹爪ふりゃー少将、 できる限りこの中に残された敵を傷つけないようにして身柄を確保する

「お前の部下を半分以上殺した敵でもか。」

王女様への報復が心配です。また上手くいけば、 「はい。憎き敵ですが、王女様の安全を第一に考える必要があります。 人質の交換に利用できます。」 この敵を死傷させた場合、

「もっともな意見だな。 わかった。まずは、 この乗り物から敵を引きずり出すことにしよう。」

蟹爪ふりゃ つけると、戦車が真っ二つになった。 ーがその鋏に部分で、 戦車に切りつけた。 戦車の装甲がパクっと割れた。 切り

ことこは戦車が壊れて周りが見えるようになり、 とても動揺した。 それでも、 フロアがスクー パーズであふれかえっ て

るはず。 「りとちゃん、まりちゃん。私、どうなるのかな。 だから、今は少しでも生き延びることを考えよう。 でも、りとちゃんが、 きっと助けに来てくれ

と考えて抵抗せずにじっとしていた。

翻訳機で呼びかける。 蟹爪ふりゃーが切り裂いた戦車の方を見ると、 中に隅の方に小さく固まっていた人間がい た。

「大人しく出てこい。抵抗すれば、無事ではすまない。」

ことこは無言で出てきた。蟹爪ふりゃーがガーチューに命じる。

「これまで戦ってきた第8連隊の方が事情が詳しいだろうから、 取り調べはまかせる。

「わかりました。」

き換えに得られた情報では、 たデータから、我々第7連隊ならば明治通りの防衛線の突破は容易と思われるが、第3連隊と引 い隊長を失ったものだ。」 「敵の拠点の配置について詳しい情報が聞き出せるようならば聞き出してくれ。 敵拠点の防衛はかなり強固そうだ。それにしても、 ギンシア、 今まで得られ

「おっしゃる通りです。 ギンシア隊長は不可能を可能にし、 敵拠点まで肉薄しました。」

「ああ。」

少しの沈黙の後、ガーチューンが話を戻す。

約がありますので。」 任せようと思います。 けているようには見えません。推測では、工兵と考えられますので、 りません。今回の戦闘でも、乗り物にこもっていました。また、棒人間とは違い、戦闘訓練を受 「敵の捕虜ですが、最初の戦闘時に射撃主の横にいましたが、これまで戦闘に参加したことはあ その中で、 敵拠点の防衛線に関する情報取得を試みますが、 こちらの技術将校に尋問を 局所銀河団条

んとかなる。 「無法者になるわけにはいかないな。わかった条約の範囲でい 今から、 対棒人間のための作戦を検討する。」 61 人間さえ倒せば、 あとはな

白いデストロイビームを撃つ何者かに対する対策も必要かと思います。

ンドロメダ銀河を出たという情報が入ったからだ。」 「その通りだ。実は、我々がここに早く来られたのは、 アムロディーがこのあたりを目指してア

「そんな。何をしに。」

地球で王女様が誘拐されたという情報が入ったため、 「なるほど、 「目的に関する情報は それで、 王女様の誘拐から4日で到着されたのですね。」 ない。ただ、到着はもう少し先のはずで、迎え撃つ準備をしていたところ、 緊急に駆け付けることができたわけだ。」

ズはアムロディー以外には確認されていない。」 ったのはアムロディーの可能性が高いと思う。 「諜報部の情報だから、時間などに多少の不正確さはあるかもしれないが、さっきの 白いデストロイビー ムを撃てるデストロイヤー ビー ムを撃

「観測では、棒人間はデストロイヤーズではないようですが。」

「さっきの白いビームも、 直接我々を狙ったものではなかった。単に、 棒人間たちを逃がすため

に牽制したようだ。」

「それは、何故です。」

はデストロイヤーズに戦闘訓練も受けている。 んでいる地球や原宿を守るためだ。 「やつらは地球人だが、デストロイヤーズから武器を供給されているに違いない。特に、 それをデストロイヤーズが利用している。」 やつらの目的は基本的には単純で自分たちの住 人間

「何のために、ですか。」

我々を狙っていなかった。デストロイヤーズは我々の戦力を削ぐために、地球人を利用している と考えるのが一番自然だ。」 「デストロイヤーズと我々は休戦中で戦闘ができない。だから、あの強力なデストロイ ビー  $\mathcal{L}$ は

「なるほど。」

域を守るために戦っているようだ。我々に対する射撃手の照準も、単に棒人間に合わせてい になるようにして、自分に向けて撃たせる。そして、自分はビームを避ける。」 うだった。射撃手はどれを目標にしてよいかわからないから、棒人間が目標が自分と射撃手の間 **入間だ。データや先の戦闘を見る限り、それ以外の人間は棒人間にのせられて、** 「棒人間はデストロイヤーズから直接指示を受けているかもしれない。 王女を誘拐したの 本当に自分の地 るよ

「それで、中隊長が。」

「ああ。」

「では、黒幕はアムロディの部隊とあの棒人間ということでしょうか。」

地球人を守るために武器を渡し訓練したと言い訳ができる。」 このことが判明しても、 「その通りだ。ただ、ガーチューン、君は黒幕と言ったが、条約的にはこちらもかなり黒に近い デストロイヤーズは、局所銀河群会議で、 スクーパ ズの不法行為から

「局所銀河群会議、実質的には機能をしていませんが。」

「確かにそうだが、やはり条約違反で大義名分が立たないことを続けると、 人心が離れてゆくゆくは不利になる。」 銀河群での支持が薄

「銀河間政治の問題ですね。軍人には不向きですが。」

「ガーチューン、出世したければそれでは困る。 軍事力は銀河間外交の つの手段に過ぎない。」

「わかりました。勉強するようにします。」

「現状は、このことが外の銀河にできるだけ知られぬように、秘密裏に解決することが必要だ。」 「承知しました。」

その方策を考える。 て、私が警戒する。従って、残りの私の隊の隊員で棒人間に対応しなくてはいけない。これから、 「アムロディーと思われるデストロイヤーズの直接攻撃はないと思うが、 万が一の場合に備え

「わかりました。我々もお手伝いできることがあればお手伝いします。

いだろう。ビーム砲を使って占領地の確保に専念してくれ。」 「うむ。ただ、散弾でやられてしまう第8連隊の隊員では、ビーム攪乱幕の外に出ることは難し

「承知しました。」

第7連隊の隊員がラフォーレを後にして、作戦を立案するために囲いの外に出て行った。 多数のスクーパーズに取り囲まれていた。 ガーチューンがアルドアに指示する。

ならば是非聞き出してくれ。」 所銀河群条約に違反しない範囲で尋問してくれ。 「この敵は、工兵か技術支援が担当だと思う。尋問はお前に任せる。 だた、敵の拠点の防備について聞き出せるよう 分かっ ていると思うが、

「了解しました。上の部屋を使おうと思いますが、 よろしいでしょうか。」

「ああ、好きに使ってくれ。」

アルドアが翻訳機を使って、ことこを上の部屋に誘導する。

「上の部屋までついて来てくれ。」

ことこは仕方なくアルドアについていく。 2体の護衛をドアの外に待たせたあと、部屋に入った。 後ろに2体のスク 部屋には、 パー ズが逃亡を警戒してつ ビー ム攪乱幕のタンク 7

や台車がついた装甲板が乱雑に置いてあった。

「人間は椅子にすわるんだったね。では、この椅子にかけて。」

ことこはおとなしく椅子に腰かけた。

「整体信号を取る装置を付けるね。危険はない。 ただ嘘を言ったするとすぐにわかる。 そのため

の装置。いいね。」

ことがはじめて口を開いた。

「うそ発見器ね。わかった。」

アルドアは装置を付けながら、話を続ける。

「協力ありがとう。僕はアルドアと言います。 技術将校です。 君も技術担当?」

「わたしは、 ことこ。えーと、綿紬ことこ。 PARKというお店でバイトをしています。

当と言えば、そうかもしれない。」

「そうか、ありがとう。」

「こちらの推測では、 ことこさんは地球または原宿を守るために戦っ てい ると思うけど € √

ど、いきなり戦闘になってしまったの。」

「うん、そう。

原宿に最初にスクーパーズさんが来た時、

りとちゃんも話し合おうとしたんだけ

「ちょっと待って。こちらから、戦闘を始めた?あっと、そうか。 射撃したのはこちらが先か。

そうだよ。」

えてもらえるかな。 あれは王女様が棒人間に誘拐されたからで。 そうだ。まずなぜ王女様を誘拐したのか教

「王女様を誘拐。そんなことはしてないよ。」

棒人間が王女様を連れ去るところは確認している。 記録を見せよう。」

そう言って、りとがみさを連れてPARKに逃げ込む映像を見せた。

「これは、誘拐したんじゃなくて、スクーパーズが来て逃げるときに、 みさちゃんは足が遅い

ら、りとちゃんが抱きかかえてPARKへ走ったんだよ。」

「棒人間の名前は、りとちゃんと言うのかい。」

「棒人間?」

「棒のようなものを持った人間だから、棒人間って呼んでる。」

「棒人間というあだ名はひどいけど、そうだよ。 須藤りと、PARKでバイト しているの。

ストが担当かな。とても可愛いイラストを書くのが得意なの。」

「地球の兵隊さん?」

「私と同じ、普通の高校生だよ。」

「学生か。うーん、いずれにしても、 地球の兵士とは強さが別次元だし。 抱えていた小さな女の

子みさちゃんの氏名を知っている?」

が気に入って、ずうっといっしょだよ。強制しているわけではないよ。」 「丸野みさ。アメリカ人と言っていたけど。この前日にPARKへ来たんだ。 それで、 P A R K

我々の部隊の作戦の指揮をとられている。原宿に来た日も合っているけれど。」 だよ。あの子は、もともとは丸野みさ王女様。スクーパーズ王の長女でいらっしゃって、 のなんだ。スクーパーズコアが強力なスクーパーズはいろんな生物に擬態できるようになるん 「名前は合っている。君がみさちゃんと言っている女の子は、 スクーパーズが人間に擬態したも

「みさちゃん、スクーパーズの王女様なの?いろいろ凄いところはあったけれど。」

たためとても安心していた。アルドアは、もう少し質問を続けた。 アルドアは事態が理解できなくて混乱していた。逆に、ことこは怖そうなスクーパーズでなか つ

来たの?」 「エビふりゃー様、えーと、あの地球の食べ物のエビの天ぷらみたいな生物は、 王女様と一緒に

「ううん、みさちゃんが来た日の翌日に来たよ。 エビフライ星人と言っていた。 スクー ズの

「スクーパーズから逃げてきたったて。」宇宙船から逃げてきたって。」

「うん。エビフライ星でスクー パーズにさらわれたって。 地球でも何人かさらってい

いかって。」

「えっ、僕たちはそんなことはしないよ。」

「そうなの。」

との戦争では、 アメリカでの作戦ではたくさんの人が亡くなっている。僕は本当に申し訳ないと思っている。」 「あたりまだよ。本当は僕は文明や文化を奪っていくのもいやなんだ。でも、 1億体以上のスクーパーズが死んでいるんだ。だから奪えって、 デストロイヤーズ 命令で。特に、

「そうなんだ。いいスクーパーズなんだね。アルドアって。」

「そんなことはないけれど、できればこの戦いを終わりにしたい。」

「うん。」

「協力してくれる。」

「わかった。知っていることは何でも話すね。」

「こちらもそうする。」

二人は向き合って少し微笑んだ。

「武器のことを聞いてもいいかな。」

「いいよ。」

「こちらでは、それはデストロイヤー ズからもらったものじゃないかと推測しているんだけれ

ど、他に宇宙人はいなかった?」

ことこが胸のペンダントを見せながら言う。

「いなかった。 エビふりゃーからもらった、 このアマツマラで武器を作ったの。」

「アマツマラ?エビふりゃー、エビふりゃー様から?」

「アマツマラは、想像したものを実際のものに変える装置。 これがあれば、 スクーパ ーズと戦え

るって、エビふりゃーが。」

「エビふりゃー様が。」

「何か作ってみるね。何か欲しいものはある?」

「何でも作れるの?とりあえず、机かな。」

「わかった。 じゃあいくよ。 O u r O t a k u C h a n g e d y P A R K

そういうと、部屋が光に満たされた。 その光がおさまると、 アルド アの前 に机が現れていた。

「すごい。」

「うん、そう思うよ。」

「これで本当に武器も作れるの?」

「うん、簡単なもの作ってみようか。」

「お願い。」

「じゃあ、小さなビームライフルを作るね。 O u r Ο a e b y Р

R K.

同じようして、小さなビームライフルが現れた。

「すごいね。本当に撃てるの。」

「ごめんごめん、 「何か物に撃ってみてもいいけれど。でも、アルドア、捕虜に武器を作らせるなんて不用心だよ。」 なんかすごくて。それに君が僕と同じ種類のスクーパー ズというか人間、

の感じがして、信用できそうだし。」

私もそう。」

「じゃあ、ことこちゃん、あのタンクを撃ってみて。中は空だから。

「こいう銃は撃ったことがないけど、アルちゃんの頼みならわかった。」

「アルちゃん!?」

ことこがタンクに向けて、ビームライフルを発射した。 大きな音がしてタンクに穴が開い

認すると、後ろの装甲板に大きな傷が付いていた。

「凄いな、装甲板がここまで傷ついている。」

そのとき、外にいた警備の兵が2体が入ってきた。

「アルドア少佐、何事ですか。 捕虜が銃を持っている。 銃を捨てろ!さも・

アルドアが警備兵を止める。

「大丈夫。敵の武器の威力確認のために、 あのタンクを撃ってもらったんだ。」

「それにしても、少佐、不用心すぎます。」

「彼女は戦闘員ではないから大丈夫。」

「しかし、この部屋に入るときにはこんな武器は所持していなかったはずですが。」

「そうなんだ。この机もなかっただろう。何にもないところから机とか武器を作れちゃうんだ。

すごいだろう。」

「すごいだろう、と言われましても。」

ことこはビームライフルを机に置いた。アルドアは、それを取って護衛の兵に渡した。

「これを部下に渡して、分析するように言ってくれ。」

「わかりました。」

護衛の兵が出て行った。アルドアが話を続ける。

「ことこちゃん、ごめんね、驚かして。」

「大丈夫。それより、銃の威力に驚いたよ。」

「作った本人が驚くのかい。」

「うん、想定したより威力が高かったの。 いろんな情報がアマツマラに集まってきているからか

もしれない。」

「そうか、すごいね、そのアマツマラというもの。

「でも、 いろいろ制限があるみたい。 オリジナリティが高くなくてはいけなくて、 2つ似たも

は作れないみたい。」

ふーん。」

「そうなんだ。 ちょっとアマツマラを貸してもらってもいいかな。」

「いいよ。はい。」

こが尋ねる。 ことこはアルドアにアマツマラを渡した。 アルドアはアマツマラを目の部分にかけてみた。こと

「アマツマラを感じる?」

「感じるって?」

「うーん、なんか情報をやり取りができるような感じ。

「残念だけれど僕には感じない。 とりあえず、ものを作るにはどうするの?」

「物をできるだけ具体的に考えて、アマツマラに情報を送るように、 何か呪文を唱えるの。」

あたりが光に満たされることはなかった。

「そうか。

机を想像して、Our

O t a k u

Change

d

b y

P A R K

僕には無理みたい。返すよ。」

「返すよって。 はい。」

ことこはもしかするとアルドアを守るために必要かもしれないと考えて、 アマツマラを身に着

もわからない。」 「それにしても、 エビふりゃー 様がスクー パーズと敵対する人間にこんなものを渡すというの

「アルちゃんも渡したけど。」

すこし微笑みながらアルドアが答える。

様は軍人の中の軍人、スクーパーズ最強の兵士だったんだよ。そして今は王室の侍従長。今回 自分で言うのも何だけど、僕はあまり軍人ぽくはないからかな。 エビふりゃ

の作戦では、 みさ王女を守るための護衛を務めているんだけれど。」

「そうなんだ。そんなすごいスクーパーズだったんだ。人の良いおじさんみたいな感じだった

撃するようなものを渡すというのは考えにくい。何か裏があるのだとは思う。整体信号がスクー 「僕も船で訓示を聞いた時の感じはそうだった。それでも、エビふりゃー様がスクーパーズを攻

「操られている?みさちゃんもエビふりゃーも自然な感じだったけど。」

偽物の可能性は本当に低いと思う。

操られているのか。

うーん。」

パーズだったから、

はそれ以外に、 「そうかー。ことこちゃん、アマツマラ、また貸してもらっていい?分析してみようと思う。 手掛かりはないし。

「いいけれど、 その前にその翻訳機を貸してくれる?分析してみたい。」

「じゃあ分析器を作るね。 そしたら、 アマツマラを貸すから。」

「わかった。」

ことこは、アマツマラで分析器を作成した。 アルドアは、 できたものを見てまた驚いた。

「こういうものもできるんだ。すごいね。」

「うん。上手に使えばすごい便利。じゃあ、アマツマラ渡すね。」

んじゃないか。」 「有難う。こっちは分析器を運んで来なくっちゃ。 そうだ人間はあと食べ物とか飲み物とかいる

ペットボトルとカップラーメンをお願いできる。」 「うん、 でも食事を作る時間もないから。 そうだ、 竹下通りにあるコ ンビニエン ス スト -アから、

「いいけれど、どんな感じのもの?」

「こんな感じのもの。」

はそれを写真に撮った。 ことこが、タブレットを使ってカップラー メンとペ ットボトルのお茶の画像を見せた。 ア ル

「わかった。誰かに取って来てもらうね。 じゃあ、 ちょっと待ってて。」

「ありがとう。」

使って様々なものを扱うことができる。アルドアは、現在までの状況をガーチューンに報告した。 そう言って、アルドアは出て行った。ちなみに、手がないスクーパー 「連隊長のお考えの通り、 彼女は技術を担当しているようです。」 ズは弱いスクープビー

「そうか。」

られたとのことです。 「彼女の説明によりますと、武器を作り出すアマツマラというものを、 エビふりゃ

「エビふりゃー様が。まさか。」

「王女様も誘拐されたのではなく、自分の意志で一緒にいるとのことです。

「どういうことなんだ。彼女が嘘をついているということは。」

が。また、デストロイヤーズも一緒にはいないとのことです。 になっていると。確かに射撃したのはこちらが先でした。王女様が誘拐されたと考えたからです ことです。最初、 「生体データと態度から、それは考えられません。彼女たちの戦闘の目的も原宿を守るためとの 話し合おうとしたが、スクーパーズ側から突然攻撃があって、 このような状態

「うーん。」

「彼女も極めて協力的で、 現在、現状の把握と戦闘を停止する方法を一緒に考えているところで

「状況はわかった。これから、どうするつもりだ。」

りません。 できるすごいものです。 「そのアマ もしかすると、 ツマラというものを分析してみます。 このようなものをデストロイヤーズが持っているとは聞いたことがあ スクーパーズでもデストロイヤ その場で本当にいろいろなものを作ることが ズでもない何かが糸を引いているの

かもしれません。 アマツマラを調べれば、 背後にいる者たちについて何か分かるかもしれませ

う。彼らを止めるには、 「わかった。そうしてくれ。ただ第7連隊が攻撃準備をしている。明朝には攻撃を開始すると思 具体的かつ有効な手段を考える必要がある。

「わかりました。あと、捕虜に食料を与えようと思うのですが、竹下通りのコンビニエンススト

アから、これらのものを持ってくるように手配をお願いできますでしょうか。」

そう言って、ガーチューンに画像を見せる。

「わかった。手配しよう。」

ガーチューンと分かれたアルドアは、 観測機器を持って、 ことこがいる部屋に戻った。

話しかけた。

「お帰りなさい。」

「ただいま。」

「重そうだけど、大丈夫?」

「スクーパーズは人間より力があるから大丈夫・・・。あれ、 翻訳機がない のに話せてる。」

「うん、 翻訳機を調べて、人間の精神波からスクーパーズの精神波に変換する装置を作ったの。

だから、私、今スクーパーズと同じように話しているの。」

「本当だ。すごい。」

「この方が意思の疎通が速いし正確になるみたいね。」

「そうだよ。この方が全然いい。」

「ほんと。嬉しい。」

「ぼくも嬉しいよ。人間と気持ちを通い合わせることができて。」

「アルちゃん、 ありがとう。私もだよ。じゃあ、 アマツマラの分析もいっしょにする?」

「うん、お願いするよ。それにアマツマラの起動はぼくじゃできないし。」

「やったー、いっしょにやろう。」

ことことアルドアはいっしょにアマツマラの分析を始めた。

夜になって、 りとが目をさました。絵を描くアイディアに詰まった時、 11 つも見ている天井だ

1

P A R K ?

そして、すぐに思い出す。

「そうか、横からビーム砲で撃たれたんだ。」

まりが声をかける。

「当たった時にはどうなるかと思ったけれど、 外傷がなくてほっとした。

うん、大丈夫。」

「ことこは?」

まりが答える。

「新しいスクーパーズが来たことは覚えている?」

「うん。大きな蟹爪フライみたいなのがいた。」

「PARKに戻るために、りとがラフォーレに戻る途中、 ム砲に撃たれて。

とをかかえてPARKまで戻ってきた。」

「ことこは?」

「逃げるように行ったんだけど、ラフォーレに残っていた。」

まりは、ことこからの通信をりとに聞かせた。

りとが起き上がって、出口に向かう。

「まり、ごめん、ちょっと行ってくる。」

「ラフォーレ?無理よ。新しいスクーパーズには散弾が効かないし。それにことこは今ラフォ

レかどうかもわからない。」

「たぶんラフォーレにいる気がする。 ラフォー レにいなかったら戦艦だと思う。 ことこを見捨て

ることは絶対にできない。」

「戦艦に飛び込んで行く気?無茶よ。 やっぱり、 いる場所が分からないと。

みさも止める。

「みさちゃんは、 大丈夫ですな。 スクーパーズの軍隊は野蛮ではないですな。」

りとが尋ねる。

「何でわかるの。」

「今までの行動を見ていればわかるですな。」

エビふりゃーが説明を追加する。

「局所銀河団条約によって捕虜に虐待することはないでございます。それに、ことこ様は直接戦

鬪には参加していないでございますから、心配はご無用でございます。」

まりが明日にすることを提案する。

「それにもう暗いから、明日にした方がいいと思う。今、ことこが書いたリア銃のこの分厚い 7

ニュアルを読んでいるの。有効な方法がないか考える。」

りとは今すぐでも探しに行きたかったが、 どこにいるか分からない状況で自分が暴れては、

こが危険になるかもしれないとも考えた。

「わかった。明日にする。何としても・・・」

さゆみんがカツサンドを持っていた。

「今日は戦闘が激しくて、あまり準備ができなかったらカツサンドにしたわ。 あと、 マカロニサ

「ありがとう。 わかった食べる。 明日のためにも。」

「よかった、りとちゃんが元気で。一時はスクーパーズが追ってくるかとひやひやしてい たけど、

追ってこなくて安心した。」

りとがカツサンドを一口食べて尋ねる。

「おいしい。 でも、さゆみん、 戦闘見ていたんだ。」

「えっ、うん。明治通りの代々木側の端の方から。りとちゃんたちが心配で。

闘がもっと激しくなると思う。」 「心配してくれてありがとう。 でも危ないからさゆみんは店にいたほうがいいと思う。 明日は戦

うけど。それに、いざとなったら最強の助っ人も呼べるし。」 「そう。 なるべくそうするね。でも代々木の方にはスクーパーズが全然いないから大丈夫だと思

「彼氏さん?気持ちは分かるけど。うーん。」

「惚気ている場合ではないのに。 さゆみんらしいけど。」

と思ったが続けた。

「確かにさゆみんのいう通り、 スクーパーズはラフォー レから竹下通りに集まっ ているけれど、

お願いします。」

「わかったわ。じゃあ、明日は私は店にずうっといる。嘘はつかないわ。 そのかわり、 もし本当

に危なくなったら店の方に来て。絶対に何とかするから。」

危なくなったら、 さゆみんのお店に逃げ込む。」

かったが、さゆみんの顔があまりにしも真剣だったので、 りとは危険な時に、たぶんスクーパーズに追いかけられて、さゆみんの店に行くつもりは全くな そう答えた。

「必ずよ。」

「はい。」

さゆみんはすこし安心して、

「デザートを作ってくるね。」

離れなかった。りとは、場所さえ分かっていれば飛び出して行きたかったが、ソファーに腰かけ とした気持ちになることができた。それでも、録音してあったことこからの最後の通信が耳から と言いながら台所に向かった。りとはさゆみんは変わらないなと思いながらも、 場所が分かった場合にことこを救出する方法を必死に考えた。 なぜか少しほ

隊長モーガンに、 夜になる前に第11連隊が到着していた。ガーチューンは蟹詰めふりゃ 現在までの取り調べの結果を報告した。 と第1 1連隊の連

自主的にいっしょにいると話しているようです。」 ために戦っているようです。王女様とエビふりゃー様と思われるものは、 「捕虜は地球人です。生体信号でも確認しました。 やはり3名とも地球人と思われ、 誘拐したのではなく、 原宿を守る

「そんな、まさか。」

様が敵に武器を作ることができるものを渡すはずがない。」 「アマツマラ。そんなものは聞いたことがないな。 「武器は、エビふりゃー様と思われるものから渡されたアマツマラで作っているとのことです。 捕虜の話を信用していいのか。エビふりゃー

なのですが。」 しているそうです。記録もあります。捕虜は嘘をついていないようですので、 「話の全部を信用するわけではないですが、アマツマラで実際に武器を作ることを捕虜が 何か裏がありそう

「それより今は、敵拠点の防衛装置についての情報を少しでも聞き出せ。

モーガンが口を挟んだ。

「手荒なことをすると、局所銀河団条約にふれます。」

ャンスがつかめないんだ。 せと言っている。モーガン、 「条約を破るつもりはない。 少しでも情報は必要だ。」 お前は敵の強さが分かっていない。 手荒なことをすれば、 王女様への報復も心配だ。 第7連隊が総がかりでも攻撃チ ただ、

「それはそうですが。」

ガーチューンも蟹爪ふりゃーをに意見する。

友好的な雰囲気を壊すのは問題と思います。それに防衛線もアマツマラで作成されています。 で、現在の情報を聞き出してもあまり意味がない可能性も高いです。」 「まず、王女様のことを考えれば、捕虜には少しでも元気でいてもらう必要があります。 そのアマツマラが敵の手にまだ3つあるようです。それを使って防衛線を強化できますの <sub>の</sub>

「うむ、それもそうか。」

ではないかと疑っています。」 「うちの隊のアルドアは、 スクー パーズでもデストロイヤー ズでもない何かが関与してい

「あのデストロイビームもデストロイヤー ズのものではなく、 偽物ということか。」

はい。

「エネルギーがアムロディーの3倍もあったんだな。」

「そうです。まだ若かったアムロディーが成長したとしても、 3倍のエネルギーは無理では

それにブランエファンとスクーパーズとは協力関係にある。」 は分子単位で自由に物体を操作できるということは聞いたことがあるが、 「おれもそう思う。 しかし、 わけが分からんな。 大マゼラン星雲を支配するブランエファン それとも違うようだ。

「はい、 ア マツマラを分析を急ぐ理由も、 その背後にいるものを探るためです。」

析してくれ。 る気もする。 「わかった。 それにアマツマラがデストロイヤー その捕虜の調査に関しては、こちらは何も言わない。 ズに渡ると、 スクー アマツマラに関して情報を分 パーズに取って致命的にな

「わかりました。分析を急がせます。」

を操っている感じだ。」 「アマツマラを調べる以外には、あの棒人間が黒幕を知っていそうな気はする。 あれが他

的で指揮能力も高いです。」 に、私も棒人間は他の人間と異なって軍事訓練を受けているように思います。 「こちらでも、 これまでの戦闘データを分析しています。 蟹爪ふりゃー様 の お 戦闘が非常に効率 つ Þ

「そうだな。 生け捕りにできれば良いが、 こちらにもその余裕はない。」

た後、 「こちらの損害を最小限に抑えるためには、手加減のできる相手ではありません。 原宿やそこに住んでいた者を徹底的に調べるほかはないと思います。」 いが終わ

「うむ、現在は棒人間を倒すことが第一だ。」

「それで、棒人間に対する攻撃隊形の準備はいつごろ終わりますか。」

「今晩中には終わらせるが、何だ。」

ってくると思います。」 「それならば、 明朝、捕虜から敵拠点に連絡をさせます。そうすれば、 やつらは捕虜を助け

動をお願いする。」 間と射撃手とデストロイビームを撃つ謎の敵に対処するが、 「それは名案だ。是非たのむ。 敵の拠点のそばで戦うより、ずうっと有利になる。我々は、 第8連隊にはビーム砲の運用と移

「了解です。ビーム砲の運用と移動を担当します。」

ると全滅の可能性もある。 エネルギーラインがやられると一般の隊員は敵の散弾でやられてしまう。 「モーガン、第11連隊は占領地の確保だ。 少なくとも竹下通りは絶対に死守してくれ。」 来た早々申 し訳ないが、ビー 特に、 ム攪乱幕や 出口を抑えられ 砲  $\sigma$ 

「了解です。命に代えても竹下通りは守り抜きます。」

ビー ム攪乱幕の濃度さえ間違えなければ、大きな犠牲を出すことはないと思う。」

「わかりました。」

棒人間役をお願いしたい。」 ガーチューン、高速に移動できる隊員を1体借りられないか、 隊形変換の訓練のた

「それならば、ちょうど良い隊員が1名います。 これまでにも、 棒人間と直接対決しています。」

「それは都合がいいな。頼む。わかりました。」

「それでは、各連隊とも、明朝のための準備を開始すること。

「わかりました。」「了解です。」

ラフォーレに戻ったガーチューンは、ゼクールを呼び出した。

「隊形変換の練習相手と言うと、 疲れているところ申し訳ないが、第7連隊の隊形変換の練習相手になってくれ。」 私が棒人間役ということですか。」

「察しがいいな。 その通りだ。 第8連隊ではお前が一番速いし、 棒人間の動きに詳しい。

なり上回っています。」 「もちろん、喜んで練習相手を務めさせて頂きます。 しかし残念ながら、 棒人間の速さは僕をか

「分かりました。 「分かっている。 しかし、 思いっきり動き回ってきます。」 実現可能な範囲ではお前がベストであることには変わりはない。」

一頼む。

ど、記憶部には関門があって、情報を送り込むことはできても、情報を取り出すことはできない ようになっている。そのため、 ターフェース部、破壊したものから情報を取り出しコード化する解析部、コード化した情報を蓄 た情報から現実世界に作用する生成部、アマツマラを管理する者と情報のやりとりをするイン 「今までの分析によれば、アマツマラは5つのサブシステムから構成されている。コード化され ことことアルドアはアマツマラを分析していた。 システムの全体の調整をする制御部だ。それぞれの部分の解析をすればいいけれ 解析が難しい。」 アルドアが現在までの分析結果をまとめた。

それと制御部の間には情報パスがあるから、そのパスを使って調べられないか考えているの。」 「うん、アルドアの言う通りね。今は、記憶部には記憶している情報を抽象化する部分があり、 「そんなパスがあるのか。見せてくれる。」

記述だと思う。」 「うん、この解析結果の31726行目から31953行目を見てみて、これが、データパスの

「なるほど。じゃあ、 制御部を解析できれば、 そこから記憶部も調べられるかも しれない。」

「うん。」

「じゃあ、手分けして調べようか。」

「わかった。」

「ぼくは制御部から記憶部を解析してみる。」

「じゃあ、私は制御部から生成部と解析部、それにインターフェ ス部を解析するね。

「それでいこう。じゃあ、作業開始だ。」

「ラジャー。」

ことことアルドアは分担を決めて、分析作業を開始した。

隊形では棒人間の動きについていけないため、中隊単位で三日月隊形を取ることにした。中隊長 を2体失っていたため、 蟹爪ふりゃーは、第7連隊の作戦参謀と棒人間に対する作戦を練っていた。 その中隊の第1小隊の小隊長が中隊長の任に就くことにことにしたが、 連隊全体の三日月

ままだったが、 ふりゃーは指揮し遊撃の役割を担うことになった。 アムロディーと想定される白いデストロイビームを放つものに対応するため、 いずれにしも、 中隊の統率には不安を抱えた 第 1 中隊は蟹爪

「不安を乗り越えるには、訓練しかない。」

蟹爪ふりゃーはそう思った。第7連隊にゼクールが到着した。

「君がゼクールか。」

ります。」 「はい、そうであります。栄光ある第7連隊の連隊長蟹爪ふりゃ 閣下にお会いできて光栄であ

「世事はいい。やることは分かっているな。」

の屋上に射撃手が隠れているという想定にします。」 「はい、 ガーチュー ン連隊長から指示は受けています。 動い て動い て動き回ります。 東急プラザ

「頼む。」

第2中隊から第5中隊が配置につい た。 第7連隊の全員がゼクー ルを見つめていた。

「いやー、 やはり第7連隊の全員に狙われるというのは、 背筋が凍るな。

蟹爪ふりゃーが開始を告げる。

「じゃあ、始めてくれ。」

「ゼクール、行きます。」

ゼクールが全速力で出発した。

「陽動しながら、でも最終的に中隊長を軸線に持ってくるように動くんだよな。」

ら、中隊に接近し、場合によっては中隊を突っ切って動き回った。各中隊の中隊長が指示をする。 ゼクールは全速で動いた。縦に横に。原宿の配置がだいぶ分かってきたので、遮蔽物を使いなが

「右に移動するぞ。上だ。 いや下か。狙いを集中させるんだ。横に動いた。」

「隠れたぞ。 気をつけろ。建物から出てくるぞ。 いや、 下から来た。くそ。」

蟹爪ふりゃーは上から見ながら評価していた。

「何をやってる。 第2中隊と第5中隊の中隊長はとっくに、 射撃手にやられて死んでるぞ。

ん、射撃手の牽制に1個中隊をさく必要がありそうだ。」

それでも、各中隊とも指揮伝達の迅速化を工夫して、対応の速度が上がってきた。

てきた。」 今は第2中隊が集中砲火をあびせることができた。 今度は第4中隊だ。動きが良くなっ

「よし、だいぶ良くなってきた。 1時間ぐらいして、 全員に疲れが出てきたため、 各中隊、 今の訓練を評価して改良すること。 蟹爪ふりゃ ーは訓練を終了することにした。 本日の訓練はこれ

で終了する。」

隊員の皆がほっとしたようだった。 蟹爪ふりゃ ーはゼクールを呼んだ。

「ありがとう。 それにしても速さも動きも良かった。 我が連隊の隊員をあれほど翻弄するとは。

いです。また、 「おほめ頂き、 こちらが全く考えもしない行動をとってきます。」 有難うございます。何よりの光栄でございます。ただ、 棒人間は私より2倍は速

「そうだな。平常心を忘れすに、冷静に対処することが必要だ。」

PARKでは、りとが変身したままソファーで明日の行動を考えていた。

固く尖ったものを棒の先に付けるか、 「ことこが、ラフォーレにいないとすると戦艦だけど、戦艦のドアを破るために何か考えないと。 それとも、 細く強くしたビー ムを押しあてて切断するか。

ことこがいれば良いアイディアを出してくれそうだけど。」

まりが話しかける。

「りと、変身を解除しないの?」

「うん、急に何があってもいいように。」

「そうなの。」

「まりの方はどう?使えそうなモードはあった。」

「モードイレブン、ポジションファイブかセブンが使えそう。3分間ぐらいのエネルギー

間が必要だけれど、散弾の弾数が増えてそれぞれの弾のエネルギーが強化される。」

「わかった。なるべくそれが有効に使えるようにする。」

「あと、モードサーティツー、ポジションワン。空気砲でビー ム攪乱幕を吹き飛ばせそう。

反動ですごい力が射手にかかるみたい。」

「わかった。使うときは私も支える。」

「ありがとう。それにしても、リア銃のマニュアルを見るとことこのすごさがわかるわ。ことこ

がいればことこを救出するのが簡単だったと思う。」

「同意するけど今はいない。でも、何としても助け出す。おとりをうまく使うことを考えている。

「おとり?わかったわ。私がおとりになってスクーパーズをひきつけるわ。」

「ううん、おとりになるのは私とまり。 それでリア銃を有効に使えるようにする。」

「私もおとりで、リヤ銃を使うの。良くわからないけど、 りとの作戦で行こう。 やっぱり、

もう少し上手にボードで飛べるように、練習してくるわ。」

「だったら付き合うよ。」

「ほんと。りとといっしょだと心強いわ。」

増していった。 ころのなども飛んでコツを掴んでいった。途中で転んだこともあったが、スクーパーズのバリヤ PARKの周りで、りとが先導してまりがボードで飛んだ。最初はゆっくりと、しかし、狭いと がだんだん強くなってきていたため、それほど痛くはなかった。 そして少しずつ、その速さを

誰も眠れないまま朝になった。 ことことアルドアはアマツマラの解析を続けていた。 アルドア

がことこに話しかける。

「ここは、制御部のバグ(プログラムのミス)かな。

「どれ。」

「この25321行目から25354行目まで。 記憶部からの信号を受け取るところだけど。」

「通信速度のリミッターがないのが問題かな。」

。だから、 記憶部から想定外なほど高速にデータが送られて来ると、 オーバーフロー

こして、 記憶部のデータで制御部のプログラムを乗っ取ることができる。」

「さすがは、アルちゃん。」

「有難う。これを使って記憶部が調べられないか試してみるよ。」

「そうだね。うまくいくといいね。私が解析したものはこれ。」

「すごいよ、ことこちゃん。一晩でここまで調べたんだ。」

「えへへ。有難うアルちゃん。」

「ごめん。」

何を謝っているの?」

「僕は地球人は下等な生物と思っていた。でも、違った。」

「本当に。有難う。でも、 私も同じ。 スクーパーズって怖い生物と思っていた。 だから、

はなしね。 」

「有難う。」

「それより、 アマツマラを調べましょう。 戦いを止めさせる手掛かりになるかも。

「そうだね。 ことこちゃんが調べた部分を見せてもらっていい?制御部を解析する助けになる

と思う。一

「もちろん。」

アルドアがことこが解析した結果を見ていると、 ガーチューンが捕虜にしたときに取り上げ

たモノアイディスプレイを持って入って来た。

「アルドア、捕虜に自分の無事を棒人間に伝えるように言ってくれないか。 そして、ことこさん

とみさ王女様の捕虜交換をすると。」

「棒人間?あっ、りとちゃんのことね。」

「誰だ?今私にテレパシーを送ったのは。」

「私です。捕虜のことこです。」

アルドアが説明する。

に変換する装置を作ったんです。 捕虜のことこさんが、この翻訳機を解析して、自分の考えをスクー ですので、 スクーパーズと普通に会話することができます。 パ ーズのテレパシ

れを使って協力してアマツマラを解析しているところです。」

「そうか。地球人は馬鹿にできないな。」

「はい、連隊長、おっしゃる通り、できないと思います。」

れ。王女様とことこさんの交換が済んだら、我々は地球から引き上げる。 「それでは、ことこさん、この通信機を使って、自分の無事と王女様との交換の説得を始めてく そして、 3人全員の無

この第8連隊の連隊長ガーチューンが絶対に保証すると。」

ことこがアルドアに尋ねた。

「連隊長さんに、みさちゃんを誘拐したわけではないことを説明してくれた。」

「ごめん。連隊長には説明したけど、 残念ながら信じてはもらえてはいないみたいだ。」

ガーチューン答える。

「いや、私たちは、たぶん君たちがデストロイヤーズか他の宇宙人に騙されていると思ってい

「わかったわ。 「お願いする。 アルドア、すくなくともことこさんについては、 お前の言う通りみたいだな。」

連隊長さん、りとちゃんと話して何とかこの戦いを止めてみせるよ。.

「はい、それは間違いないと思います。」

ことこがモノアイディスプレイを受け取ると、 りと向けて通信を開始した。

「りとちゃん、 りとちゃん、ことこだよ。」

モノアイディスプレイから聞こえた声に、りとは飛び起きた。

「ことこ!?ことこなの!?」

ことこに、りとの驚きと嬉しさが混ざった声が届いた。

「そうだよ。 りとちゃん、まだ良くわからないけど、スクーパ ーズと私たちで、 何か誤解がある

みたいなの。」

「それより今どこなの?」

「ラフォーレだよ。6階の奥の部屋。」

りとが通信の発信源を調べていたまりに目配せをすると、 まりはうなずいた。

「待ってて。 いますぐ行く。」

「りとちゃん、 待って。りとちゃんが来ると戦争になっちゃう。」

りとからの返事がないため、もう一度呼びかけた。

「待って、りとちゃん。りとちゃん、りとちゃん!」

りとは返事をしなかった。その様子を見ていたガー チュ ンが、 蟹爪ふり

「やつらが来ます。」

「そうか、それはよかった。」

蟹爪ふりゃーは第7連隊の全員に命じた。

「全員配置につけ。」

ガーチューンはアルドアに命じる。

「お前は、ここに残って捕虜を見張れ。」

ことこはそれでも必死に呼びかを続けていた。

「りとちゃん、一生のお願い。待って。話を聞いて。」

アルドアがことこに話しかける。

「ことこちゃん、戦いを止めるのは無理だよ。これだけ戦死者が出てるので、棒人間を倒すまで、

たぶんこっちも止まらない。」

「そんな。」

「ごめん。」

「アルちゃんが謝ることじゃないけど。でもアルちゃん、 アルちゃんはここに居て。 お願 そ

うしないと死んじゃう気がする。私が絶対何とかするから。」

「棒人間、りとさんが第7連隊を倒してここまでやって来ると思うの?」

「そんな気がするの。だからお願い。」

「わかったよ。それにここに居ろという命令だし。」

「良かった。」

「外の様子は見れるけど見る?」

「スクーパー ズさんとの戦いは見たくないけど、 争いを止めるために何かできるかもしれ

から見る。」

「意外と強いんだね。外の様子を見るモニターを用意するね。」

「有難う。」

第8連隊の第111分隊を含む第11小隊は棒人間たちへの攻撃は第7連隊に任せて、 煙が打ち出された。様々な色の煙が上下左右散らばって打ち出されていた。第1中隊のなったば のすぐそばで明治通りの様子を観察していた。やがて、原宿の東側の奥の方から何発もの線状の りで移動した戦艦のビーム砲の守備に就いていた。ガジメ、ゼクール、ゴモの3体は、明治通り かりのアジム中隊長が蟹爪ふりゃーに話しかけた。 外では、明治通り西側の建物の屋上に陣取った第7連隊が、今か今かとりとたちを待っていた。 竹下通

「ビーム攪乱幕です。」

うむ。もうすぐ来るな。」

少しして明治通りの東側の竹下通りから射撃手が現れた。 蟹爪ふりゃー が命じる。

「第1中隊照準。」

第1中隊の照準しようとしたとき、 射撃手はすぐに曲がって、 明治通りの東側に入っ てい った。

ゼクールがつぶやく。

「陽動か?しかし、射撃手にしては、動きがいいな。」

一番南側にいた、第4中隊中隊長が叫ぶ。

「棒人間、東急プラザの南側脇。

棒人間が東急プラザの南側の脇から出てきた。

「第4中隊照準。撃て。」

た。第2から第5中隊が隊形を整え棒人間に照準する。 棒人間は少し高度を下げてビームをかわした。そして、蟹爪ふりゃーの方に真っすぐ向かってき

「蟹爪ふりゃー様に近づけるな。撃て。」

棒人間は急上昇してビームをかわし、東急プラザの奥に隠れた。 ゼクールがガジメに言う。

「おかしいです。動きが悪いというか単調で私にも次の行動が読めます。」

たり、棒人間は電柱に激突して壊れた。 明治通りを蛇行しながら飛んだ。各中隊は高度を下げ、 今度は高速で東急プラザ北側の脇から地表すれすれの高さを高速で棒人間が出てきた。そして、 隊員から歓声が上がったが、 棒人間の迎撃に当たった。 蟹爪ふりゃー その一発があ は叫んだ。

「これも陽動だ。気をつけろ。」

ゼクールも大声で叫んだ。

「蟹爪ふりゃー隊長!上です。天井近くのビーム攪乱幕の雲の脇です。」

蟹爪ふりゃーが上を見ると、棒人間と射撃手が並んで飛んでいるのが見えた。

「こっちが本物か!第1中隊は射撃手、 第2から第5中隊は棒人間を狙え。」

のビームは射撃手がいるあたりのビーム攪乱幕に集中してビ 棒人間は蟹爪ふりゃーめがけて急降下してきた。射撃手はビー ム攪乱幕の陰に隠れ ムを放った。 中

「射撃手を攪乱幕出させるな。棒人間を孤立させるんだ。」

第2から第5中隊は、棒人間に集中してビームを放った。

「蟹爪ふりゃーをお守りするんだ。」

第2から第5中隊は自然と蟹爪ふりゃーの周りに集まりはじめた。 棒ではじき返し、かいくぐるために、最初ほど高速に近づくことはできなかった。それでも機敏 に動き回り、 ビームの直撃を食らうことはなかった。蟹爪ふりゃー が各中隊長に指示をする。 りとも集中砲火をボード

「動きを予想するんだ。今いるところに撃っても当たらない。」

「わかりました。」

「いけるぞ。」

「はい。」

が付いたものはいなかった。地上の射撃手は、 プラザ上空にいる、棒人間とその後で攪乱幕に隠れていると思われる射撃手に気を取られて気 そのころ、最初に出てきて偽物と思われていた射撃手が、 明治通りに出てきた。

「モードイレブン・ポジションファイブ。 エネルギー充填完了。 いくわよ。」

とつぶやいた後、 ラフォ レの前で戦っている第7連隊に照準を定めた。

発射。一

散弾が当たって消えていった。 なり、 勢を立て直した。 すると、これまで見たことがないほど強力なビームが打ち出され、 第7連隊に襲い掛かった。第7連隊のほとんどの隊員はなにか起きたか分からないまま、 蟹爪ふりゃ しは、 散弾が多数当たり、 途中で細かく散って、 吹き飛ばされながらも、

「なんだ。何か起こった。」

かった。 周りを見ると、 第7連隊の隊員は蟹爪ふりゃー のビー ムの影の位置にいた数体しか残って 61

「連隊が全滅?どっからの攻撃だ。」

しかし、 - 迫っていた。 そんなことを考えている暇はなかった。 りとが棒で蟹爪ふりゃーを突き刺そうとしたが、 棒人間が棒を逆手に持って超高速で蟹爪 鋏の部分で払いのけた。 ふり

「ちっ。ちょっと遅かった。」

残念に思う気持ちがりとの口からもれた。時間がかかっては、ことこが危なくなると思って、 りとはすぐに蟹爪ふりゃーに突撃し行った。 りの攻撃中にも蟹爪ふりゃーに迫り、蟹爪ふりゃーをしとめるつもりだったのである。そのため、 蟹爪ふりゃーも叫ぶ。 ま

「くそー。こいつだけは何としても倒す。」

刺しにしたまま、 た隊員がりとに向かって来た。 りとにも前に使ったボードを奪う作戦は2度と通用しないことはわかって 蟹爪ふりゃーに近づいて行った。 何体かをルナ銃で、 何体かを棒で切り裂き、 蟹爪ふりゃーが言う。 いた。 最後の1体を棒に串 数体残っ て

「私の攻撃を防ぐ、人質のつもりか。」

串刺しになった隊員が叫ぶ。

「蟹爪ふりゃー様、 自分ごと攻撃して下さい。 みんなの仇を取ってください。」

棒を動かして、 ドに当たるだけならパリヤーが強力な第7連隊隊員は助かる可能性が高いと。りとが、蟹爪ふり 蟹爪ふりゃーはとっさに対応を考えた。 ゃーに迫り棒で突こうとしたとき、蟹爪ふりゃ 串刺しにしたスクーパーズを蟹爪ふりゃーのボードのエンジンに押し当てた。 棒をボードで防げば、棒人間を蟹爪で攻撃できる。ボ ーのボードでその攻撃を防ごうとした。

「熱い。熱い。連隊長、助けて下さい。」

部がエンジンに入ったため、エンジンが故障して蟹爪ふりゃ そのスクーパーズは、そう叫びながら黒焦げになっていった。 弾き飛ばされてしまった。 で、黒焦げになったスクーパーズは消滅していった。 から棒で切りかかる。蟹爪ふりゃー尾でそれを跳ね返そうとするが、 りとは急降下し落下する蟹爪ふりゃ ーは下に落ちて行った。落ちる過程 そして、 自分が原宿クエストの方に 焦げたスクーパーズの一

モニターを見ていたエビふりゃー悲痛な声を上げた。

「第7連隊が、私の部下たちが・・・」

スクーパーズ最強の連隊というわけではなかった。 まだ、普通のスクーパーズの姿だったエビふりゃ が第7連隊に着任したころは、 第7連隊も

「カキふりゃー連隊長、この度第7連隊に着任したエビふりゃー少尉であります。

ている。 「ご苦労。デストロイヤーズとの戦争で、今はお前のような若いスクーパーズの活躍が期待され 第3中隊の第4小隊をお前に任せる。 小隊の指揮をしっかり頼むぞ。

くします。」 「はい。小隊を指揮し、デストロイヤーズを打ち破り、 天の川銀河の平和を守るために全力を尽

「うむ、がんばってくれ。」

着任してからエビふりゃーは、 突撃訓練である。 自分が指揮する小隊で、 人一倍訓練に励んだ。 今日は敵拠点 0

「第3分隊!援護射撃が薄いぞ。 どうした。それでは第1分隊がやられてしまう。

に敵に近づくんだ。地形をうまく利用することが肝心だ。」 「第1分隊!突撃が遅い。 無駄な犠牲を避けるためにも迅速に勝利しなくてはいけない。 それでは敵に捕捉される。 最終的に戦争を終わらせるのは、 落ち着いて、だが、

厳しい訓練が続いた。エビふりゃーは自分に言い聞かせていた。

「隊員を死なせないためにも、 みんなに嫌われても私が厳しくしなくては。」

機雷原に向けてミサイルを発射し、 艇に分乗してその星域に向かった。スクーパーズの艦隊が、上陸部隊の侵攻ルート確保のために た。デストロイヤーズの砲台を破壊するため、第5、7、9連隊の地上軍が800隻の小型上陸 星に多数の強力な砲台を設置し、宇宙機雷を敷設していたため、大損害を出して撤退してしまっ 吹き払うためのミサイルを発射し爆発させた後、小型上陸艇に向けて、砲火を集中させた。 同時に艦隊は損害を避けるために、後方へ撤退して行った。デストロイヤーズはビーム攪乱幕を 限界に達しようとしたとき、3つの連隊の小型上陸艇が機雷原に向けて発進していった。それと デストロイヤーズの砲台の中の超長距離砲の射撃により艦隊にも被害が出ていた。 りの恐怖に隊員たちが叫び ムが命中したり機雷に当たったりして、スクー サイルを発射し、やはり機雷原の中で爆発させた。そのため、視程が短くなっていった。しかし、 ひそかに基地を築い 着任2年後、 スクーパーズ本星から1万年光年ぐらいの距離の惑星系に、デストロイヤーズが ていることが判明した。第43艦隊を向かわせたが、デストロイヤー を上げていた。 機雷原の中で爆発させた。続いて、 パーズの舟艇は、 その数を減らしていった。 ビーム攪乱幕を積んだミ その損害が ·ズが惑

「たどり着けるのか?」

「上陸用舟艇右舷に被弾!制御不能。」

「ふん、こんなへなちょこ弾にあたるかよ。」

「お母さーん!」

「正面、機雷だ。右にかわせ、右だ。」

「ふはあはは!ふはあはは!」

エビふりゃーが自分の小隊の隊員が乗っている12隻に呼びかける。

「全員、落ち着け。ビーム攪乱幕の濃いところをたどっていくんだ。」

点に近づいて行った。 小型上陸艇は少しずつ数を減らしながらも、 デストロイヤー ズの基地から3キロメー ル の地

砲撃班は、小型ビーム砲を忘れるなよ。」 「よし、 上陸艇のビーム攪乱幕を散布、 着陸する。 着陸したら、 ポイントA17D32に集合。

を掘りながら一つの砲台のまわりを取り囲んだ。 死に進路を開き、 していたが、砲台を破壊しないと帰還することもできない状況であるので、スクーパーズ兵は必 っていた。デストロイヤーズの基地の守備隊は1個連隊ほどで、基地を攻めるには、兵力が不足 スクーパーズは、20個ほどのポイントに分かれて集合したが、その数は出発時の半分近くにな 基地に突撃してしていった。エビふりゃーの小隊も基地に侵入、強化した塹壕

面に砲台用の爆破装置を取付け退避する。」 「ビーム攪乱幕を投射する。敵がそれを吹き払うまでの時間に、 一斉に砲台に突撃し、 砲台の壁

かった。 的な方法である。 一斉に突撃することにより、敵の攻撃を分散させ攻撃の密度を下げ、たどり着く兵を増やす古典 確実に犠牲も出るが、強力な支援を得られない状況では、そうするより他はな

各方向からビー ム攪乱幕を吹き飛ばし始める。 「砲台を破壊し、 ム攪乱幕が連続的に投射される。 天の川銀河を守って、 故郷へ帰るんだ。 ほぼ、 同時にデストロイヤ 行くぞ。 ビー ム攪乱幕投射!」 ズのファンがビー

突撃!」

台に向けて突撃する。 エビふりゃーが先陣を切って砲台に突撃を開始した。それに呼応して、 小隊の隊員が四方から砲

「エビふりゃー隊長に続け。突撃!」

員数体が次々に倒れる中、 ム攪乱幕で煙る中を、 エビふりゃーが壁に到達する。 四方、上下から突入してく。デストロイヤー ズ側のビー ム掃射で、

は2318だ。」 「壁に到達した隊員!爆破装置を壁に取り付けろ。 爆発コード23 8. 繰り返す、 爆発コード

指示する。 壁に到達した隊員が、 壁に砲台用爆弾を取り付けたことを確認したエビふりゃ は、 退避開始を

「よし、ビーム攪乱幕投射だ。一斉に退避するぞ。退避!」

隊員が元居た場所に戻って行った。 退避する方が接近するときより犠牲が少なか

「よし、爆破するぞ。」

そのとき、隊員の一人が止めた。

「待ってください、隊長。まだ、ゼトシジが壁のところにいます。」

「くそー。怪我して動けないのか。」

エビふりゃーは動けない隊員にテレパシーで呼びかける。

「ゼトシジ!逃げてこられないか。」

「隊長!動けません。逃げられません。」

「怪我をしているのか。」

このまま爆破してください。そうしない と皆が家に帰れなくなります。」

エビふりゃーは起爆装置を第1分隊長に渡した。

「私の合図で、爆破してくれ。」

「隊長はどうされます。助けに行くのは無理です。」

「大丈夫だ。 少し近づいて、ビーム攪乱幕の切れ目で、 スクープビー ムでやつを引っ張る。」

「わかりました。ただ、それは私がやります。」

「いや、私がやろう。私の方がサイコバリヤーが強力だ。少しなら、 敵のビー ムに耐えられる。

「わかりました。隊長の合図で起爆装置のスイッチを押します。」

頼む。

ビーム攪乱幕の切れ目で、ゼトシジが見えたところで、エビふりゃーが少し前に進みながら上

方に飛び出た。そして、ゼトシジに指示をする。

「ゼトシジ!バリヤー最大だ!」

「わかりました。」

ロイビームで応戦する。ビ 間髪入れず、エビふりゃーがスクープビームでゼトシジを引き寄せる。 - ムを砲台目掛けて発射する。 逆に、 デストロイヤーズ側も砲台の銃座や身を乗り出してデスト ムが飛び交う中、 ゼトシジを強化塹壕まで引き寄せることに成功し 他の隊員は、スクープビ

た。エビふりゃーが叫ぶ。

「爆破!」

「爆破!」

砲台が吹き飛んだ。隊員が歓声を上げる中、 エビふりゃーがゼトシジに呼びかける

「ゼトシジ、大丈夫か。」

見ると、引き寄せる途中にデストロイビー ムが命中したようだった。

「分隊長殿、有難うござい・ま・・た。」

そう言って、ゼトシジが息を引き取った。

ちくしょー。 」

ただ、ゼトシジの顔が安らかだったのが救いだった。 しかし、すぐに中隊長から別の砲台の破壊

「エビふりゃー、 みごとだ。 次は、 そこから500m東の砲台を破壊してくれ。 頼む。

「ゼトシジが戦死しました。」

健在だ。 「そうか。それは残念なことだ。私の中隊では半分近い部下が戦死してい つらいだろうが、砲台を破壊しないと我々はここで全滅だ。」 お前の分隊が

エビふりゃーが静かに答える。

「わかりました。東の砲台に向かいます。」

「頼む。」

船がハッチを開け隊員を収容した。 ばかりだった。エビふりゃーの小隊は4つの砲台の破壊に成功し、本作戦における最も活躍した 台の破壊に成功した。デストロイヤーズは基地の設置を諦め、基地支援艦隊はアンドロメダ銀河 の捕虜を運んで行った。 エビふりゃーの心は沈んだままだった。砲台の破壊と共に、スクーパーズの輸送艦と護衛艦がや って来た。スクーパーズ艦隊主力は、逃げたデストロイヤーズ艦隊の追撃戦に入っていた。輸送 小隊となった。それでも、45体の隊員のうち戦死7体、重傷10体、軽傷15体の損害を出 への撤退を開始した。しかし、砲台破壊に向かった約三千体の兵員のうち、残った兵員は八百体 エビふりゃーは部下を連れて、東の砲台に向かった。その4時間後に戦いが終わった。 それ以外にも見慣れぬ輸送船が着陸してデストロイヤー 全ての砲

蟹爪ふりゃーが分隊長として着任した。 エビふりゃーは順調に出世を続け、少佐に昇進し、 第7連隊第1中隊の中隊長になったころ、

「蟹爪ふりゃー、分隊長として着任しました。」

「ご苦労。連隊長閣下の挨拶は済ませたかね。」

と存じています。」 「はい。ただ私には連隊長よりも大活躍されているエビふりゃー隊長の部下になれて、 大変光栄

に注意するように。 「そうか。そう言ってもらえると嬉しいが、 連隊長の方が階級が上だ。 軍隊だから、 階級の違い

かっただけです。」 「はい、ご注意有難うございます。気を付けます。 ただ、 隊長に私の喜びの気持ちをお伝えした

「わかった。その気持ちは喜んで受け取っておく。早速だが、 君には第132分隊の指揮をお願

「はい、光栄であります。」

「部下には憎まれるかもしれないが、訓練は手を抜かず、厳しくしっかりとやること。 のためになるし、 € 1 つかはきっと分かってもらえるはずだ。」 それが部

たら、 ご鞭撻下さいますようお願い申し上げます。」 訓練は手を抜かないようにします。 エビふりゃ 隊長も、 私に不足してる点がありまし

「わかった。ビシビシいきますよ。」

「全力で頑張ります。」

エビふりゃーは、蟹爪ふりゃーを懸命に鍛えた。それを見ていた隊員の中には

「名前に中隊長と同じ『ふりゃー』がついているのが気に食わないのかな?蟹爪ふりゃー

をあんなにしごくなんて。」

と考える隊員もいたぐらいであった。

なため、 者の中間に位置する観測点のための小さな星での戦闘は、両者とも小規模の動員でも実行可能 中しても大丈夫になっていた。 との戦いの最前線であった。そのころには、エビふりゃーは連隊長に昇進し、すでにエビ天ぷら はスクーパーズが観測所を置いている中間地点の星に駐屯していた。 た大作戦とならざるを得ず、そのような戦いはあまり頻繁に生じることはなかった。 小隊長に昇進していた。 の形に擬態できるようになっていて、その衣の装甲により普通のデストロイビームぐらいは命 河の近くで戦闘するためには、 天の川銀河とアンドロメダ星雲と中間点で、お互いの観測所をめぐる戦いが起きた。 かなり頻繁に起きていた。蟹爪ふりゃーが所属してから、2年が経ったころ、第7連隊 そこに、 一方の蟹爪ふりゃーは、まだ普通のスクーパーズの姿だったが、 補給線の長さによる不利を埋めるために大きな補給船団を伴っ デストロイヤーズの部隊が急襲した。 。そこは、 デストロイヤーズ しかし、 相手の

集中させ、 戦闘は、デストロイヤーズ側が橋頭保を築いた後、 少しずつ占領範囲を拡大していた。 スクーパーズの駐屯部隊の突出部に攻撃を

「連隊長、あぶない。」

デストロイヤーズ7体がビー はじけ飛んだ。 で、エビふりゃー は強化壕の中に隠れた。エビふりゃーの上で集まったビームがぶつかりあって、 ムをエビふりゃーに集中させて撃ってきた。 蟹爪ふりゃーの言葉

「蟹爪ふりゃー、感謝する。油断していた。」

敵はかなり手慣れた部隊です。」 「お気を付けください。デストロイヤーズの侵攻経路やエビふりゃ ー様を狙う作戦を考えると、

ていた。 が、撤退中に攻撃を受けると、 が壊滅する危険がある。それを防ぐためには兵員をポイントA2rまで後退させ集中させたい 「蟹爪ふりゃーの言う通りだ。 敵の状況に対する対応力が速い。 浮足立って総崩れになる恐れがある。 多少デストロイビームを跳ね返すことができていたので油 このままでは、敵に戦線を突破され、 駐屯部隊の戦力

「おっしゃる通りです。 私の小隊が敵を抑えますので、 他の部隊をポイ ント A 2 r まで移動させ

「これは大変危険な任務だぞ。」

「わかっております。

「実際お前の小隊にしかできない任務だ。頼む。 改めて命じる。 小隊は連隊の撤退まで防

衛線を維持せよ。 こちらも、 できるだけ速やかに撤退する。

「了解です。 第11小隊は前進し、 敵の進撃を食い止めます。」

「では、 ポイントA2rで会おう。」

「はい、敵の侵攻を遅らせてポイントA2rに向かいます。」

エビふりゃーは蟹爪ふりゃーを、

「全体のことを考えていて、本当に見込みのあるやつだ。」

と思った。第11小隊が配置につくと同時に、エビふりゃ ーが撤退開始を指示した。

撃する。 「第11小隊以外の部隊は、ポイントA2rまで後退だ。そこで、デストロイヤーズの部隊に反 できるだけ悟られないように、壕内を移動するんだぞ。」

撤退を開始した。

最前線の蟹爪ふりゃーが部下に命令する。

各部隊はダミーを配置した後、

に突破を許せば、 「連隊長から合図があるまで、ここを死守する。連隊の他の部隊がA2ェポイントに集結する前 連隊が大変な危機に陥ることになる。 なんとしても死守するんだ。」

隊員が答える。

「蟹爪ふりゃー隊長とにどこまでもお供します。」

ビーム攪乱幕のファンは常時稼働。サイコエネルギーは使い果たしてもい 「よし。ダミーを使いながら壕内を高速に移動して攻撃しろ。敵に数が少ないことを悟らせるな。 30分は持たせるんだ。全力で頑張るぞ。」 61 砲兵からの支援は

を放った。しかし、その戦法は体力を急速に奪っていった。 を近づけないようにした。突撃しようとするデストロイヤーズがいると、そこに集中してビーム め、隊員が少しずつ傷つき倒れて行った。 った。そして、距離が離れているとは言え、 に見えていた。 ミーを使い、デストロイヤーズの部隊からはその10倍程度の数のスクーパーズ兵が デストロイヤーズの集中した部隊の正面に、第11小隊の約50体が距離を取って並んだ。 第11小隊の隊員が素早く動いてビームを連続して発射して、デストロイヤーズ 圧倒的多数のデストロイヤーズ側からのビームのた バリヤーが弱くなり、 動きも遅くな いるよう

「がんばれ!がんばるんだ。あともう少しだ。」

ぐに塹壕まで引いて行った。砲火は激烈であったが、その何発は第11小隊の塹壕にも命中した。 本当のところは、蟹爪ふりゃーも連隊の撤退がいつ完了するのかは分からなかったが、そう励ま すしかなかった。しかし、その後すぐに砲兵による支援攻撃が始まった。デストロイヤーズはす 「砲兵は何をやっているんだ。」

蟹爪ふりゃーはそう思ったが、連絡によれば7分後に1分半の砲火の休止時間があるはずで、そ のための撤退の準備をするのが先だった。生存者けが人を確認し、けが人を運搬する隊員を割り

当てた。砲火が止んだ。蟹爪ふりゃーが命令する。

## 「撤退だ。」

を極めた。隊員たちは塹壕のないところは、 我をして墜落した。 スクーパーズの砲を狙っていたため、 しかし砲火が止むと、デストロイヤーズの歩兵がビームを撃ってきた。デストロイヤーズの砲は、 砲撃の心配はなかったが、デストロイビー 低空をジグザクに動いて飛んで逃げるが、3体が怪 ムの攻撃は熾烈

「くそー。」

があるため、 あえず、逃げきれたと思った蟹爪ふりゃーは、負傷者の応急手当をすることにした。 蟹爪ふりゃーは、落ちたスクーパーズに飛び寄り2体を自分の上に載せ、1体をビームでけ れ出した負傷者の3分の1が息絶えていた。遺体を持って帰りたかったが、まだ、戦闘の可能性 ストロイビームが多数飛んできていた。数キロメートル離れたところで、砲撃が再開した。 して撤退した。砲撃を恐れて壕から出てくるデストロイヤーズはいなかったが、遠距離から 規則通りに記録だけして遺体を置いていく他はなかった。 しかし、連 ん引

「すまん。」

蟹爪ふりゃーは、また2体を乗せて撤退を再開した。連隊に帰還して、エビふりゃーに報告した。 「第11小隊は、遅滞戦闘を行い、敵の進撃を30分遅らせただいま帰還しました。」

ご苦労だった。」 「有難う。第7連隊の本隊は1体の犠牲を出すことなく撤退を完了した。蟹爪ふりゃー、 本当に

蟹爪ふりゃーは涙を流しながら、 「1体の犠牲もなくでありますか。良かった。本当に良かったであります。 戦死した隊員を思い、静かに語りかけた。 良かったで・

「よく全力で頑張った。お前たちの犠牲は無駄ではなかったんだ。」

隊となった第7連隊も派遣されていた。 基地の設営が急務とされていた。 艦が増加していった。艦隊の増援もあったが、劣勢を挽回するためには艦隊の補給と整備を行う の大規模な上陸部隊が惑星に降下することは阻止していた。しかし、撃沈または戦闘不能になる 蟹爪ふりゃーは中隊長昇進しておりに蟹爪フライの形に擬態できるようになっていた。 では補給の困難さが災いして劣勢であった。 現在から2年と少し前、スクーパーズとデストロイヤーズが休戦する前の最後の戦闘があ 10個艦隊、 スクーパーズがアンドロメダ銀河周辺のズテラド星域の惑星ゾラに前線基地を設営してい 10個戦闘連隊、 10個工兵連隊による大規模侵攻である。 エビふりゃーは第二形態への擬態が可能になっていた。 大きな犠牲を伴う艦隊の奮戦でデストロイヤーズ スクパ ーズ最強連

りに、残り9個の連隊が配備されていた。その日も艦隊戦が行われ、スクーパーズの艦隊がデス 第7連隊は基地の設営をしている10個工兵連隊の直衛部隊として配置されていた。 ヤ ズの攻撃をなんとかしのいでいた。すると、超高速な小型の宇宙船が艦隊の防衛網を

かいくぐり、惑星ゾラの基地の近くに着陸したとの連絡が入った。

蟹爪ふりゃーがエビふりゃーがそのことを報告する。

「デストロイヤーズの高速小型宇宙船が着陸したとの連絡がありました。」

「小型とはどのぐらいの大きさだ。 どのくらいの人数が乗ることができるのか。」

「5名程度ではとのことです。」

「5名か。偵察部隊か。」

「本部ではその考えです。その5名が艦隊に地表の攻撃ポイントを指示するのではないかと。」

「それが妥当な推測だろう。」

「現在、1個艦隊を設営中の基地の前面に展開して、艦隊のバリヤーで基地を保護するとともに、

地上からの通信に対して最強レベルのジャミングをかけるそうです。」

「そうか、それではこちらの連隊間の通信もできなくなるな。」

「そうですが、相手は5名ですので、1個中隊もあれば十分対応できると思います。」

「そうだな。だが念のため我々も警戒レベルを引き上げるぞ。」

「そこまでしなくても。 ここまで来るには2つの連隊を突破する必要があります。

「そうだが、通信ができない以上、突破されたら敵は突然現れる。こちらの対応が遅れれば、

大な被害が出る。」

「了解しました。休憩中の隊員を呼んで警戒レベルを引き上げます。」

「申し訳ないが頼む。なぜだかいやな予感がするんだ。」

「こっちに来てから最初のお客さんですから、 せいぜい歓迎してあげないと。」

ああ。

遠くの戦闘の音が静かに聞こえた。

「始まったようですね。」

「そうだな。第21連隊が片づけてくれると思うが。」

しかし、音は止まずに、 少しずつ近づいてきた。第7連隊の右前に配置してた第16連隊から信

号弾が上がった。

「信号弾です。2つ後方の防衛線まで後退するようです。 本当に5人だけなのでしょうか。

が隠れていたとか。」

「わからん。第7連隊も戦闘態勢を取る。 他の作業を中止して全員防衛線に戻れ。

「わかりました。その命令を全隊員へ伝達します。」

「頼む。通信が不完全だから、確認は通信に頼らず直接伝令を出すように言ってくれ。

少しして、蟹爪ふりゃーが戻って来た。

「全員配置につきました。」

第16連隊から防衛ラインを突破された旨の信号弾が上がった。 エビふりゃ

をする。

「合戦準備の信号弾を撃て。」

「了解です。」

空に向けて信号弾が撃たれた。 そのとき、 エビふりゃ から数百メー ル前方の第7連隊の最外

郭の防衛線に攻撃が始まった。

「攻撃始まりました。」

遠くの戦闘を見ていたエビふりゃーが話しかける。

「何だ、デストロイヤーズが撃つビームが白いぞ。」

「連隊長のおっしゃる通りです。白いビームです。デストロイビームでしょうか。」

「それは分析しないと分からないが。」

第7連隊の最外郭防衛線が突破されたことを示す信号弾が撃たれた。 エビふりゃー

「まだ、 戦闘開始から2分しか経っていないが。本当に5人しかいないのか。」

「はい、5人との情報です。間もなく第2防衛ラインが戦闘に入ります。

ラインだ。相手の数が少ないなら我々が直接対応したほうがい 「このままでは、第2防衛ラインもそんなに長く持たないだろう。 61 それが破られたら、最終防衛 蟹爪、行くぞ。 第2防衛ライ

ンの第3中隊と合流する。第1中隊はここで待機だ。」

「わかりました。」

「私は第2形態になっていく。」

「最初からですか。」

「相手の強さから考えて、この第1形態では対応できない。\_

「久々の直接戦闘、高揚します。全力で頑張ります。」

「落ち着いて行けよ。」

「はい。」

第2形態になったエビふりゃーと蟹爪ふりゃーがボードに乗って飛び立つ。

そして、白いビームで攻撃されると一撃で一個小隊ぐらいが消滅してしまっていた。 第2防衛ラインに到着すると、すでに突破される寸前だった。白いビームを撃つデストロイヤ ズに対して、隊員が必死に攻撃しているが、白いビームの盾で防がれて効果がないようだった。

「これはいかん。」

それを見た隊員が叫んだ。 白いビームを放った瞬間、 エビふりゃーが高速で突撃していった。 エビふりゃーがその前に立ちふさがり、 そのデストロイヤー ズ兵が防衛線のスクーパーズ兵に 尾でビー ムを跳ね飛ばした。

「連隊長!」「連隊長が来てくれた。」

エビふりゃーが蟹爪ふりゃー命じる。

「私が正面から対処する。蟹爪は側面から攻撃してくれ。」

蟹爪ふりゃー が側面に周りこもうとすると、 1人のデストロ イヤ ズが出てきて、 デスト 口

白いビームが放たれた。 りゃーに声をかける。 はじき返したが、 ったが、今までに経験したことがないほど強力だった。蟹爪ふりゃーはなんとか、そのビームを ムを放ち、それを阻止しようとした。そのビームの色は普通のデストロイビームと同じで黒か 自分もかなり跳ね飛ばされてしまった。体勢を崩した蟹爪ふりゃー それはエビふりゃーがカバーに入り跳ね返した。 エビふりゃ に向かって が蟹爪ふ

「大丈夫か?」

「大丈夫です。ただ、あのビームもかなり強力です。」

「わかった。」

白いビームのデストロイヤー りゃーがそれを阻止しようとしたが、 白いビームのデストロイヤー 最初にあの白いやつを倒す。それから他の4人を追う。 ズ兵だけ残して、4体が先に進もうとした。エビふりゃ ズ兵が蟹爪ふりゃーを撃ったデストロ 白いビームを避けながらだと、思うように進めなかった。 右から近づけ。」 イヤ ズ兵に指示をした。

残りの4人に対しては、 最終防衛ラインの隊員の頑張りを期待するしかなかった。

「最強の第7連隊隊員だ。頼むぞ。」

手の白いビームの盾で防がれ、 前と横から白いビームを出すデストロイヤーズ兵に襲い掛かるが、 ないようだった。 エビふりゃーが指示をする。 なかなか倒すことができなかった。 ただ、相手にも余裕はあまり 右手の白い ピー ム の剣と左

「いくぞ、連携攻撃アクレションディスク(降着円盤)。

「 は い!」

を仕掛けてい エビふりゃーと蟹爪ふりゃー った。 は、 デストロイヤー ズ兵のすぐ傍を周りを回りながら、 次々に攻撃

「これならば、反撃できまい。」

デストロイヤーズ兵も防戦一方だった。エビふりゃーが命じる。

「ツインメテオアタック。」

のまま下に押し込んでいった。 2体が並んで、デストロイヤー デストロイヤーズ兵が地面に衝突した。 ズ兵に迫った。デストロイヤーズ兵が剣と盾で防ぐが、 エビふりゃー が命じる。

「蟹爪ふりゃー、先にいった4人を頼む。 私は、 こいつを片づける。」

「了解です。先の4名の攻撃を阻止します。」

「頼む。」

「全力で、頑張ります。」

ドのエンジン部に命中して、 蟹爪ふりゃーが先に行った4人を追って行った。 ムはエビふりゃ デストロイヤーズ兵が白いビームを撃って来た。 ーをそれた。 エビふりゃ 蟹爪ふりゃ ーはいやな予感がして振り返ると、 ーが落ちて行った。 エビふりゃ エビふりゃ は倒れたデストロイヤーズ兵に は防御体制を取るが、ビー 蟹爪ふりゃーのボ

はやめた方がいいか。」 「この状況でボ ードのエンジンを狙ったのか。冷静な対処だ。手ごわいな。 うかつに飛び込むの

をしたが、すぐにボードで飛び立ち、 エビふりゃーは突入するのを止めて距離を取った。 蟹爪ふりゃーの方へ向かった。 デストロイヤーズ兵はすこし残念そうな顔

「させるか。」

がすほどに立ち上った。 ているようだった。10分ぐらいが経ったところ、 ストロイヤーズ兵は時より白いビームを撃つが、 エビふりゃーは横からスクー パーズ兵をけん制して蟹爪ふりゃーに近づけ 積極的に攻撃してくることはなく、 建設中の基地で大爆発が起きた。 ないようにした。 火は天を焦 足止めをし

「第2中隊、防ぎきれなかったのか。」

まったようだった。 給物資も置いてあったため、つぎつぎに誘爆していった。10個連隊いた工兵連隊が壊滅してし それを見たデストロ イヤーズ兵はビー ム攪乱幕を出しながら上昇していった。 艦隊のため の補

ため広い範囲に戦力を分散させすぎた。」 「しかし、やつら、たった5名で基地を破壊しに来たのか。 くそー、 目的が観測と想定していた

建設中の基地の方から、他の4名のデスト ストロイヤーズ兵と合流するようだった。 口 イヤーズ兵も上昇してい った。 白 ピ ムを撃つデ

無理か。」 「迎えが来るのか。私のボード のエネルギー があまりない。 上空に上がられると追っ てい くのは

恨めしそうに、デストロイヤーズ兵を見上げた。

「卑怯だぞ!降りて来い!」

そんなことを叫んでも、 ストロイヤーズ兵が、 何かを見つけたのかかなり南の方に向けて降下してきた。 降りてくるわけはないが、そう叫ぶしかなかった。 が、 白 11 ムをデ

「降りてきた。」

ち入ってはいけないと定められた区域に当たってしまった。 エビふりゃーはその降下地点に向けて、 ボ ードを飛ばした。 しかし、 一般のスクー パ ズ兵が立

「ここからは入れないか。くそー。」

ズ兵を見つめていた。 エビふりゃーは、立ち入り禁止区域の手前で地団太を踏みながら、 降下して行くデストロイ

の色が全員黒いことを訝しがった。 すると、1個分隊ほどのスクパー ズ兵が上がって行った。 エビふりゃ がそのスクー パ

「知らない兵だな。宇宙艦隊の陸戦隊か?何で色が黒いんだ。」

その黒いスクパーズたちは、今までに見たことのないビー ムを発した。

「なんだ、あの黒みがかっているスクープビームは。」

飛ばして進んで、そして白いビームでそのスクーパーズ兵を簡単に倒してさらに降下してい ただ、 そのデスト ロイヤーズ兵は難なくそのビー ムをかわしたり、白い . ビ ー ムのシー ルドで弾き

「くそー。艦隊の陸戦隊では相手にならない。私が行かないと。」

に呼びかけがあった。 エビふりゃー、デストロイヤーズ兵に接近していくと、地上の部隊からそのデストロイヤー ヤーズの一般民が、スクーパーズ兵に追い立てられて輸送船に乗せられているところが見えた。 エビふりゃーは立ち入り禁止区域の標識を無視して、デストロイヤーズ兵を目掛けて進ん 「ん。何をしている。建設中の基地の近くで戦闘の危険を避けるために、住民を疎開させるのか。」 上昇したエビふりゃーがデストロイヤーズ兵が向かう先を見てみた。すると、デストロイ

保証しない。」 一ズ住民の命は保証しない。繰り返す。こちらを攻撃するならば、デストロイヤーズ住民の命は 「現在、我が隊に接近中のデストロイヤーズ兵に告ぐ。こちらを攻撃するならば、デスト 口

エビふりゃーがつぶやく。

船で立ち去って行った。去った後、エビふりゃーが心の中でつぶやく。 デストロイヤーズ兵は、低空を飛び攻撃はせずに記録だけしているようだった。下から、スクー て、白いビームを放つスクーパーズ兵は他の4名のスクーパーズ兵と共に超高速の小型の宇宙 パーズ兵が攻撃するが、効果があるようには見えなかった。そして、上空へ去って行った。 「一般住民を人質にするのか。 あまり感心しないな。本当に殺しはしないだろうけれど。

ねる必要があることは確かだ。」 「しかし、やっかなやつらが現れたな。 いずれにしろ、あの白いビームを出すやつの対策を至急

少しして、デストロイヤーズの一般住民を乗せた輸送船は静かに上昇して行き、 護衛艦隊と合流した。 見たことのがな

儀なくされた。 クーパーズ艦隊は天の川銀河への帰投までに半分近くの艦を失った。 基地の建設が失敗し、 デストロイヤ 補給がままらなくなってきたため、スクーパーズの侵攻部隊は撤退を余 ズ艦隊の追撃により、 十分な補給がないまま戦うことになったス

の近衛連隊への異動と蟹爪ふりゃーの第7連隊連隊長への昇進が決まった。 幸運にも第7連隊はスクーパーズ本星に帰還することができた。そしてほどなく、 エビふりゃ

「連隊長、昇進と近衛連隊への異動おめでとうございます。」

かった。 「ああ、 王族の方々を直接お守りする名誉ある任務だ。だが、ずうっと過ごした第7連隊に居た 命令だから仕方がない。」

「私では心配でありますか。」

まえにはその資格が十分あると思うよ。」 「そんなことはない。 お前の強さ、適性を認めたから軍もお前を連隊長に選んだんだ。 お

「有難うございます。」

ておいた方がいい。」 「活躍を期待しているよ。だが、 あの白いビームを出すデストロイヤーズ兵に対する対処は考え

「はい、いまあの兵に対する戦術を連隊司令部で検討しています。 次に対戦することがあれば、

倒してご覧入れます。」

「それは頼もしいな。」

「任せて下さい。」

「そうか。では、私は出発する。第7連隊を頼むぞ。」

「はい。全力で頑張ります。連隊長もお達者で。」

「今日からは、お前が連隊長だがな。」

「私にとっては、エビふりゃー閣下が永遠に隊長であります。 分からないことがありましたら、

相談に伺いたいと思いますが、よろしいでしょうか。」

俺にできることがあったら何でもする。 いつでも来てくれ。

「有難うございます。」

「ではまた。」

「はい、次にお会いできる日を楽しみにしています。」

そう言って、2体は別れていった。

ぐらい竹下通りのビーム攪乱幕を濃くした。 まりの攻撃で第7連隊が壊滅するところを目の当たりに見た第11連隊は、 ガーチューンがモーガンにテレパシーで話しかけ 周りが見えない

「モーガン、ビーム攪乱幕を濃くしすぎた。 これでは、 相手の動きが分からなくなる。

「センサーがあるから大丈夫だ。」

「センサーでは全体の動きが分かりづらく、指示が遅れる。」

「しかし、相手の武器は強力だ。 ビーム攪乱幕を濃くした方が安全だ。今は戦闘中だ。 真

をしている時間はない。わかった、 お前の意見を聞いて見張りを出す。以上だ。」

「モーガン!」

モーガンは返事をしなかった。

「ガジメ、おまえの分隊で明治通りを見張れ。棒人間の動きを掴むんだ。」

「ゼクール、ゴモと私の3体で、 もうやっています。しかし、 明治通りにやつらはいません。」

「そうか、わかった。しかし、やつらはどこにいるんだ。」

ガーチューンはいやな予感がした。

りとは蟹爪ふりゃーを弾き飛ばしたあと、まりとの打ち合わせした通りに、竹下通りの原宿駅 の入口に向かった。そして煙の中に飛び込み、近くにいたスクーパーズ兵たちを棒から伸びて

を発することはもできずに消えていった。すぐに、まりがやって来た。りとは、 他のほとんどのスクーパーズ兵たちは、明治通りで戦闘が起きていると考えていて、 た。まりも第7連隊を攻撃した後、目立たないように迂回して竹下通りに入り口に向かっていた。 断し、外から来て煙が噴き出している側のパイプを横に蹴り、竹下通りには煙がこないようにし いるホ りの背中に、まりのボードを背負わしながら話しかける。 ホースで切断して始末していた。急所を正確に切断しているため、 ム攪乱幕を濃くしていたため何が起きているかわからないようだった。テレパシーが聞こえな くなったことを不審に思って入口に確認に来たスクーパーズ兵は、 スを使って静かに手早く切断して消滅させた後、道路に敷設してあったパイプ類を切 スクーパーズ兵はテレパ りとが防弾版に隠れながら、 地上に降りたま しかもビー

「うまくいった。」

「本当。すごい、りと。」

「次は、竹下通りのスクーパーズを片づける。」

「空気の充填は完了しているわ。」

「じゃあ、後ろから支えるね。」

リア銃を竹下通りに向けて構えたまりが大声で言う。

「モードサーティツーポジションワン。空気砲、いけー。」

引き金を引くと非常に強い空気の反動があった。りとに支えられながら、その反動を受け止めた。 竹下通りのビー ム攪乱幕が吹き飛んで行った。 りとがまりに言う。

「次は散弾。」

「了解。モードエイトポジションセブン。発射!」

るか分からないまま、消えて行った。まりは射撃しながらりとのボードに後ろから乗り、左手で まりはすぐ前に現れたスクーパーズに散弾を浴びせた。 りとの脇から前に手を回して、リア銃を自分とりとの肩にも置いて構えた。りとがまりに話しか スクーパーズがどこから攻撃されて

「じゃあ、行くよ。」

りとがボードを操作して、 竹下通りの上に出た。 まりが驚いて言う。

「すごい数。」

って。スクーパーズが見える範囲、 「うん。わかってる。」 「ことこを助ける邪魔はさせない。 まんべんなく。 全部消す。まりは手筈通り、 残ったスクーパーズは私が片づける。」 竹下通りに散弾を撃てるだけ撃

長がそれぞれの隊員に向かって叫ぶ。 弾が上から降り注ぐ。 まりがリア銃を次々に竹下通りに向かって発射する。 まとまった数のスクーパーズが消えて行くのを見た中隊長、 第 1 1連隊と第8連隊の残りの隊員に散 小隊長、

「退避だ。身を物陰に隠すんだ!」

来るかも気になっていた。 が命中し消えていった。 クー ーズを文字通り全滅させるつもりだった。また、りとには速いスクーパーズたちがいつやって ことこ救出の邪魔にならないように、また、まりがボードに同乗しているため俊敏に動 ーズは隠れようとしたが、ほどんどはその場に伏せるのが精一杯で、 1体でも残して後ろにまわられると、 りとは早歩きぐらいの速度でゆっくりと竹下通りの上を進んで行った。 いろいろな考えが渦巻く中、りとがつぶやく。 まりが危険になるため、 竹下通りのスクー 次々にまりの散弾

「集中しないと。1匹も残しちゃだめ。」

連隊のモーガン連隊長が、棒人間めがけて飛び出していった。 るものに対しても、 めて行った。負傷して動けないもの、2体寄り添い隠れるもの、数体のグループが集まって隠れ りとは、 ルナ充を高速に操作して、左右の店に隠れているスクーパーズを見つけては確実に仕留 スクーパーズの急所に対して、 1体に1射づつ正確に射撃を行った。

「くそー、私の大切な部下を皆殺しか。 悪魔め。」

抜き簡単に仕留めた。 らビームが放たれるのを見て、棒やボードで弾き返し、そのスクーパーズの急所をルナ銃で打ち モーガンは棒人間めがけて、スクープビームを放ったが。りとは、向かってくるスクーパ 1 ・ズか

消えて行くので、少し怖くなっていた。それでも、 理していった。また、悲鳴のテレパシーを上げながら竹下通りを東に逃げようとするスクーパー 不安は減って行った。 ズも多数いたが、まりのリア銃の格好の餌食になった。まりは、逃げ惑う多数のスクーパーズが りとの戦闘能力はこれまでの実戦で飛躍的に向上していた。 「まりに手は出させない。でも、 何?このスクーパーズたち、ゲームより簡単って感じ。 りとを後ろからもう少し強く抱いたら、 人間技とは思えないほど高速に処

「りとの言う通りにすれば大丈夫。」

状況を把握するために参謀に尋ねた。 点のそばにいるガーチューンや、ビー その悲鳴が重なって聞くのが恐ろしい信号となったテレパシーが竹下通りと明治通りの交差 ム砲を守っている第111分隊に届いた。 ガ ーチューンが

ビーム攪乱幕の供給が止まっているぞ。どうした。」 「30秒ぐらい前に強烈な風でビーム攪乱幕が吹き飛んでしまったが、 何が起こっているんだ。

「分かりません。 風の直後、 伝令を原宿駅側に出しましたが、 戻ってきません。」

「やつら、このタイミングでビーム攪乱幕のパイプを切ったのか。」

った。 ガーチューンが、 ビーム攪乱幕のタンクを使おうと思ったが、竹下通りにはあまり

た。第7連隊の強さを過信していた。」 「しまった、 ム攪乱幕のタンクをラフォ に運び出し過ぎた。 昨夜補充しておくべきだっ

ガジメの方を向いて言う。

「ガジメ、ビーム砲を死守しろ。 これを失ったら我々は攻撃できなくなる。

ガジメには悲痛な叫び声のテレパシーが重なって聞こえていた。

そー、銃がこっちに。」「わわわ。」 「みんな消えていく!」「小隊全滅です。 救援を!」「ガデ、 助けて!」「ビト、 今行くぞ。」「く

立ちます。」 「いえ連隊長。 この悲鳴尋常じゃありません。今までに聞いたこともないような。 私でも鳥肌が

ちに逃げてくる隊員もいたが、 ゼクールが原宿駅側を見ると、 れるスクーパーズを探すように棒人間のタンクが高速に動き回りビームを発射していた。 散弾が降り注ぎはじめ隊員がどんどん消えて行った。そして、 途中で散弾が当たって消えて行った。 ゼクールが叫ぶ。

「棒人間と射撃手が来ます。」

建物の影から、 りに指示する。 竹下通りの上を飛んでいる棒人間と射撃手が見えてきた。 りとは一度停止し

「明治通りの出口の方にも撃って。 1体でも逃がすと、 ことこが心配。」

一了解。」

自分の隊員に叫ぶ。 まりは、ガーチュー く散弾がを撃ち始めた。散弾がガーチューンの隣にいた副官に当たり消えてしまった。ガジメが ンや第111分隊がいる竹下通りの明治通りの近くから手前にまんべ んな

「私かゼクールの後ろに隠れろ。」

ガーチューンも指示する。

「全員、竹下通りから離れろ。ここにいては全滅だ。」

ゼクールが上申する。

「私が、牽制に行ってきます。」

「だめだ。やつらには第7連隊を壊滅させた散弾もある。」

「でもそれでは。隊員たちを見捨てろと言うのですが。」

「そうだ。みんな栄誉あるスクーパーズ兵だ。各自で対処してもらうしかない。 今お前が消えた

ら、第8連隊には反撃の手段が完全に無くなる。」

ガジメも言う。

ゼクールは牽制に行きたかったが、 「お前が離れたら。 分隊の盾になるやつがいなくなる。 自分の後ろの隊員を見捨てるわけにもいかなかった。 後ろのみんなをここから逃がすんだ。」

「分かりました。」

丹度、ガーチューンが命令した。

「全員、竹下通りを離れろ。退避だ。」

竹下通りを離れて良い命令が出たため、隊員は竹下通りから離脱することができるが、もう手遅 れだった。すでに、道にいたスクーパーズはほとんど消えていた。店に隠れているスクーパ

出て、 たので前進を再開した。 は動くことができなかった。 北側に退避した。 りとは速いスクーパーズたちを警戒して停止していたが、出てこなかっ 第111分隊の隊員はガジメとゼクールが盾になっ て明治通り

スクーパーズからの反撃はなかった。それでも気を緩めず、店や物陰に隠れているスクー 「出てこない?なぜ?でも、好都合。ここを片づけて、ことこを助けに行かなくちゃ。 ーズ

を1体づつ仕留めていった。明治通り付近まで達するところで、まりに指示をした。

「まり、あのビーム砲をお願い。」

一了解。\_

まりは普通のモードで、 トロイヤーズの力を取り込む結晶を使うしかないと覚悟していた。 ビーム砲を1体破壊した。 それを隠れて見ていたガーチュ ンは、 デス

引き返してラフォーレに向かった。 りの方に向かおうとしていた蟹爪ふりゃーがいたが、りとたちがラフォーレに向かうのを見て、 りととまりは、 その後、ラフォーレに向かった。明治通りにはラフォーレに戻ってから竹下通

「くそー。貴様ら絶対に許さん!」

ラフォーレの6階の部屋で、 モニタを見ていたアルドアがことこに話しかけた。

ズコアを撃ち抜いている。 「棒人間、ごめん。りとさん、散弾で生き残ったスクーパーズを1体に一発で正確にスクーパ 隠れているスクーパーズを探し出すのも速くて1体も見逃さない。 攻

「りとちゃん・・・」

撃に反応するのも速い。」

らず殺された。」 「竹下通りにはもう誰も残ってい ない。 第11連隊は1分足らずで本当に連隊長以下1体も残

「ごめんなさい。」

「ことこさんが謝ることではないけれど。 でも、りとさんに殺されたスクーパーズは楽に死ねた

と思う。コアに1発だったから。それだけが救いかな。」

「りとちゃんもそう言っていた。スクーパーズが楽に死ねるように急所だけを狙 ってみるって。」

「それは・・・・・」

「りとちゃん、たぶん、ここに来るから、 アルちゃんは私の傍にいて。 私が絶対に守るから。」

「有難う。情けない話だけど。」

「ううん。そんなことはないよ。 アルちゃ んは戦う人じゃないから。

「戦うスクーパーズね。」

ーそうね。」

そう言って、二人は少し微笑んでりとを待った。

ラフォーレの6階の壁にはまだ穴が開いていた。

「ことこを連れてくる。ここで、 蟹爪を防いでくれる。」

「あいつに普通のリア銃は通用しないわよ。」

「でも、 後ろに吹き飛ばせるから、 近づけないことはできる。」

「わかったわ。 頑張る。」

「お願い。すぐに戻る。」

その分後ろに飛ばされてしまい、近づくことができなかった。蟹爪ふりゃーが射撃主を睨んで叫 まりは近づこうとする蟹爪ふりゃーに、リア銃を打ち込む。ビー ムは爪の部分で弾き飛ばしたが、

「おのれー。」

まりはその後もエネルギー 充填が終わると、蟹爪ふりゃーに向けてビー ムを発射した。

エビふりゃーが、第7連隊が全滅して、それでも必死に戦おうとしている蟹爪ふりゃー -を見て

ポツンと言う。

「蟹爪。さすが第7連隊の連隊長だ。」

6階のフロアーにスクーパーズはいなかった。 りとが6階の中を走りながら叫ぶ。

「ことこ。ことこ!どこなの。返事して!」

何回か叫んでいると、返事が聞こえた。

「りとちゃん。ここだよ。」

6階の小部屋から聞こえているようだった。 りとは、 その小部屋のドアを蹴破る。 元気そうなこ

とこが見えたので、喜んで思わず叫んだ。

「ことこ!」

同時に、ことこの右後ろにスクーパーズが1体見えた。りとの心に昨日の通信でのことこの悲鳴

がよみがえった。

いかのようにじっとりとを見ていた。しかし、りとにとっては意外な行動をことこが取った。両 りとは棒を振りかざして、そのスクーパーズの方に、 「スクーパーズ、よくもことこを。覚悟して。」 駆け寄ろうとした。スクーパ ズは動けな

手を広げて、りとの前に立ちふさがったのである。 それも今まで見たことがないような、 強い意

志を持った顔で。そして強く叫ぶ。

「やめて、りとちゃん。」

りとが少し驚く。

「ことこ?!」

「やめて、りとちゃん。 アルちゃん。アルドアさんはい スクー パ ズだから。」

「いいスクーパーズ!?それより怪我はない?」

「大丈夫だよ。」

「そう。 食べ物や飲み物は?」

「アルちゃんが、コンビニから持ってきてくれたから。」

「そう。」

のね。有難う。わかった、見逃してあげる。早く逃げて。そして、もう二度と私たち目の前に現 りとがアルドアの方を見る。アルドアはビクッとしたようだったが、 「アルドアさんっていうの。何か下心があるのかもしれないけど、ことこに優しくしてくれた りとが静かに話しかけた。

「りとちゃん。アルちゃんは本当にいいスクーパーズなんだよ。」

れないで。今度、私たちの前に現れるときは覚悟して。」

「そうだね、きっと、そう。じゃあ、行こう。」

「本当だって。」

を警戒しながら部屋から出て行った。ことこがアルドアに話しかける。 りとは、ことこのアマツマラを装置から取り出し、 ことこの手を引いて、 りとはアルドアや周り

かったが、ことこが全く無傷だったので、本当にほっとしていた。 アルドアはことこを見つめていたが、何も答えなかった。りとは、ことこの態度が良くわからな 「アルちゃん、有難う。 りとちゃんも、 本当は優しい女の子なんだよ。ごめんね。 またね。」

「まり、どう。」

まりのところに着いたりとが、

外を見ているまりに話しかける。

「うん、何とか蟹爪を追い払らっている。」

そして、振り返って元気そうなことこを見て、うれしそうに言う。

「ことこ、元気そうだけれど、大丈夫?」

「大丈夫だよ。それより、りとちゃん、まりちゃん聞いて。」

りとが尋ねる。

何?

「なんか誤解があるみたいなの。」

「そうなんだ。 わかった。PARKで聞くよ。 でも今はここを離れよう。

「わかった。じゃあPARKで話を聞いて。」

「わかった。」

まりが飛ぶ準備をしながら、ことこを載せて飛ぶ準備をしていたりとに話しかける。

「でも、良かった。ことこが無事で。」

「うん。でも、ことこ、 いっしょにいたスクーパーズにのことを、 アルちゃんって呼んでいた。」

「アルちゃん?」

「そう。食べ物とか飲み物とか全部持ってきてくれたみたい。」

ことこが強く言う。

「ほんとだよ。 アルちゃん。 アルドアさんは、 本当にいいスクーパーズなんだよ。」

りとが答える。

<u>ک</u> \_ 「わかった。ことこがそこまで言うなら、そうだと思う。本当にいいスクー パーズもいるってこ

まりがりとことこに答える。

「さすが、ことこ、宇宙人にももてるのね。 私たちだったら死刑か、 運が良くてもくさい飯だわ

りとは少し笑いながら。

「そうね。 でも本当に無事で良かった。 じゃあ行こう。」

「了解。」

ビーム攪乱幕の準備をしたが、 まりを先頭に、 りとのボードの前にことこを乗せて3人はPARKに向かった。 攻撃してくるものはいなかった。 まりとりとは、

ガーチューンがアルドアに連絡する。

「そっちに棒人間が行ったが、大丈夫か。」

「私は大丈夫です。棒人間が目の前に現れたときは、血の気が引いて動けなくなってしまいまし

たが。ことこさんが、 棒人間に取りなしてくれました。」

攻撃しなかったのも、皆殺しをするための作戦だったのかもしれない。 せたが、負傷兵さえ一体もいなかった。棒人間が残らず殺したようだ。 を殺すのが楽しいのかもしれない。竹下通りは全滅だった。第111分隊に生存者を探しに行か 「それは災難だな。私でも同じ部屋で棒人間といっしょなんてぞっとする。やつはスクーパ これまでパイプラインを こちらとしては、 もうあ ーズ

「デストロイヤーズの力を取り込む結晶ですか。」

れを使うしかない。」

「そうだ。やつらは第7連隊を壊滅させるほどの力を持っている。その結晶を使う以外に勝つ方

法はもうない。」

「わかりました。地球での使用は厳禁でしたが、この状況では連隊長のおっしゃる通り仕方があ

りません。4体分しかありませんが、至急準備します。」

あと、戦艦のビーム砲が1台無事だ。 その整備もお願いする。」

「わかりました。」

「あと、お願いばかりで悪いが、こういうものを作っておいてくれ。

ガーチューンはそう言って、 製作を依頼するもののデータを送った。 アルドアは驚いた。

「これは。」

「生体センサーを組み合わせるだけだ。 お前ならば3分できるだろう。」

「そうですが。」

「わかりました。」

アルドアは、 ラフォー レに置いてあるその結晶と連隊長に頼まれたものを作るための部材を取

りに向かった。

を確認して少し安心した。 PARKに着いた3人は、 まりが2人に話しかける。 モニターで原宿で活動し てい るスクー パ ズがほとんどい

「少し休もう。紅茶を入れてくるわ。」

りとが答える。

「まり、有難う。」

ことこが二人に話しかける。

「りとちゃん、まりちゃん、お願い聞いて。」

優しかったのは何かの作戦としか考えていなかったが、約束だったので、ことこの話を聞こうと まりは台所でお湯を沸かしていて聞こえていないようだった。 りとはスクーパ ーズがことこに

「それはそうなんだけど、その話しじゃなくて、 「うん、スクーパーズの話しね。もちろん聞くよ。アルドアというスクーパーズが優しかったの。」 スクーパーズが私たちを攻撃してくる理由。」

「何て言ってた。私たちがスクーパーズの王女様のみさちゃんを誘拐したって?」

「そう、その通り。りとちゃん、何でわかるの?」

ビふりゃーが侍従かな。でも、あのスクーパーズたちの本当の狙いはみさちゃんなんだと思う。」 「みさちゃんがスクーパーズというのは本当だと思う。王女様というのも本当かもしれない。

「何でそう思うの。」

「何でかな。良くわからないけど、みさちゃんは地球に逃げてきたという感じ。 あのスクー

ズはそれを追ってきた。 だいたい私たちはみさちゃんを誘拐なんてしていないじゃない。」

「それはそうだけど。」

「アルドアは、ことこを騙して、 みさちゃんを連れ出そうとしていたんだよ。

「アルちゃんは、そんなスクーパーズじゃない。絶対にそんなことはないよ。」

「うーん、ことこがそこまで言うならば、そうなのかもしれない。 アルドアはいいスクー

で、偉いスクーパーズが悪いやつで、アルドアもそいつに騙されているのかも。

「そうなのかなー。」

「もう少しだから。スクーパーズを地球から追い出して。アマツマラを壊して、全てが元通り。

ことこが暗い顔をしたので、りとが続けた。

「わかった、万が一アルドアがまだ原宿に残っていたら、もう一回は警告するから。

「うん、有難う。」

まりが戻って来て、紅茶をいれながらことこに話しかける。

「何?アルドアさんはイケメンだったの?」

「そういうんじゃない。 でも、 技術担当みたいで、二人でアマツマラを解析し ていたの。」

「そうか。何だ、オタクどうし気が合ったのかな。」

「うん、そうかも。でも真面目で悪いスクー パーズじゃ なかったよ。

3人が紅茶を飲み始める。 りとがまりに話しかける。

「サンキューまり。美味しい。」

「そう、有難う。」

「少し、落ち着ついた。」

ことこもまりにお礼を言う。

「まりちゃん、有難う。美味しいよ。」

「ことこも有難う。」

3人が少しゆっくりしていると、 トリートの防衛線を突破して、 蟹爪ふりゃーがPARKに向かって来ていた。 センサーからの警報がなった。モニターを見ると、キャットス りとが、 まりとこ

とこに話しかける。

「行かなくちゃ。二人は地下室で待ってて。」

まりが言う。

くないけど。 「私も行く。 蟹爪の周りにスクーパーズがいたら私が何とかする。 ボードにはだいぶ慣れてきたし、 バリヤーも強力になってきているわ。 りとは蟹爪に集中して。」

「有難う、まり。じゃあ、 ことこ、悪いけど地下室にみさちゃんと一緒にいてくれる。」

「うん、わかった。」

「じゃあ、まり、行こう。」

「了解。

ことこが地下室に降りていき、りととまりはキャットストリートに向けて飛び出した。 りとがま

りに話しかける。

「蟹爪の他に、残っていそうなのは、速いやつとそのグループの計3体。 それと、 ビー ムが強い

やつが1体というところ。アルドアも残っているかもしれない。」

「とりあえずは、蟹爪ね。」

「うん。でも、 速いやつが来たら、 まりはPARKまで逃げた方がいいと思う。 その4体 は

RKの防衛力でなんとかなりそう。蟹爪だけはそれを突破するかもしれない。」

「大丈夫、心配しないで。何とかするから。」

「わかったけど、無理はしないで。」

「それはこっちのセリフ。」

「蟹爪が見えてきた。まり、周りを見ててくれる。」

「わかった。 その前に、ことこが戦艦用に用意した、 モードイレブン・ポジションワンを使って

みる。」

「うん、 賛成。 ことこが強力と言っているんだからすごいと思う。 私はまりの周りを見張ってい

る。」

「りとが見てくれていれば安心。」

「蟹爪がこっちに向かってきた。じゃあ、行くよ。」

 $\mathop{\rm O}_{\mathop{\rm K}_{\circ}}^{-}$ エネルギーはさっきから充填しているから、 すぐに撃てるわ。」

「じゃあ、まずはここからお願い。」

距離百メートルぐらいで、まりがリア銃を撃つ。

「モードイレブン・ポジションワン、発射。」

強力なビームが蟹爪ふりゃーを襲う。 く弾き飛ばされ、装甲であるころももボロボロになって、 それを見たまりが喜んで叫ぶ。 蟹爪ふりゃ ーは、その鋏でビー 一度普通のスクーパーズの姿に戻って ムを払おうとするが、

「やったー。」

りとが蟹爪ふりゃー目掛けて突進する。

「あともう少し。まり、時間を稼ぐから再チャージ!」

「わかったわ。」

吹き飛ばされた蟹爪ふりゃー は、 ボロボロになりながらも、 気持ちを集中してい

絶対に諦めるな。」 としても倒すんだ。 「エビふりゃー閣下 あいつらを倒せるスクーパーズはこの銀河に私以外いないんだ。 から教わった教えだ。 諦めるな。 諦めるな。絶対に諦めるな。 あ 諦めるな。

接近しているりとが蟹爪ふりゃーの異変に気付いた。

「何だろう、あいつ光ってる。また蟹爪フライになるみたいだけど、 今度はずっと大きくなって

いる気がする。\_

それでも突進して切りかかると、 りとは今までよりずうっと大きな力で弾き飛ばされた。

何?\_

りとは、不思議に思って蟹爪ふりゃを見つめる。 蟹爪ふりゃ ーが喜びながら叫ぶ。

を倒せる。」 「私も第二形態に進化した。 エビふりゃー閣下しかできなかった形態が私にも。 これで、 つら

攻撃しようとする。 んだ。 りとは大きく跳ね飛ばされたが、 爪ふりゃーは逆に俊敏になったと思えるぐらい、 蟹爪ふりゃーは十メートルぐらいの大きさになってい ったんじゃないかなと考え、鋏と反対側に回り込り切りかかろうとする。 蟹爪ふりゃーが叫ぶ。 しかし、 蟹爪ふりゃー接近する最後の瞬間に向きを変え、 今度はスラロー ムのように進みながら、 瞬間に向き変え、 た。りとは大きくなった分、動きは遅くな りとの棒を鋏ではじき返す。 蟹爪ふりゃ しかし、 りとの棒を鋏で挟 第二形態の蟹

「よし。」

りとも言葉がもれた。

「くっ、棒が挟まれた。」

ARKに残ったことこは、確かめたいこともあって、地下室に向けて降りて行った。そして、

地下室の扉の前でみさに話しかける。

「みさちゃん、 扉を開けて。りとちゃんが地下室で待っててだって。

「わかったですな。ちょっと待ってるですな。」

扉が開くと、 真剣な顔をしていることこに、みさが嬉しそうに話 しかける。

「ことこちゃん、無事ですな。 よかったですな。 怖い顔をしているけれど、 怖かったですな?」

エビふりゃーも嬉しそうだった。

「私は無事と確信していたでございます。」

しかし、ことこは違う話をする。

「やっぱり、 みさちゃんとエビふりゃーさんは、 スクーパ ーズなんだ。」

「何を言っているですな。私はアメリカ人ですな。」

「私はエビフライ星人でございます。」

ことこが答える。

「いま、 地球の言葉を使っていない の。 スクー パ ーズのテレパシー で話しかけて、 みさちゃんた

ちもテレパシーで答えているの。」

みさはハッとして黙ってしまった。エビふりゃー もかなり驚いたが、すかさずみさとことこの間

の、みさのすぐ前に移動した。ことこが続ける。

「みさちゃん、スクーパーズの王女様なんでしょう。 スクーパ ーズのみんな、 すごくちゃんとし

てて、 正義感もあるのに、 何で私たちに殺させるの。 みんな、 みさちゃんを助けようと必死に戦

っているんだよ。」

「それはですな。」

エビふりゃーが口を挟もうとする。

「それはでございますな。」

しかし、ことこが静止する。

「エビふりゃーは黙ってて。みさちゃんから聞きたいの。」

しかし、エビふりゃーは止めない。

め下さるのは大変嬉しいでございますが、みさ王女様に乱暴するならば、ことこ様と言えども容 「わたくしは、みさ王女様をお守りする立場でございます。ことこ様がスクーパ ーズの兵をおほ

赦はできないでございます。」

「少し、黙ってて。」

そう言うと光の盾が6枚現れて、 動くことができなかった。 エビふりゃ エビふりゃ ーを包んで部屋の隅に追いや ーが叫ぶ。 っった。 エビふりゃ は

「こうなったら仕方がないでございます。 第二形態へトランスフォ

しかし、何も起きなかった。

ございます。 「第二形態になれないでございます。 この光の盾から精神を攪乱するもの が放出され てい る

エビふりゃーはことこの顔を見てから少し安心した表情をした。 「エビふりゃーさん、 心配はいらない ょ。 みさちゃんを傷つたりするつもりは全然ない

をスクーパーズにしようとしているんだよね。」 ーズさんが死ぬときに情報を取り出して、その情報を処理したものを私たちに投射して、 「アマツマラを、 スクーパーズのアルドアさんと解析したの。 その結果から考えると、 ス

「それはですな。それはですな。」

というのが許せないの。みさちゃん、 「私はい いの。 例えスクーパーズになっても。でも、 みんなはみさちゃんの国民なんだよ。」 そのためにたくさんのスクー パ ーズを殺す

「父上の命令なんですな。」

「お父さん?スクーパーズの王様?」

「そうですな。」

「王様は何でそんな命令を出すの。」

性のある生物をスクーパーズにして、スクーパーズ本星で暮らしてもらい、そのその才能を発揮 返してきたんですな。新しいものを生み出せなくなったスクーパーズは、天の川の銀河から創浩 なったスクーパーズの宿命ということですな。 してもらうですな。そのためのサポートは何でもするですな。 「それはですな。この数百年、 スクーパー ズの王室は国民に秘密で代々とこのようなことを繰り それが新しいものを生み出せなく

星に行ったよ。」 「ひどい。みんな命があるのに。それに私たちだったら、そう言ってくれれば、 スクーパ ーズ本

は、なかなか上手く行かなかったらしいんですな。 と死んじゃうんですな。」 ても過酷な環境になるですな。 「ことこちゃんの言うこともわかるですな。でも、 スクーパーズならば大丈夫でも、 それに、 スクーパーズ星に他の星の人が住むとい 往復の宇宙船 宇宙にあまり出ていない生物だ は放射線などでと うの

お願い。このままだと、 「みさちゃんの立場が難しいことはわかった。 アルドアさんが死んじゃうかもしれない。」 けど、 もうその話しはい 61 から、 戦いを止めて、

このことを普通の兵に話すことは厳禁なんですな。 「みさも止めたいんですな。捕虜になったパドが目の前に死ぬのを見て怖かったですな。 知っているのは、 王族の近衛兵の一部だけな

「そんなの無視して、 スクー パーズのみんなに正直に話しちゃえばいいんだよ。」

「でもですな、 そんなことをしてスクーパーズ王室が倒れたら、この天の川銀河が大混乱になっ

てしまうんですな。みさにも、どうしていいかわからないですな。」

「わかったよ。私が止めてくる。アルドアさんたちを助けなくちゃ。」

そう言ってことこは地下室を出て行った。光の盾は消えて、自由になったエビふりゃー みさはことこの言ったことを思い返していたので、短く答えた。 「この光の盾はなんだったんでございましょう。 全く動けなくなってしまったでございます。」 -が言う。

「うんですな。」

創性の高さかも知れないでございます。」 「アマツマラからあんなエネルギーの盾が出せるのでございましょうか。 あれも、ことこさま独

「うんですな。」

しかったでございます。」 「ことこ様が、スクーパーズ兵をちゃんとしてて、正義感があると言って下さったのは本当に嬉

「うんですな。」

ましょう。」 「スクーパーズ兵や人間の善意を利用して、命まで奪って、本当に悪いのは私たちなのでござい

「うんですな。」

から着地し衝撃を和らげた。そして、その反動で十メートルもあろうかという蟹爪ふりゃを、 「重い。けど。」 蟹爪ふりゃーに地面に背中から叩きつけられそうになったりとは、地面につく直前、 地面に足

蟹爪ふりゃーもりとを叩きつけようとするが、逆に投げ返されるので、 という声と共に、頭の方に投げ飛ばす。蟹爪ふりゃーは投げ飛ばされても棒を離さずに、すぐに のとき、まりから連絡がはいる。 体勢を立て直す。りとはルナ銃で攻撃するが、フライの衣の装甲が厚くあまり有効ではなかった。 決定打に欠けていた。そ

「チャージ終了。りと離れて、蟹爪を撃つから。」

「棒を鋏に挟まれて離れられない。 そのまま撃って、こいつを押さえておくから。

「でも。」

「大丈夫。」

「わかった。」

まりはボードでりとの方に向かい、 りとの隣に並んで、盾としてボードを前に立てた。

りと。」

ーまり。」

りとも足を使って自分のボードを盾にすると、 ふたりはうなずいた。

「モードイレブン、ポジションワン。発射。」

明るい光があたりを満たした。リア銃のビームが至近距離で蟹爪ふりゃ に当たった。

挟まれた。 ぐに蟹爪の鋏の部分で建物を蹴って跳ねて飛んできた。りとは避けたが、まりがボードごと鋏に は、その衝撃でりとの棒を離して、 3 0 メ トルほど吹っ飛び建物に衝突した。 しかし、 す

「よくも私の部下たちを皆殺しに。 お前から真っ二つにしてやる。」

ボードがつっかえて、 もうそんなにはもたなそうだった。 まりがなんとか切られずにすんでいたが、 まりが叫ぶ。 ボードからミシミシ音がして、

りと!!

「待ってて、まり!」

りゃーも渾身の力を込めていた。 りとは鋏に棒と足をかけて必死に棒でこじ開けようとしたが、開くことはできなかった。 鋏がだんだんと閉じようとしていた。

痛い。りと!」

まりの目から涙がこぼれていた。 の間に差し込んだ。そして、蟹爪ふりゃーの方を見ると、さっきのリア銃の攻撃で、 一部分がぼろぼろになっていた。 りとも必死だった。 りとは時間稼ぎのために自分のボードを鋏 衣の装甲の

「狙うならあそこ。」

少し下がった。 それも気が付かれないように最速で、か になった。蟹爪ふりゃーもそれに気が付いたようで、 の後ろに取り付けた。 まりがりとの方を祈るような目で見ていた。 そして、 前に2歩ダッシュしてから前方少し上にジャンプして、 つ最強の力で攻撃する必要があった。りとはその場から、 りとの方を見ていた。 りとは、 ルナ銃のタンクの部分を棒 エビぞり

「ルナボルグ!」

棒が戻ってきたので、 のショックで、 けて投げた。蟹爪ふりゃーは避けようとしたが、動く間もなく棒は蟹爪ふりゃーを貫通した。そ ルナ銃が後方に強力なエネルギーを発すると共に、 ・で叫ぶ。 蟹爪の鋏が開いた。着地したりとは急いでまりを抱きかかえて後ろに下がった。 それを片手で受け止めた。 蟹爪ふりゃーは、 りとは持っていた棒を蟹爪ふりゃーに 道でうずくまって、

「エビふりゃー様、 エビふりゃー様。 エビふりゃー様、私はあいつらにどうすれば勝てるので お願いです。」 教えてくだ

そして、蟹爪ふりゃ しは、 りとを見つけると大けがにもかかわらず向かって行った。

「お前だけは。お前だけは。」

それを見たりともまりを左手で抱えながら、右手で棒を持って構える。

「よくも、まりを。次はお前の急所を貫く!」

きでそれを避け、 ふりゃーは鋏で攻撃しようと棒 の姿が、 少し前に進みながらすれ違いざま、 普通のスクーパ ーズに戻った。 人間に突撃していった。 そして最期に、 傷口から急所の方向へ棒を差し込んだ。 りとは、

「エビふりゃー様。」

とだけテレパシーを放って動かなくなった。そして消滅してしまった。

蟹爪ふりゃーの消滅を確認したりとはまりの方をみた。まりの体から血が流れていた。

顔が青くなった。

一まり 血カ」

「大丈夫、蟹の鋏のとがったところが刺さっただけ、 怪我はそんなに深くないの。」

でも。」

「大丈夫。それに私よりりとの方が顔が青いわよ。」

「私は全然平気。私より、まり。」

「大きな傷跡ができると、お嫁に行けなくなっちゃうかな。まあ、元から行けそうもない · けど。 」

「そんな冗談を言っている場合じゃない。PARKに戻るわよ。」

「そうだ。りとが責任を取って、りとにもらってもらおうかな。」

「分かった。もらう、もらうから、今はPARKに急ごう。」

りとはまりをボードに乗せ、まりのリア銃を持ってPARKに急いだ。

まで届いていた。 PARKからそう離れていなかったため、 蟹爪ふりゃー の最期のテレ パ シー はエビふり

「なんていうことでございましょう。蟹爪ふりゃーまでも。

みさが覚悟を決めたように言う。

「とりあえず、まりちゃんの手当をするですな。」

「私はあまり気が乗りませんでございます。第7連隊の隊員や蟹爪ふりゃーを殺した人間でご

ざいます。」

がないことですな。それがみんなのためと気づいたですな。 ゃんの手当が終わったら、 「りとちゃんやまりちゃんは何も悪くないですな。 戦いを止めるですな。たとえ秘密がばれても、 悪いのはスクーパーズの王室ですな。まりち エビふりゃーは隠れていれば良いで 私がどうなっても仕方

けは何としても避けなくてはいけませんでございます。それを避けるために、どうぞ全てこのエ ヤーズの思うがままにされてしまいます。 して王室が倒れると、この銀河の柱がなくなってしまうでございます。そうなると、デストロイ かしい限りでございます。この命、 います。みさ様にお仕えして幸せでございます。 「みさ様!みさ様、まだお若いのに立派なお覚悟でございます。エビふりゃー、 一人が悪いことにして頂きたく思うでございます。」 みさ様に捧げるでございます。ですが、うかつに秘密を公開 それはもっとひどい悲劇を生むでございます。それだ それに比べ、エビふりゃーの心の小ささ、恥ず 感服したでござ

な。」 「その話は後でいいですな。とりえあず、まりちゃんの手当が先ですな。 PARKに上がるです

「はいでございます。」

いた。ことこが変身をしなかった理由は、スクーパーズに敵意がないことを示すためである。 「りとちゃんとまりちゃんがPARKに戻っていく。まりちゃん怪我をしているのかな。どうし りとがまりかかえながらPARKに向かう下の道を、ことこがラフォーレに向かって走って

ことこもPARKに戻るべきか考えた。 「まりちゃん、痛そうだけれどりとちゃんと話しているようだし、今は戦いを止めるのを先にし しかし、 今はそのまま行くべきと決心した。

けながら、上の階に上がっていった。 ただ、アルドアは逃げていないような気がした。それで、ラフォーレの中をテレパシーで呼びか ことこがラフォーレ前の明治通りに着いたが、スクーパーズの姿は見えなかった。 「どうしたんだろう。 みんなどこにいるのかな。 逃げちゃったならいいんだけど。」

だった。 いた。中には分析装置が稼働した状態で放置されていた。アマツマラと別のものを分析したよう しかし、返事はなかった。6階のことこが連れていかれた部屋に到達した。ドアは壊れて開いて 「アルちゃん!アルドアさん。どこ。ことこだよ。一人で来たよ。 お願い返事をして。」

そうつぶやいて、ことこはラフォーレの屋上に上がっていった。「アルちゃん・・・ 上から探してみよう。」

中にいた。 収容者たちはデストロイビームが発せられないように特別な手枷が付けられていた。さらに、そ 施設の中で、デストロイヤーズの捕虜ガリラドと市民ジャルベルトの二人のが自分たちのこと れは勝手な行動をすると爆発すると脅されていた。二人は男性ばかりが100名ほどいる牢の に関して雑談をしていた。その施設には、デストロイヤーズの捕虜や一般市民が収容されていた。 りとたちがスクーパ ーズと戦っているころ、 局所銀河群のある銀河に属する惑星の地下収容

スクープビームで捕らわれ、ここに連れてこられた。家族とは離ればなれだし、 「私なんかは一般市民なのに、急にスクーパーズがやってきて、 「もう、ここに連れてこられて2年にもなるが、 捕虜交換の交渉は進んでいるんだろうか。」 前線基地を建設するとのことで 条約違反も甚だ

の収容施設には他にも牢があったけれど、 「そうか、ジャルベルトは軍人ではなかったな。 仲間がだいぶ減ってきているようだ。」 それにしても、 外の様子が全くわからない。

「時々は、新しい同胞も入ってきているようだが。」

「人数は少ないし、どこかの収容所からまわされてきているようだ。

「しかし、ここからいなくなってしまった同胞はどうなったんだろう。」

んて、とっとと叩き潰すべきだったんだ。我々はアンドロメダ星雲に帰れないかもしれない。」 に近いのもいるけれど、 「それにしても、看守の中にスクーパーズ兵以外のいろんな外見の兵がいる。中には外見が我々 「やつらが、局所銀河団条約を守るか心配だ。やはり、前皇帝が甘すぎたのだ。 言葉は違うし、 なんかいろいろと違う。」 スクーパ

ろんな、 ゼラン星雲を支配している知的生命体の形に近いものもいるけれど、そればかりじゃないし。 ズとも我々とも全く形の違うものもいる。ここはどこなんだろう。 「あー、形は近いけれど、色とりどりだ。 生命体が集まっている感じだ。」 赤いもの、 緑のもの、青いもの。 中には、 昔図鑑で見た、大マ それに、スクーパ

「そうだな。それにしても腹が減ったな。」

「なんだ、急に、話しの腰を折るなよ。」

「ごめんごめん。」

「まあ、もうそろそろ飯の時間だな。」

「あー、あんまり美味くはないがな。だが、飯だけが楽しみだ。」

「そうだな。まあ、野戦食よりはまともかな。」

「そうなのか。ここの飯よりひどいって。」

そのとき、看守がやってきた。

おっ、飯の時間かな。」

しかし、看守は別のことを言う。

「風呂の時間だ。ドアの前に2列縦隊で集合。」

デストロイヤーズたちは少し不審に思って話し出す。

「何だ、シャワーはこれまでにもあったが風呂は初めてだな。」

「何かあるのか。」

看守はそれを無視して強い調子で言う。

「つべこべ言うな。さっさと来い。」

デストロイヤーズたちは、2 列縦隊になって指示された道を進んでいった。 看守はいつもより多

く、全員武器を携帯していた。

「なんだ。やたら警備が厳重だな。」

「ああ、なんかいやな予感がする。」

全員脱衣所で服を脱ぐと風呂場の方に誘導された。風呂場は単なる広い部屋で下側は防水処理

になっていた。入って来た扉が閉められた。

「ここにお湯が入るのか。」

「大丈夫か。ここで俺たちを溺れさせるつもりか。」

「俺たちを殺すためだけに、こんな設備まで作って、そんな面倒なことをするか。」

右側の側面はカーテンで仕切られていた。すると、 个安な気持ちで辺りを見回すと、 側面のうち3面が壁で上の方に窓があり看守が見張っていた。 カーテンの向こう側でデストロイヤーズの女

性たちの話し声が聞こえた。

「カーテンの向こうは、女だ。」

「そうだな。カーテンの下は動きそうか。」

「おいおい、覗く気か。」

「こんな時だからいいじゃないか。」

「それもそうだな。」

風呂場の上の操作室でオペレーターたちが、データを見ながら話していた。

「今回のブレンドはこんなものか。」

「パワー的にもスピード的にも、少し面白くないブレンドだな。」

「仕方がない、所詮一般人と一般兵だ、本当はアムロディー並みのデストロ イヤ ズが欲しいと

ころだ。」

「何を言っている。そんなのが来たら逆にこっちが危ないだろう。」

「それもそうだな。」

「よし、作業開始だ。調合した情報抽出液を注入するぞ。」

「了解。」

オペレーターがスイッチを操作すると温かい液体が部屋に入り始めた。部屋では、 デスト 口

ーズたちが次第に高くなるお湯に関して話していた。

「お湯が入ってきた。なんか少し匂うな。」

「伝染病予防の薬品みたいな匂いだけれど。」

一消毒剤か?」

お湯は高くなり腰の高さになって止まった。看守から指示があったため、 デスト 口 ズは座

って、そのお湯につかっていた。

「温かくて気持ちがいいが。」

しかし、 お湯の水位が高くなってきた気がしたため、 全員立ち上がった。

「やつら、やっぱり、我々を溺れさすつもりだ。」

誰かが看守に向かって叫ぶ。

「お湯を止めろ!」

しかし、 お湯は出ていないようだった。そのとき、 ジ ヤ ル ベル トが部屋にいるデストロイヤーズ

の間隔が広がっていることに気付いた。

「違う!水位は変わっていない。俺たちが小さくなっているんだ。 くそー、 何をするつもりだ。

看守を睨みつけたが、 看守は平然として見ていた。 そのとき、 カーテンの奥から声がした。

「ジャルベルト!あなたなの!カデリナよ!」

「カデリナ!」

そう言って、ジャルベルトはお湯の中を潜り、カーテンの下をくぐって反対側に出た。 目 の前に

は、娘のユリアナを抱きかかえていた妻のカデリナがいた。

「カデリナ!、ユリアナ!」

「パパ!」

3人は顔を寄せ合って強く抱きしめあった。 まわりの女性のスクーパーズは、 嬉しそうに見てい しかし、そんな幸せも長くは続かなかった。体が小さくなって、カデリナも足がつかなくな

っていった。 ジャベルトとカデリナはユリアナだけでも助ける方法がないか必死に考えたが見

つかるはずもなかった。溺れて3人がバラバラになるの は、 3人ともいやだった。 ジャ べ

部屋の隅に急ぎ、周りのデストロイヤーズに言った。

「我々から、離れてくれ!」

そして、カデリナとユリアナに言った。

「これで、3人はずうっと一緒だよ。」

ジャベルトとカデリナはそれぞれの少し大きくなった手枷を思いっきり壁に打ちつけた。

と、手枷が爆発して、ジャベルト、カデリナ、ユリアナは離ればなれになることなく命を断った。

操作室では、オペレーターたちが対応に追われていた。

「手枷が爆発しました。2個です。」

「3人のデスト -ロイヤ ズが死亡したようです。 情報不純物が抽出液に混入します。」

「どうだ。これくらいならばいけるか。」

「はい、なんとかなります。」

「よし、操作を続けてくれ。」

捕まっていたデストロイヤーズたちは抽出液の中に消え、 床に手枷だけが残された。

「抽出液は濃縮行程に回せ。その後に結晶化だ。」

続けており、 2週間後、この抽出液は黒い小さな結晶に変わっていた。 中にだれも気づかないほどの小さなシミが結晶構造の中に入っていた。 1日に1個の結晶を生産している。 ただ、 このときの結晶は普通の結晶と異なり、 この施設では、 このような作業を毎日

箇所の修復を急いでいた。艦長のダウザは艦橋で艦全体の指揮を取っていた。 インが切断されたとの報告が入った。 スクーパーズの戦艦は、 明治神宮上空で待機すると共に、艦首主砲の跳ね返った弾による損傷 すると、 パイプラ

「どうしたんだ。」

そばにも誰もいないようです。」 「わかりません。 囲いの内部で何かあったようですが、現在連絡がつきません。 井 € 1 の穴のすぐ

「情報収集を急げ。修理を中止して第2級戦闘態勢を取れ。

「わかりました。」

しばらくして、 情報将校が艦橋に上がって来て、ダウザに報告した。

指揮官兵員が全滅したとのことです。第11連隊は文字通り1体残らず消滅し、 上壊滅したとのことです。現在、中に残っているのは、 「ガーチューン連隊長からの報告です。第7連隊は敵の攻撃で壊滅、第11連隊も連隊長以下が 連隊長と、 第8連隊のガーチューン連隊長と数体のみとのことです。」 第7連隊の唯一の生き残りの蟹爪ふりゃ 第8連隊も事実

「第7連隊が壊滅だと。そんなに酷い状況なのか。」

指揮して、最後の救出作戦を立案中とのことです。」 りゃー連隊長以外の全ての隊員が戦死したとのことです。 「一般隊員では、 全く相手にならないとのことです。第7連隊が攻撃から1分経たずに、 現在、 ガーチュー ン 連隊長が決死隊を

「そうか。こちらで対応できる状況を越えているな。 本星の大本営に指示を仰げ。」

はい、わかりました。」

艦橋に蟹爪ふりゃー戦死の報が入った

「蟹爪ふりゃー様もか。第7連隊が全滅したとなると、デストロイヤーズとの戦いの戦法を考え

直さなくてはならないな。」

そして、本星から返答があった。

「大本営は何と言ってきた。」

「現在、増援の手配をしているから待機していろとのことです。」

「今、増援の手配か。とても間に合わんな。」

マーが原宿駅側の穴から入りそうということで準備中です。」 「だだ、大本営でも第7連隊の壊滅は予想外だったようです。 小型の装甲戦闘機フライングアー

「そうか。ただ、 戦艦の装甲に穴を開けるぐらいだ。フライングアーマ ーの装甲では持たんだろ

「はい。最新鋭のビーム攪乱幕も大量に持って来るようですが。」

「ビームは攪乱するが、視界はそれほど妨げないやつか。」

「はい、そうです。」

「わかった。それで、丸野王は何とおっしゃられているか情報はあるか。」

です。」 「大本営でもスクーパーズ王の意向を伺ったところ、 慌てず対応しろとの指示だったとのこと

来るかわからん。」 日も旋回主砲の砲手を失ったばかりだ。ただ、囲いの穴の警戒は怠るな。 から出てきた兵の救護と艦隊の修復に専念する。 「王女様が人質に取られているのに、さすがは、 原宿には入るな。我々では相手にならない。昨 丸野王でいらっしゃる。わかった、我々は原宿 いつ棒人間たちが出て

りととまりがPARKに到着した。そこには、 みさが待っていた。 りとはみさに注意した。

「わかりました。」

「みさちゃん、地下室で待ってなきゃだめだよ。」

「急いで、まりちゃんの手当をするですな。」

怪我のための消毒薬や包帯が準備してあったの見たりとがみさに謝る。

「まりが怪我をしたのを見たから、上がって来たのね。 大きな声を出してごめん。」

「それはいいですな。 それより手当が終わったら、 話しがあるですな。」

「重要そうなことね。いいよ、なんでも聞くよ。」

「ありがとうですな。 圧迫止血をするですな。 みさじゃ力が足りないので手伝って欲しい

な。

「もちろん。」

「一緒に、引っ張って欲しいですな。 力を入れすぎてもだめですな。」

「わかった。ゆっくり引っ張るから止めて。」

「少しづつ引っ張ってですな。」

「ゆっくりと。」

そう言いながら、りとは少し引っ張ったが、みさはすぐに止めた。

「ストップですな。」

まりの出血は止まったようだった。

「大丈夫ですな。今のりとちゃんが思いっきり引っ張たら、 まりちゃんが切れちゃうですな。」

「本当ですな。 それより、 念のためまりちゃんを地下室に運ぶですな。

「わかった。 よいしょっと。それにしても、 まり軽い。」

「今のりとちゃんに力があるだけですな。」

「そうか。みさちゃんの言う通りかもしれない。」

そう言いながら、2人と1尾は地下室に向かった。地下室に到着すると、まりをソファー の上に

寝かせた。ここで、りとが重要なことに気付いた。

「ことこがいない。 上にも下にも。 みさちゃん、 どこに行ったか知ってる?」

「戦いを止めると言って出て行ったですな。」

「何でことこを止めて・・・止めても止まらないか。ごめん、 ことこを探してくる。 扉を閉め

待ってて。」

話を聞い てほしいですな。」

「ごめん、ことこを連れ戻したら、絶対に聞くから。」

「りとちゃん。」

りとはみさが止めるのを振り切って、外へ飛び出した。 ・レに向かうことにした。周りの様子を見るために、上昇するとラフォー りとは、 ことこが一番行きそうなラフォ の屋上にことこが普

通の姿で周りを見ているのが見えた。

「ことこ、良かった無事で。」

ラフォーレ屋上に急行した。

謀と第111分隊のガジメ分隊長、ゼクール軍曹、ゴモ(上等兵)、ザトム(一等兵) っていた。しかし、原宿で生き残ったスクーパーズ兵は、ガーチューン連隊長、アルドア技術参 生き残った第111分隊を中心とする決死隊のスクーパーズ兵が、 竹下通りの明治側に集ま バンクス

(1等兵) ワクチュン(1等兵) の8体だけだった。ガーチューンが皆に話す。

私を含め8体だけになった。王女様を救出するため、みんな私につい

てき

てくれるか。」

「残っているものは、

ガジメが答える。

「もちろんです。 連隊長にお供します。 この命、 ご自由にお使いください。

ゼクール、ゴモ、ザトム、バンクスも同意する。

絶対に棒人間を倒して、 王女様を救出して見せます。」

「頑張ります。」

「私は前にもこのような目にあっています。 絶対に王女様を助けて生き延びます。」

「最初に、棒人間に蹴られて、デツホを失う結果になった汚名を晴らして見せますとも。

ガーチューンがガジメに話しかける。

「それにしても、 健在なのはラフォ ーレにいたアルドア以外は第111分隊だけになったな。 さ

すが、ガジメの分隊だ。」

「連隊長の教育のたまものです。」

「いや、ガジメのすぐれたスクーパーズ性がなしたことだ。 誇りに思って 61 いぞ。

ガジメと第111分隊の全員が答える。

「有難うございます。」

ガーチューンがアルドアに話しかける。

「それで、あの結晶は使えるようになったか。」

分析装置で調べたのですが、解析ができないため仕組みが良くわからず、ロックを解除すること 「はい、大丈夫です。地球では開かないような特殊なロックが施されていました。初めこちらの

ができませんでした。」

「そうか、それでどうしたんだ。」

ら、構造と内部プログラムを解析することができ、比較的に簡単に鍵を開けることができまし 「はい、昨晩ことこさんがアマツマラを分析するために制作した分析装置にかけて調べました

「そうか、それは良かった。見たところ、ことこさんは民間人と言うわけではない が、

闘員というわけではなさそうだった。」

「その通りです。 自衛以外でこちらを攻撃してくることはないと思います。」

「わかった。今回、棒人間と射撃手は降伏の意を示すまで攻撃するが、ことこさんは相手が

してこない限り、 こちらから攻撃はしないことにする。全員いいな。」

「連隊長、有難うございます。それでロックを解除して開けた中がこれです。」

だ。そこには黒い結晶が4つ入っていた。ガーチューンが尋ねた。 アルドアはロックを解除した蓋を開いた。そして、箱の中をみんなに見せた。全員が、 息を飲ん

「これをスクープビームで取り込めば良いのか。」

は、反射神経や移動速度が向上し、デストロイビームが撃つことができて、デストロイヤー 「はい、そういうことです。それでデストロイヤーズの力がプラスされるようになる。 ズの

バリヤーが展開できるとのことです。」

「そうか、それは嬉しいな。」

ますが、射撃主の強力な一撃と棒人間の棒には対応できないと思います。なんで棒で切れるのか 不思議に思っていたのですが、 「これで、射撃主の強力な散弾や、 あの周りにはサイコブレ 棒人間の射撃にも数発程度ならば耐えることができると思い ードが展開されているようです。

結果からすると、防ぐことは無理だと思います。 極めて強力で、 我々のバリヤー にデストロイヤー ズのバリヤ ーを加えても、 ショ ンの

を終了する必要があります。 る時間は1時間、 「はい、ただ向こうも能力を隠している可能性もあります。 「わかった注意する。それでも、 その後は副作用でスクーパーズの力も弱くなります。 散弾や棒人間の銃にある程度対応できれば、 また、デストロイヤーズの力が使え 絶対に1時間以内で作戦 攻撃が楽になる。

「そうか。説明ありがとう。それでは作戦を伝える。」

ガーチューンが隊員を見渡し、作戦を伝える。

蟹爪ふりゃー様のセンサー 間を抑える。 こない場合、 は出てこないとも考えられる。蟹爪ふりゃー様が命をかけて作られたチャンスだ。射撃手が出て 「デストロイヤーズの結晶を使うのは、ガジメ、ゼクール、 ゼクー ゴモはゼクー ルは王女様の救出に専念しろ。 ルを補佐に集中してくれ。」 からのデータによれば、射撃手は負傷している可能性が高く、 ゴモは射撃手への対応とゼクー ゴモと私とする。 ガジメと私が棒人 の補佐だ。

**セクールが意見を言う。** 

「連隊長!棒人間の対応には私が入ったほうが良いと思います。」

ガジメが反対する。

「ゼクール、お前が一番王女様を助けたいんだろう。」

「もちろんそうです。 そうですが、王女様を助ける確率を上げるためです。」

「連隊長と私では、棒人間を抑えられないと言うのか。」

まだ実力を出し切っていないように思えます。」 「残念ながら、 そうです。 現状でも対応が難しいのに、アルドア少佐が言われるように棒人間は

ガーチューンがそんなことは分かっているというふうに話し出す。

疲労させることもできる。その後でゼクールが相手をした方が良い。 エビふりゃー いる感じだ。本当に厄介な存在だ。本心を話そう。 「ゼクールが言うこともわかる。 それでも、 様と協力して王女様を救出する。 そんなに簡単にやられはしない。 実力を出し切っていないというより、 それが今回の作戦だ。」 ガジメと私では抑えきれない可能性は考えて 時間を稼ぐとことはできる。 その間に、 どんどん実力が上が また、 ゴモができれば って

「連隊長!」

ガジメがゼクールをなだめる。

てくれれば、 「なに、勝負は時の運。 我々もビーム攪乱幕のタンクを撃ってとっとと逃げ出すさ。 我々が負けるとは限らんよ。 それにゼクー ルたちが王女様を早く救出

ゼクールが、ガーチューンとガジメを見た後に決意を込めて言う。

「分隊長!分かりました。少しでも早く王女様を救出することに全力を尽くします。」

ガーチューンとガジメが答える。

「そうだ。それでいい。」

「頼んだぞ。」

「はい。」

ガーチューンが作戦の説明を続ける。

聴くことはできる。」 じめ、全員が携帯型通信装置を持って行ってくれ。戦闘中にこちらから送信することは難しいが、 建物に隠れて、 ために、自分は隠れて遠隔で操作すること。その他の第111分隊の隊員は観測をお願いする。 「作戦の説明に戻る。 棒人間や射撃手の位置や状況を逐次報告してくれ。 アルドアはここで、ビーム砲で支援射撃をしてくれ。ただ、危険を避ける 今回はガジメ、 ゼクールをは

ガーチューンが地図を見せながら続ける。

くとも、 の判断で動いても良い。しかし、 「各隊員の最初の配置は、この地図を見てくれ。 我々と戦闘中ならば追ってくることはないだろう。 観測員は原則として戦闘はするな。 戦闘中だから、相手や全体の状況に応じて各自 見つかったら逃げろ。

ワクチュンが質問をする。

「戦闘中でなかったら。」

「それは我々が負けたということだ。そのときは撤退して構わない。 お前らがどうこうできる相

手ではない。」

ワクチュンが反対意見を言う。

棒人間が倒れるか大けがをしている場合、我々が王女様の救出を行いたいと思います。 けならば、我々だけでも注意しながら連携すれば、 「棒人間がほぼ無傷で残っていましたら、連隊長がおっしゃる通り撤退することにします。ただ、 何とかなるように思います。」 射撃手だ

ガーチューンが少し考えて言う。

「その通りだな。分かった。相手が射撃手だけになった場合は頼む。」

「ありがとうございます。ザトム、バンクスいいな。」

「はい、その時は覚悟を決めます。」

「棒人間がいても私は行きますよ。」

ガーチューンが、この発言を聞いて、ガジメに話かける。

「ガジメ、お前の部隊の隊員はみんな立派だな。」

「有難うございます。みんな立派なスクーパーズ兵です。」

「分かっています。頑張りましょう。私が近くでひきつけますから、 「そうだな。 我々も、 なんとしても、刺し違えてでも、棒人間だけは倒さないと。」 連隊長は少し後ろから、

力なビームをぶちかまして下さい。」

攻撃を仕掛けてくる。近づき過ぎるなよ。ゼクールたちに近づけさせないことが我々の役割だ。」 「私が前に出たいところだが、ガジメの言う通りだな。そうしよう。ただ棒人間は予想もしない

「分かっております。連隊長。」

クープビームで吸引するぞ。 「そうだな。長い付き合いだからな。作戦を開始する。ガジメ、ゼクール、 副作用があるかもしれないとのことだ。 アルドア、 ゴモ、この結晶をス 全員の体調をモ

ニターしておいてくれ。」

「了解です。」

「ガジメ、ゼクー ル、 ゴモは結晶を取り出して、 各自の前に置いてくれ。」

「わかりました。」

3体は結晶を取り出して、各自の前に置く。 ゴモが結晶を見ながらつぶやく。

「それにしても、気味の悪い黒色だな。」

ゼクールはそのパワーを早く使いたいと思っていた。 アルドアが連隊長に報告する。

「生体データの観測の準備完了。」

「ありがとう。では、結晶を吸収するぞ。」

ゼクールは直ちに吸収を開始した。ガジメは一瞬ためらったがすぐに吸収を開始した。 ゴモは2

体が吸収を開始するのを見て吸収を開始した。 その間にガーチューンがアルドアに尋ねた。

「それで、頼んであったものはできたかな。」

「はい、これでありますが。このスイッチを入れるとセンサーが起動します。あとは自動で・・・\_

「わかった。何も言わなくていい。このスイッチだな。有難う。」

「連隊長・・・。」

ガーチューンはそれを吸引すると、続けて黒い結晶を吸引した。吸引が終わると、 4体の色が黒

く変わっていった。ゴモがゼクールに言う。

「ゼクール軍曹、体が黒くなっています。」

「お前もだよ。ゴモ。 それに、 連隊長閣下も分隊長も黒くなっている。」

ゴモが見回した。

「本当にゼクール軍曹の言う通りですね。 あははは。 面白いですが、うー Ą あまり綺麗とは言

えないですね。」

ガーチューンがアルドアに向かって尋ねる。

「これが副作用か。それで我々の体調は大大丈夫か。」

「はい、色が変わるのは副作用の一つです。 体の機能には異常はありません。 肝臓 (スクー

ズにも肝臓に相当する内臓が存在する。)に通常の10倍ほど負荷がかかっていますが、 4体と

も十分耐えることができると思います。」

「そうか、これで思い残すことなく行ける。」

ガジメがガーチューンを諫める。

「連隊長。思い残すことなく、のようなことは言わないで下さい。」

「すまんな。 連隊の隊員を8割以上失ってしまった後悔の念があるのかもしれない。 ガジメの言

「分かりました。」

3体が効果の試験のために、飛び立った。ゼクル ールが全速でジグザグに動いて、興奮して言う。

「速いです。さっきよりずうっと速い。加速も方向転換も断然いい。これなら棒人間にも対抗で

きます。」

ガジメが喜びながら言う。

「ゼクルールの言う通りだ。ビームを撃ってみるぞ。発射。」

スクープビームにデストロイビームがプラスされたビームが発射された。

「すごい威力だ。こんなビー ムは見たことない。これが使えれば、デストロイヤ ズとの戦い

もっと容易にできたのに。」

やはりビームを撃ったガーチューンが言う。

「本当にビームがすごい威力になっている。」

アルドアが確認する。

「ビームが2種類混ざっていますが、 観測の結果、 3倍以上の破壊力になっています。

「そうかそれはすごいな。」

「ただ、現在のビームは破壊にしか使えません。」

「今はそれでいい。 しかし、 この結晶が普通の戦闘に使えない のは、 副作用があるということだ

ろうか。」

アルドアが補足する。

「それだけでなく、この結晶を製作することが非常に難しいという話は聞いたことがあります。

ガジメが納得する。

「そうだろうな。それだけの力はある。ゴモ、どうだ。」

「はい、俊敏に動けるようになっています。 棒人間はともかく、 射撃手の方は1 体でも対応でき

ると思います。」

「そうか、それは良かった。」

そのとき、ゼクールが叫んだ。

「棒人間!ラフォーレ上空。」

全員がラフォーレ上空を見上げる。 ガーチューンが命令を発する。

「事前配置ができなかったが、 作戦開始だ。 ゼクールとゴモは王女様の捜索、 アルドアはビー

砲の操作、ガジメは私の補佐、 他の第11 1分隊隊員は各自所定の場所に向かい観測結果を報告

してくれ。」

「わかりました。」

「それじゃあ、ガジメ行くぞ。」

「わかりました。ぶちかましてましょう、連隊長!」

「分かった、強力なやつを食らわしてやる。だた、繰り返すが棒人間には近づきすぎるなよ。」

「はい。 今度は本当に連隊長と共同行動になりそうですね。 胸が踊ります。」

「ああ、おれもそうだが、油断はするなよ。」

「了解です。」

隊員が散って観測場所に向かった。ガーチュー ンとガジメは、りとの方に向かって行った。

ールはやはり連隊長と分隊長が心配だった。

「大丈夫かな。隊長たち。」

ただ、 命令通り王女様の救出のために、 ゴモとPARKに向かった。

PARKでは、まりがみさに傷の手当のお礼を言っていた。

「みさちゃんのおかげで、だいぶ楽になったわ。まだ、ちょっと痛いけれど、 血も止まったみた

v たし \_

「それは良かったですな。 まりちゃんは、ここで休んでいると良いですな。」

「まりちゃんはって、みさちゃんはどうするの。」

「ことこちゃんを探してくるのと、戦いを止めに行ってくるですな。

「外に出るなんて、だめ。危ないわ。りとにも怒られる。」

「大丈夫ですな。 詳しいことは後で話すですな。けれども、 みさは本当はスクーパーズなんです

な。

「みさちゃん、何を言っているの。」

みさが一度スクーパーズの姿になって、また、みさの姿に戻った。 まりが驚いてみさを見る。

「みさちゃん。」

「騙していて、ごめんなさいですな。理由は後で話すですな。その後どうするかは、

たちが決めていいですな。」

「うん。」

「戦いを止めてくるですな。みさとエビふりゃーが出て行ったら鍵をかけて休んでるんですな。」

「でも、やっぱり危ない。」

「大丈夫ですな。エビふりゃー、行くですな。」

「わかりましたでございます。」

そう言い残して、みさとエビふりゃーが地下室を出て行った。 みさの後姿にまりが声をかけた。

「みさちゃん。」

エビふりゃーがみさに話しかける。

「それでどこに行くでございますか。」

「とりあえず、ラフォーレに行ってみるですな。」

「それならば、 走るより擬態を解除して飛んで行った方が速いと思うのでございます。

「それだと、万が一りとちゃんとすれ違ったときに危ないですな。」

どうかわからないでございます。」 「その通りでございますね。りと様がみさ様と分からないと、エビふりゃーでも姫様を守れるか

エビふりゃーが防ぐことは難しいですな。」 パーズのみさを見つけると、ビームや投げた棒で気づかないうちに死んでしまうですな。それを、 「その通りですな。りとちゃんがエビふりゃーを先に見つければ大丈夫ですな。でも先にスクー

「容赦ないお言葉ですが、おっしゃる通りでございます。それでは走ってラフォ

ざいます。」

「でも、この体だと走るのは大変ですな。」

みさが息を切らしながら、ラフォーレに向かって走って行った。

ラフォーレ屋上では、到着したりととことこが話をしていた。

「ことこ、変身もしないで危ないよ。」

「大丈夫。こちらから攻撃しなければ、攻撃しないよ。 それより聞いて。みさちゃんはスクーパ

- ズなの。スクーパーズのテレパシーが使えるの。」

「そんなこと分かっている。スクーパーズの狙いは、みさちゃん。蟹爪はスクーパ ズだった

エビふりゃーもそう。 でも、みさちゃんは友達だし守る。 絶対に見捨てない。」

「そうじゃないの。私たちを戦わせているのはみさちゃんなの。」

「みさちゃんが、私たちを戦わせて、面白がっているというの。」

「りとちゃん、違うの。 みさちゃんたちは、 殺したスクーパーズから情報を取り出して、

をスクーパーズにしようとしているの。」

「ことこ、何を言っているの。 アルドアのことで、 頭がおかしくなったんじゃない。」

まりから連絡が入る。

「みさちゃんが、地下室から出て行っちゃった。 戦いを止めるって。」

「まりは止めたんだよね。でも、みさちゃんは出て行った。」

「うん、そう。止められなくてごめんなさい。でも、 みさちゃん、 スクー パ ーズだった。 一度ス

クーパーズの格好に変わったの。」

「そう。」

「驚かないの?」

「なんとなく分かってた。それで、今は人間の格好なの。」

「うん、人間の格好で走って出て行った。」

「良かった。 スクーパーズの格好だと、見分けがつかないかもしれない。 わかっ 今はい € √

扉に鍵をかけて休んでいて。 怪我しているんだもの。 私が何とかする。」

りとがことこに穏やかに話しかける。

「ことこ、さっきはごめん、ひどいことを言って。みさちゃんを探してこなくちゃ。」

「りとちゃん。だから、スクーパーズさんたちは敵じゃないの。」

そして、少し強い調子で言う。

もしかすると、 「わかった、スクーパーズが攻撃してこないならば、こちらからは絶対攻撃しな みさちゃんかもしれないし。話しは後で聞くから、 今は隠れていて。」

「うん。」

そのとき、竹下通りの方からスクーパーズが2体上がってきた。

「黒いスクーパーズ!ことこ、 隠れて。 なんか、やばいかもしれない。」

りとはことこの前に立った。

ガーチューンが言う。

「棒人間が屋上にいる。攻撃開始だ。」

当たり、壊れて落ちて行った。りとは、後ろを振り返ると、ことこは無事なようで少しほっとし 思いのほか強力で、ビームに弾き飛ばされ、 ガーチューンがビームを放った。 りとは、 いつもの通りに棒でビー 飛び散ったビームの一部がモノアイディスプレイに ムを払おうとした。

そう。 「ディスプレイが壊れた。タンクのビー みんなとの通信は受信も送信もできない。」 ムの照準ができない。でも大まかなコントロ ルはでき

た。そして被害状況を調べた。

そして、ことこ言う。

「ごめん、ことこ。新しいスクーパーズがいきなり攻撃してきた。スクー パ ズのビー

まで一番強力だった。 やっぱり無理。 お願いだから隠れて待っていて。」

「りとちゃん!」

ことこは、どうして良いか分からなかった。ただ、飛び立つりとを見つめていた。 りとはビ

を放ったスクーパーズを見ながら、 西側へ飛んで行った。りとはつぶやく。

「みさちゃんは裏原だろうから、原宿駅の方で片づけないと。」

ガーチューンがガジメに言う。

「ありがたい。自分で西側に行ってくれた。」

「これでゼクールとゴモが自由に活動できます。」

2体はりとの後を追う。 りとも2体が追ってくるのを見て良かったと思ったが、ことこがまだこ

ちらを見ているのを見て、さらに西側に向う。

「あの2体を少しでもみんなから遠ざけなくちゃ。」

ゼクールとゴモは、 低空を飛んでキャットストリー トの防衛線の破壊を行ってい た。 ゴ ーモが

クールに話しかける。

ビームもバリヤーも強力で、防衛線の破壊は楽です。」

「そうだな。」

「これを使っていれば、 第3連隊は全滅しなくてすんだのに、 何で使えない んでしょう。」

「上の考えることは分からない。 ただ、 この力が尋常でないことは感じる。」

「そうですね。」

戦ではあの棒は危険だ。 「ガジメは奴の後を追ってくれ。 りとは低空を飛んで、 地の利を活かそうとする。 距離を保ってビームで攻撃だ。」 俺は上から攻撃する。 ガーチューンがガジメに指示をする。 無理はするな。 近づき過ぎるなよ。

「了解です。」

なかった。上からは、 ら追ってきたスクーパーズと正面から対抗することにした。しかし、後ろのスクーパーズは見え じる路地で後ろから追ってくるスクーパーズを待ち構えた。薄っすらとビーム攪乱幕が漂って 後ろの攻撃はボードで避けた。 りとはクレーアズの角を代々木側に曲がった。そして、右、右と曲がって、ストロボカフェに通 「ビームが今までより全然強力。スクーパーズは、上と後ろか。狭い道を行った方がいいかも。 りとが竹下通りに沿って低空を飛んでいると、上と後ろから攻撃があった。上の攻撃は しかし、 上のスクーパーズが攻撃があったため、 強いビームによる攻撃が断続的に続いていた。 しかし、 ビームを受けるたびに、 その場を離れて、来た道を戻り、 体勢が崩れそうになる。 後ろか 棒で、

そうすると、前方上方から攻撃があった。 認した上で上昇して、上のスクーパーズを追いかけようとする。上のスクーパーズは横に逃げな 追ってきた。りとはビーム攪乱幕を撒きながら、舟橋マンションの前を曲がる。 あえず、竹下通りに降下して、またクレーアズの角を曲がり、右に曲がって真っすぐ行 もなかった。また、それほど正確な射撃ではなかったが、下のビーム砲からの強力なビームも飛 んできた。そして、 がらビームを撃ってくる。しかも、 「どうして。 りとはスイートボックスを渋谷側に曲がった。 ズの視界を遮ったのである。そして、煙の動きから後ろのスクーパーズがついてきたことを確 曲がった後は上からも見えなかったはずなのに、隠れた場所が分かっていた。」 少しの時間が経ったあと下のスクーパーズからの射撃が始まる。りとはとり 今までと違って高速で移動していて、すぐには追いつけそう そうすると、スクーパーズが現れて、後ろから 後ろのスクー ってみた。

「曲がる方向が分かっている?」

周りを見渡した。

「監視装置?どこかにスクーパーズが隠れているの?」

ガーチューンとガジメも決定力に欠けていが、冷静だった。 ワクチュンから連絡が入る。

「棒人間、今度は角F21を直進してきました。」

ガジメが答える。

ずよし、 やつの前に回り込んで西に押し返す。ガジメも距離を保っ て、 西側に押し返す攻撃を頼

「わかりました。やつを裏原、 ゼクールたちの所には行かせません。」

監視装置を探していた。 ガジメは西側に誘導しようと、 りとの主に東側にビームを撃った。りとは、 細い道を回りながら

「どこ。」

上のスクー パーズに前に回り込まれる場所から、 それがありそうな場所をだんだんと絞っ

からビーム攪乱幕が立ち上っているのが見えて、 では、移動しながらビームを撃っている黒いスクーパーズしか見えなかった。ただ、 ことこは、ラフォーレの屋上からアルドアを探していたけれど、 戦闘中であることはわかった。 動いているものは

「りとちゃん。」

ことこはアルドアもりとも心配で、どうしていいのか迷っていた。

まりは、地下室のモニターでキャットストリートの防衛線が破壊されるのを見ていた。

「キャットストリー トの防衛線はもうもたなそうだわ。あの防衛線が破壊されたら、あとはPA

まりは、リア銃を持って地下室を出て、 RKの防衛装置だけ ね りとも頑張っているんだし、私がPARKを守らなくっちゃ。」 歩いてPARKに上がっていった。

「具合はかなり良くなったわ。これならいけるかな。」

階段を上がるときに、少し痛くて、

痛っ。|

という声が漏れたが、そのまま階段を上がりPARKへ向かった。

「PARKの壁はことこが強化したから、そんなに簡単には壊れない。 2体しかいないみたいだ

から、不意打ちを食らわすのがいいわね。」

まりは入り口が見える壁際でパーカーがかけてあるハンガーの後ろにボードを立ててその後ろ

に隠れた。パーカーの背中の柄を見ながらつぶやいた。

「見るたびに思うけれど、なんか、 のんきそうなアルパカの縫いぐるみの画像ね。 サングラスな

んてかけて。」

ためか、ラフォー みさは、表参道の囲いの内側をラフォーレに向けて走ってい レに走って向かう途中でかなり疲れてしまった。 た。 しかし、 小さい女の子の体の

「あそこにコンビニがあるですな。 飲み物を買ってから行くですな。」

. 姫様、状況がわかりません。急ぎませんと。

「分かっているですな。でも、ちょっとだけ、休むですな。

エビふりゃーもみさの少し青くなった顔をみて、 みさの状況が理解できたようだった。

「分かりましたでございます。 少し休憩をとるのがよろしいでございます。」

みさとエビふりゃーがコンビニエンスストアに入っていった。

ルドアは、ビーム砲の遠隔操作による攻撃に限界を感じていた。

「だめだ。棒人間の動きについてい ズコアと連携させなくては。」 けない。 僕が外に出て直接視認して、 照準系を僕のスクー パ

直結できるように同調作業を開始した。 そう言うとア ルドアは外に出て、 ビー ム砲の照準系統をコアリンク経由 で操作し、 自分の考えと

すのに苦労した。 「いた。あそこね。」 りとは高速で移動しながら、監視しているものを探していた。 だんだん目星はついてきていた。しかし、 しかし、ブリスベージュの植え込みにスクーパー 止まって探すわけにはいかなかったので、 先回りされることが多い位置か ズが隠れているのを発見した。 探し出

チュンからガーチュ りとはそのまま少し進んでUターン ーンとガジメに連絡が入る。 して、 後ろの スク ーズを攻撃するそぶりを見せる。 ワク

ます。」 「棒人間、Uターンしました。 角F21を曲がってくる分隊長を待ち伏せるのではない かと思い

ガーチューンが指示をする。

「ガジメ止まって隠れろ。 棒人間が角から出てくるようならば、 2体で攻撃する。

「わかりました。」

ガジメはファンシーポケット の陰に隠れた。ガーチュ ンもその上空で待機した。 人間はすぐ

には現れなかった。ワクチュンから連絡が入った。

「棒人間、こっちに来ます!見つかりました。」

ガーチューンが指示をする。

「ビーム攪乱幕のタンクを撃って、急いで上に退避しろ。」

続けてガジメに指示を出す。

「ガジメは待機、俺が上空から援護する。」

だが、ガジメはその命令を無視してワクチュン れより速くルナ銃のタンクが現れ、 したビー ム攪乱幕を撃ったが間に合わなかった。 ついで棒人間が現れ迫ってきた。 の援護に向かった。ワクチュ 攪乱幕が爆発的に広がっ てい ンは道のわきに設置 くのを背景にそ

「分隊長!援護射撃を!」

ワクチュンはテレパシーでそう叫んで、 ガジメも答える 必死に西に移動した。 ガジメのところに行こうとしたの

「全速で逃げろ。あと3秒で着く。」

りとはそれより速く動き、スクーパー い越しざまにルナ銃の散弾を発射した。 ズを追い越してい スクーパーズは穴だらけになった。 き、 照準が不正確なため至近距離か 瞬間にそれを確認し

「覗き魔にはお似合い。自分の穴でも覗くといいよ。」

ワクチュンはテレパシーで最期の叫びを上げた。

|棒人間め!」

そして消えていった。 りとは後ろから追ってくる黒いスクーパーズにすでに照準を絞っていた。

「次はストーカー。」

チューンが現場上空に到着したとき、煙の中を高速に東に動いていくものが見えた。 の消滅を悟った。 ワクチュンが撃って放出されたビーム攪乱幕で辺りの視界が悪くなった。 ガー ガーチューンとガジメは、ワクチュンからの通信やテレパシーが途絶えたことで、ワクチュン

「ガジメ、やつは東に向かう。お前はまた後を追ってくれ。」

「了解。ワクチュンの仇を討ちます。」

「だめだ。近づき過ぎるな。やつをこのあたりに留めておけばそれでい

ガジメは、必「了解です。」

ガジメは、必死に自分に言い聞かせた。

「ちくしょう。 でも王女様を救出するまでは堪えるんだ。 救出したら、 あとは好きにさせてもら

ر ا

煙の中を動くものを上空から追って 61 たガーチュ ン がガジメに叫ぶ。

「ガジメ、上昇だ。やつが乗っていない。」

「はいっ?!」

「ボードだけが東に進んでいる。」

ガジメは上昇を始めようとしたが、 ストロボカフェに通じる小道の脇のジュ スの自動販売機

の上から棒人間が飛び出して来て、 ガジメに上から突き刺そうと降りてきた。

「くっ!」

付かれてしまった。りとはルナ銃の推力を使って、 ガジメはなんとか右によけて棒を避けた。 しか 棒が振られ、 ホースでスクーパーズを切り裂こうとする。 棒からついているホ スに巻き

「このストーカーめ、消えろ。」

張っていた。 しかし今までと違って、スクーパーズは切れなかった。ガジメは最大のエネルギーでバリヤー ただ、ガジメもビームを撃つとバリヤ - が弱まり 朩 スで切断されそうだった。

「連隊長!やつのひもに巻き付かれました。」

「分かった。待ってろ!今行く。」

ガーチューンは煙の中に飛び込んでいった。

「ガジメ、どこだ!」

ここです。」

ジメが見えた。 テレパシーの方向を見ると、 ンは、棒人間にかなり接近して最強のビー ただ、棒人間の足が地面に吸いついてい 棒人間とホー スに巻き付けられながらも上昇しようとしているガ -ムを放つ。 るかのように固定されてい ガ

**|棒人間、くらえ。お前の最期だ。|** 

「痛っ」

合ではないと考え、棒人間に目掛けて突っ込んでいく。 だんだんとりとに近づいて行った。 ズや周りを気にしながら、ホースをさらに手繰り寄せる。ガジメも全力を出していた。それでも、 ガジメから声が漏れる。 バリヤーが弱まり、 ガーチューンはガジメを助けるために距離を取っている場 ホースが食い込み始める。 りとも2体の スクー

「ガジメ、今行くぞ。頑張れ。」

「連隊長!無理はなさ。うっ。」

声がかかった。 ドも左右に動い ガーチューンが接近すると、ボード た。左にフェイントをかけて、ボードを右から抜けようとした瞬間、 が飛んで来て、 盾のように前をふさいだ。 左右に動くとボ ガジメ

「棒人間、そっちに行きました。」

に刺してあったペンタブのペンを右手に持ち、 りとは瞬間ホースを緩めて、ボード の後ろまで来ていたのである。りとは胸のペン ガーチューンに突き刺そうとする。 用 のポケ

「下だ。」

ガーチューンはガジメからの連絡もあったため、 人間に蹴り飛ばされてしまった。 強力な蹴りで数十メートル以上飛ばされた。 そう叫けびながらなんとか下に かわ

「連隊長!」

り寄せながらつぶやく。 ガジメが心配そうに叫んだ。 りとはペンを持ったまま、 ストロ ボカフェ のすぐ前に移動し

ガジメも全力で離れようとするが、 「ここなら、 強いビームのスクーパーズが攻撃できる角度が限られる。 次第に手繰り寄せられていった。

くそ。

り接近することができなかった。 ガーチューンは、 助けに行こうとするが、 上からの攻撃を試みたがボードで防がれてしまっていた。 狭い路地で、 近づくとホースの先のルナ銃の攻撃も

「ガジメ!」

ガジメとりとの間隔は1メートルもないほどに迫ってきた。

「このままでは、あれに刺されて死ぬだけだ。」

距離ならばビームが当たらないことはないし、上手くいって棒人間が倒れる方が先ならば、 る可能性もあると考えたからだ。 ガジメは決心してビームを撃つことにした。バリヤーが弱まり切断される可能性も高いが、 ガジメは棒人間を見つめた。 この

「いくぞ。 集中するぞ。 3 2 1.

角を曲がればPA キャ ッ ・ストリートの防衛線のPARKの方に渡る部分を破壊したゼクー R K が見える位置まで来ていた。 ルとゴモは、 つ

軍曹、 気をつけて下さい。ここのビーム砲は強力です。」

「知ってるさ。 俺がおとりになって、 ビー ムを撃たせるから、 ゴモは物陰に隠れながらその発射

装置を破壊してくれ。」

「分かりました。 お気をつけて。」

「じゃあ、行ってくる。」

置を破壊していった。まりはPARKの入り口が見えるところに隠れていた。 避けて、ビームがかする以上に当たることはなかった。そして、 ゼクールが飛び出し、それに対してPARKの防衛装置が作動した。 ゴモが一つずつ、 しか ゼクー ビー ルは機敏に

「来た。2体ね。増えていないのは良かったわ。ここで応戦しても仕方がないから静かに待とう。

不意打ちを食らわせてやるわ。」

数分でゴモがPARKのビーム発射装置の全てを破壊した。

「ゴモ、そこで待っていろ。

たが、難なく破壊することができた。ゼクールは地上に降りて、 ゼクールが建物の周りを飛んで、 「みさ王女様!みさ王女様!助けに参りました。スクーパーズ宇宙遠征軍第8連隊のゼクー いらっしゃいましたら、 お返事をして下さい。」 ビー ム発射装置が残っていないか確認した。 みさをテレパ シーで呼んでみる。 2つほど残ってい

返事がなかった。

「みさ王女様!エビふりゃ 様、 ζ) らっしゃいましたらご返事ください。 助けに参りました。

再度呼びかけても返事がなかった。ゼクールはゴモを呼び出した。

「ゴモ、 誰もいないようだ。こっちへ来てくれ。」

「わかりました。」

P A R K の建物の入り口までゴモが来た。 ルがゴモに話しかけた。 モニターで様子を見ていたまりは、 リア銃を肩に乗せ

て構えた。ゼクー

「王女様はいないようだ。」

以前には王女様は地下室にいるとおっ しゃっていましたが。

「そうだったな。 とりあえず地下室に行ってみよう。

ルがゴモは地下室への通路を降りて行った。 扉は少し開いてい ゴ モが扉を開き、

話しかける。 ルとゴモが部屋の扉を一つずつ開いて確認したが、やはり誰も居なかった。 ルが突入する。そして、 続けてゴモも突入する。 しかし、 部屋の中には誰もいなかった。 ゴモがゼクールに ゼク

「誰もいませんね。」

たときに着ていらした服だ。」 「そうだな。だが、この服はラフォーレから、明治通りの反対側の建物の屋上で王女様を見つけ

「そうですか。さすが王女様一筋だけのことはあります。 でも、 においは嗅がないで下さい

「そんなことはしないよ。一人じゃないんだから。」

「一人だったらするわけですか。」

「そうかも知れないが、そんなことは今はどうでもい 王女様を探すのが先だ。」

「ごまかしましたね。まあ、いいです。手分けして探しますか。」

「いや、私が探しに出る。王女様が戻ってくる可能性もあるから、 お前は近くに潜んで、

物を見張っててくれ。」

「分かりました。この建物が見えるところに潜んでいます。」

「棒人間が戻って来ても一人で戦うんじゃないぞ。」

「はい、分かっています。」

ゼクールとゴモは外に出て、ゼクールはPARKから離れて行った。

「さて、どこへ行こうか。 竹下通りの方は今来た道だから、 とりあえず、 ラフォ レの方に行

てみるか。」

一方、ゴモは見張るために良い場所を探していた。

「どこに隠れようか。」

まりもモニターで、2体のスクーパーズが地下室から出て、 二手に分かれるのを見てい

「今なら1体だけだけど、無理に仕掛けることはないか。」

そうつぶやきながら、壁に寄りかかり監視を続けた。

ラフォーレの屋上で、辺りを見ていたことこは、竹下通り近くのビー ム砲にすぐそばに普通の

スクーパーズが現れたため注視した。

「アルちゃんだ。」

そうつぶやくと、そのスクーパーズに向かってテレパシーを使って叫んでみた。

「アルちゃん。アルちゃん。ことこだよ。アルドアさん。」

は、ラフォーレの階段に向か しかし、テレパシーの到達範囲外なのか、そのスクーパーズが反応することはなかった。ことこ 11 急いで降りて行った。 しかし、 急ぎすぎたため、 階段の途中で

「あいたたたた。」

ころんでしまった。

みさはコンビニの小さなイートインスペースで、 エビふりゃーと小休止していた。

「人間の体は、水分を取らなくてはいけないので不便ですな。」

の生き物は、ほとんどそうでございます。ですので、 しようとお考えになったのだと思います。」 「人間は、宇宙に出ると空気がないために死んでしまいますでございます。ですが、銀河系の中 歴代の王様は、 他の生物をスクーパーズ化

「でも、 ようと全力で戦っていたんですな。悪いのは全部みさたちなんですな。」 なんですな。初めてこの作戦を指揮してわかったですな。みさを必死に助けようとしているパド りとちゃんに殺されるところを見てしまったんですな。でも、 そのために何百、何千ものスクーパーズの命を犠牲にすることは、してはいけないこと りとちゃんもみさを助け

部隊にも勝利することが可能と思うでございます。」 隊員たち。最後は私の命を差し出してよろしいでございますので、りと様だけでもスクーパーズ になって頂きたいと思うでございます。りと様ならば、私が防ぎきれなかったアムロディの先鋭 無駄にするのは無念でございます。蟹爪ふりゃーや第7連隊の部下たち。第3、 「しかし、姫様。 エビふりゃーとしましては、今回の作戦で死んでしまったスクーパ 8、11連隊の ーズの命を

作戦がスクーパーズにとって有効とわかったら、父上はこの作戦をどんどん実施するかもしれ ないですな。そうすると、この作戦で犠牲になるスクーパーズがもっと増えるですな。 「エビふりゃーの気持ちもわかるですな。 しかし、もしりとちゃんがスクーパーズになってこの

「・・・。悲しいことでございます。」

「少し休んだら、だいぶ体が楽になったですな。出発するですな。」

「わかりましたでございます。出発するでございます。」

0

ズのビームを発射するところから踏みつた。そして、 ビームは横の塀に向かって放たれた。塀に大きな穴が開いた。りとは、 前に棒人間が操作するルナ銃の先の尖った部分が上から突き刺ささり、 ューン向かって叫ぶ。 棒人間を見据えたガジメがそう叫んでバリヤーを緩めビームを放った。 ホースをより強く引いた。 地面に落ちたスクーパー しかし、ビームを撃つ直 ガジメは地面に落ちて、 ガジメがガーチ

「連隊長!私には構わずに、こいつを撃って下さい。」

ガーチューンは上からだと両者に当たるため、 前に回り込もうと移動する。

「連隊長!早く今です。」

棒人間が足でガジメを抑え込み、両手を添えて思いっきりホ いバリヤ ーを破り、 ガジメが4つに切断された。 スを引っ張ると、 朩 スがガジメ

## 連・・」

認したりとが呟く。 それがガジメの最期の言葉だった。そして、 ガジメは消滅してい った。 スクー パ ーズの消滅を確

死なずにすんだかも。 「春奈るなのFCイベントのおかげで土地勘があって助かった。 ストーカーにはふさわしい最期。」 お前も参加して 61 れば、

とつぶやいて、上を飛んでいるボードを見る。前に回ったガーチュー ンは棒人間にビー

「ガジメの仇を・・・」

込んでくる。 ンクに 今度は下方後ろから前方に移動しているタンクからのビームの攻撃があり、次には前に出たタ かかわすが、 が横にかわすと、今度は後ろからタンクからのビームが飛んでくる。 しかし、 とか避けたが、棒人間に蹴りあげられてバランスを崩してしまった。 して来る。ガーチュー プしてボードに飛び乗り上昇し、 チューンは避けるのに精一杯でビームを発することさえできなかった。振り下ろす棒はなん ムが棒人間にかすって当たっているが、 ついているホースが下からガーチューンを襲い、続けて棒人間が後ろから迫って来た。 ビームが届く前に前に、 今度は上から棒人間が迫ってくる。 りとがつぶやく。 ・ンはビー ムを放つが棒で弾いてそのままやって来る。 棒人間は人間のジャンプ力とは思えないほどの高さまでジ 逆に棒を構えてガーチューンに襲い掛かかった。ガーチューン 棒人間は速度を落とどころかますます加速して突っ ガーチューンは前に進んでぎりぎりかわすが、 棒人間は、振りかざし突入 ビームにかすりながら何と 弾いて飛び散ったビ ヤ

「これでおしまい。」

である。 しかし、 をかわす。さっきより正確な狙いだった。ビーム砲の方をみると、普通のスクーパーズが見えた。 それよりも気になったことができた。PARKの方から煙が上がっているのが見えたの その瞬間、 りとはビー ム砲のビームが左からやって来るのを感じた。 急停止し てビ

「別動隊がいるの?連絡ができなから。まり。」

りとは、ガーチューンを放っておいて、ビーム砲のそばにいるスクー 「まずこれを黙らせる。」 パ ズ目掛けて急降下する。

ガーチューンがつぶやく。

「ビーム砲の方が先なのか。」

そして、 を優先し 後ろから撃とうと思ったが、 て下から棒人間の背後を狙うことにした。 射線の先にビ りとは高速でアルドアに迫る。 ーム砲とアルドアがい るため、 りとより降下 ガーチュー

「アルドア!隠れろ!」

そして、 下から棒人間に向けてビー -ムを放つ。 アルドアも逃げずにビー ム砲のビ

構える。 に迫る。 りとは下のスクー 最後のビームをかわしてアルドアまで25メートルぐらいになったときに、 基本的には戦闘員でないアルドアから恐怖の悲鳴が出る。 パーズからのビー ムはボードで防ぎ、 ビー ・ム砲の ピー ムはかわしてアル りとは棒を ア

「わーっ!」

チューンも、 棒人間は棒を持ったまま、 アルドアの横を行き過ぎる。 そのまま過ぎて行ってしまった。 りとの後を追っ いるガー

クール達はどうしているんだ。」 「良かった。 アルドアは無事か。 あい つらの基地への帰還を急ぐのか。 さっき煙が見えたが、

棒人間との戦闘が激しくて、 そのスクーパーズがアルドアとわかって、 あまり状況が分かっていなかった。 ガーチューン も戦闘中では通信機でゼクー りとはビー とりあえず棒を納めて横を通過した。 ム砲のそばのスクー ル たちに尋ねることが パーズに近づいたと

いつは何とでもできる。 「ビーム砲を撃っているのはアルドアだった。 今はPARK先。」 やっぱり残っているの。 どうしよう。

りとは通信ができない状況で、 PARKにいるまりの方が心配だった。

建物の壁の絵が目に入った。 ゴ モは、PA R K の近くでP A RKを見張ることができる隠れ場所を探していた。 そのとき、

隠れ場所を探すことに戻ろうとしたときに、 生命体じゃない気もするんだが。 「それにしても いい絵だな。家族の絵。あの棒人間が描いたなんて信じられない。 いけない、 その絵の隣の絵にも気がついて、 いけない。 敵への気持ちは命取りだ。 初めは斜めの そんなに悪い

そう言えばもう一枚絵を描こうとしていたな。 だんだんと絵に近づいていった。 すごい、 スクーパ ズの絵だ。 綺麗な空

じないな。」 街の上を飛ぶスクー パーズだ。悠々としている。 あまり絵からスクーパーズへの悪意は感

さらに絵に近づいた、 ゴモは言葉を失っていた。

防衛線が破壊されているのが見えた。 きたが、道が狭く曲がっているので射撃できないようだった。キャットストリー りとはPARKへ低空を急いでいた。 後ろから黒いスクーパーズが同じ高さで飛んで追って トを通過すると、

「まり。」

ガーチュー シは、 必死にゼクール とゴモに通信機を使って呼びかけていた。

「ゼクール、 ゼクール、ゴモ!」 ゴモ、棒人間がそっちに向かっている。 追ってはいるが抑えるのは無理だ。 聞こえ

しかし返事はなかった。

「あっちも戦闘中か?」

ガーチュー 「作戦は、順調のようだが。」 ンもキャットスト IJ を通ったところで、 防衛線が破壊されているのに気付いた。

開けて身を乗り出して、 りとがPARKの前の道に着きPARKの方を見ると、 りとに向けて叫ぶ。 モニター で様子を見ていたまりが窓を

「りと、反対側に黒いスクーパーズがいる。」

「まり!」

まりが無事と分かって、 し、そのスクーパーズに迫る。 少し安心ながら反対を見ると、黒いスクー パー ズがいた。棒を振りかざ

から出てくる、 ラフォーレの方にみさの名前をテレパシーで呼びかけながら進んでいたゼクー みさとエビふりゃーを発見した。 ル が コ ン ビニ

「みさ様とエビふりゃー様だ。ご無事だ!」

周りを見渡したが、棒人間も射撃主もいなかった。これなら大丈夫と思ったゼクー ビふりゃーの方に高速で向かいながら呼びかける。 ルがみさとエ

「みさ様、エビふりゃー様!」

みさとエビふりゃーが振り向いた。ゼクールはその前に停止した。

いでこの囲いの外に参りましょう。ご案内致します。その前に隊へ現状を報告させて下さい。」 「スクーパーズ宇宙遠征軍第8連隊第111分隊のゼクール軍曹です。 お助けに参りました。

「わかったですな。」

ゼクールはみさ王女に許可をもらって、 通信機で全員に状況を報告した。

「ラフォーレ近くのコンビニ前で王女様とエビふりゃー様を発見しました。 周りに人間は

エビふりゃー様の指示も仰ぎながら、 王女様の救出作戦を遂行します。」

その通信は、 PARKへの道を目前にした、ガーチューンにも届いた。

「でかしたぞゼクルー ル。よくやった!これでガジメの死も無駄ではなくなった。」

「分隊長が戦死なされたのですか。」

「そうだ。だが今はその話をしている時間がない。 5分間は棒 人間を足止めするから、 急い で囲

いから脱出して王女様を戦艦まで護衛してくれ。」

「承知しました。 王女様を戦艦にお連れしましたら急いでそちらに向かいます。 ですので、

長、絶対に無理はしないで下さい。」

「ご武運を。」

「いっちょ前の口を。

だが、分かった。」

「ああ。」

ゼクールの目から涙が出てきた。 そんなゼクールを見ながら、みさが答える。

「ゼクール軍曹、 ご苦労様ですな。 ありがとうですな。 でもですな、 みさには逃げる前にこの戦

間に勝てる保証はありません。みささまのご無事を保証できません。 の星系から離れるのが一番良いと思います。」 「みさ様、いつもながら、ご立派なお考えと思います。ですが今はお逃げ下さい。現在、 ーン連隊長が棒人間をなんとか抑えていますが、 残念ながら我々が全力を上げても、 戦艦に戻られて、 急いでこ あの棒人 ガーチ

「棒人間ですな?」

る今こそが脱出のチャンスです。」 も戦死されてしまいました。 現状の我々には棒 棒を持ってボードで飛び回る人間です。 八間に勝つ手段がありません。 非常に強力で、 残念ながら蟹爪ふりゃ 戦場が混乱してい -連隊長

「ああ、りとちゃんのことですな。」

「りとちゃん!?」

「りとちゃんなら大丈夫ですな。 戦いを止めるですな。 りとちゃんは、 この原宿を守りたいだけですな。 我々が出て行

「でも、王女様を人質に。」

ですな。」 「それは、違うですな。りとちゃんは敵ではないですな。これには深いわけがあるですな。 聞く

エビふりゃーがそれを止める。

「みさ王女様、 その話しは極秘でございます。 一般の兵に話すような内容ではないでございま

の行いを正すためには、 「エビふりゃー、 そんなことを言っている場合ではないですな。 真実を語る必要があるですな。」 この戦いを止め、 スクーパ

「しかし。」

「これは、みさの命令ですな。黙っているですな!」

「はい、分かりましたでございます。」

ロイビームのことも気になった。 ゼクールは、何だろうと思いながらも話を聴くことした。 1回だけの射撃だったが、 白いデスト

「棒人間が敵ではないとすると、 デストロイヤーズが関係するのか。 何か複雑な事情がありそう

ゼクー ルは王女様救出にはまだ大変なことがあるかもしれないと思い、 気を引き締めた

めていた。 ゼクー からの通信を受け取ったガー -チュー ンは隊員たちの活躍に喜びながらも、 決意を固

「俺はここでやつらの足止めをしなくては、 皆に合わせる顔がない。 ガジメのかたき討ちはその

後だ。」

足止めが困難なことは分かっていたが、 自分が絶対にやらなくてはいけない役割と覚悟し

「蟹爪ふりゃー様、 ギンシア連隊長、 ガジメ!、 私に勇気と力を貸して下さい。

から乗り出していた。 ガーチューンもP ARKの前の道に到達した。敵の拠点PARKがある左を見ると、 右をみるとゴモに迫る棒人間がいた。

「ゴモ!逃げろ!右の建物に入れ!」

ゴモは、この通信にも棒人間の接近に気付かずに絵をみていた。

「これ僕だ。すごい、僕が絵になっている。うーん、 本物より可愛い かも。 でも、 この辺りすご

くいい。悠々としている感じもいい。この絵、 欲し・・・あれ!?」

ゴモは周りの景色から、 自分が回りながら下に落ちていくのがわかった。

「あっ、棒人間。これもお前が描い・・・」

ゴモは真っ二つになった後に棒人間の後姿を見て、 消えて行った。 りとはまりの傍に € √ ス

クーパーズを倒して少し安心した。

「ラッキー。何か考え事でもしていたのか。」

ただ、前に自分の絵が描いてあるのを見てつぶやく。

「私の絵を見てい たの?まさか。 そんなことより、 待ち伏せをするか。

ガーチューンは、

「ゴモ!」

と叫びながらも、冷静に考えていた。

「時間を稼ぐならば、射撃主が先だ。やつも助けに来るはずだ。」

きたスクーパーズがPARKの方に向かうのが見えた。 うほとんどなかった。 ガーチューンは、 棒人間とは反対のPARKの方に向か った。 スクーパーズとPARKとの距離はも りとが後ろを振り返ると、 つ

「しまった。」

ふりゃ なかった。ビームが部屋の中に命中し、爆発したように煙や火が飛び出した。 し上昇してそれをかわす。 らなかった。 に走ってくるりとの向けてビームを放つが、予想した通り、 に隠れた。ガーチューンはPARKの窓目掛けてビームを放つ。 来るのをみて、 りとはボ ー同様にこのスクーパーズには効かなかった。迫ってくるスクーパーズを見て、 ードから飛び降り、ボ そして、りとのボードがガーチュー 貯めてあったエネルギーを使って、モードイレブンの強力な散弾を放つが、 ードだけを先に向かわせた。まりは黒いスクー ン目掛けて飛んできたので、 ビームは棒で弾かれ有効な攻撃にな りとのボードも間に合いそうも ガーチューンは少 ガーチューンは次 パ ーズが向か 部屋の中 蟹爪

「時間稼ぎが目的だ。ここで無理は禁物。ラフォ A R Kの建物に到着したりとはジャ ンプ して2階の窓からPARKに入る。 ・レから囲いの出口なら、5分稼げは十分だ。」 PARKの中

はめちゃくちゃだった。まりは見えなかった。りとが大声を出す。

「まり。まり。どこにいるの?大丈夫?」

レジの裏からまりが顔を出す。

りと。 私は大丈夫よ。 部屋の中もことこが強化していたから、 レジカウンター で助かった。」

「まり!良かった。」

「金庫を守らなくちゃとここに飛び込んだけれど、 中のお金は全部銀行に預けていたんだった。

でも、飛び込んだおかげで助かった。」

「助かったからいいけれど、金庫だなんて、こんなときに何言っているの。 怪我はない?」

「今の攻撃ではないわよ。それより、お金は店を運営するのに重要なのよ。」

「そうだけど。うん、怪我なくて良かった。」

「たぶん、ビームがまた来るわよ。」

まりの言う通り、窓を通したビームの攻撃があった。 まりは、 レジカウンターの後ろに隠れた。

りとは、ボードで防いだ。

「りと大丈夫?」

「こんなの全然平気。それより、まり、まりはそこに隠れていて。 今、 やっつけてくる。

しかし、続けざまにビームの攻撃があり、 りとも動けなかった。ガーチュー ・ンは、

「あと4分。二人をあの建物の中に足止めすれば、 作成は成功だ。」

とつぶやき、自分の位置を変えながらもPARKに少しずつ接近し、 PARKの窓目掛けて

ムを放った。様々な破片が飛び散った。その直後、りとは、

「じゃあ、行ってくる。」

と言って、走ってPARKの出口に向かった。PARKを出たりとは通路でボー ドに乗って建物

の横の階段から飛び出る。建物からか出てくるところを見たガーチュ ーンは、 P A R K の 窓 に 飛

び込む。りとは、またあのスクーパーズにしてやられたと思った。

「頭のいいスクーパーズ。」

りとはUターンして来た道をPARKに戻った。 PARKに入ったガ チュ ン は、 射撃主を探

して周りを見渡した。

「ここが、やつらの基地か?ラフォーレとあまり変わらんな。

窓から何か入って来たので、まりは、 りとが窓から戻ってきたのかと思って、 レジから顔をだし

た。

りと?

しかし、そこにいたのは黒い スクーパーズだった。 すぐにしゃがんでレジに隠れ、 リア銃 Ø モ

ドを設定した。

「PARKは私が守る。モードイレブン、ポジションワン。」

まだエネルギー充填は完了していなかった。 ガーチュ ン はレジを攻撃したが、 レジは

壊れなかった。

「装甲が施されているのか。もう、棒人間が戻って来るな。撤退だ。」

銃を撃とうとしたが、 PARKに向けてビームを放った。まりもスクーパーズが出ていくときに、 窓の外を見ると外に棒人間がいなかったため、ガーチューンは窓の方から外へ出た。 RKから少し離れた位置で、ガーチューンがつぶやいた。 スクーパーズがビームが撃ってきたため撃たずにレジの中に隠れた。PA モードエイトでリア

「あと3分。」

扉から入って来たりとがまりに尋ねる。

「まり、大丈夫?」

「スクーパーズが入って来た時にはドキッとしたけど大丈夫。」

「どうしようか。」

「私がおとりになって外にでようか。」

「ううん、それだとまりが狙われると思う。 あいつはビー ムが強力だからやめた方がいい。

は、ここに隠れていて。」

るみの絵が描いてあるパーカーがまりの所に落ちて来た。 PARKの室内にスクーパーズのビー ムの攻撃で宙を舞っていた、 それを見たまりが服を脱ぎ始めた。 のんきなア ル パ カの縫い

「何やっているの。」

まりを見たりとの表情が一瞬固くなったが、何も言わずに表情をわざと緩め、 まりが脱いだ服をりと渡して、自分はアルパカのパ ーカーを着た。スクーパーズ化が進んでいる 自分に言い聞かせ

「もうすぐ終わる。」

まりが続けて説明する。

「私の服を着てみるのは。相手が油断して寄ってくるかも知れない。 でも、 リア銃で有効そうな

モードはモードイレブンポジションワンだけだと思う。」

「モードイレブン?サッカーかなにか?」

「蟹爪に使った一番強力なビーム。エネルギー充填に3分かかかっ ζ 一発のビ ムだけ撃てる

の。

ああ、あれね。でも急に使えるかな。」

「安全装置を外して、引き金を引けばいいようにしておく。」

「そうね。わかった。あいつを引き付けて一発撃ってくる。」

「お願い。これが安全装置でこれが引き金。ここを覗いて照準できるわよ。

ありがとう。」

りとは棒をまりに渡して、自分の服を脱いだ。りとのスクーパーズ化はそれほど進んで まりは、 少し安心していた。 りとは、 すぐにまりの服を着た。 11

「布があちこち余っている。まりが私の服を着るのは無理そうね。

そして、リア銃を担いだ。

「じゃあ、行ってくる。」

ガーチューンは建物から飛び出て来た人間に注目した

「射撃手だ。 おとりか?棒人間が窓から出て、後ろから攻撃する気か。」

けなかった、リア銃の照準器を照準しつづけながらもビームは撃たなかった。 らなかったら、 ガーチューンは後ろを気にして、 胸のペンで攻撃するつもりだった。 回り込みながら射撃手に迫った。りとはリア銃のビー それにはスクーパーズを引き付けなくてはい ムが当た

「少しでも引き付けないと。」

がれた。 近づいてきたガーチューンがまだ距離はあったが離れたところからビー しかし、それで違いに気が付いた。 ムを放つとボ

ガーチューンは無理をしないで離脱していった。

「むっ、棒人間のボードだ。こちらを引き付けるために撃たないのか。」

「あと2分だ。」

りともまりのためにリア銃のエネルギーを使わないことにした。

「変装がばれたのか。まりのところに戻らなくちゃ。」

また、レジの裏に戻ったりとがまりに話しかける。

「ばれたみたい。 やっぱり無理。 まりと私とではスタイルが違いすぎる。」

**あー、そうか。りとの脚はとっても綺麗だものね。」** 

「えっ、 そう?そうなの!ありがとう。 バレたのはそのせい じゃないと思うけど嬉しい。」

「本当のこと言うと、 いつもりとのスタイルが羨ましくて、 いじいじしていることがあるの。」

「えっ。私は逆。 まりのスタイルが羨ましい。私なんか劣等感の塊だけど。 でも、 だから、

言ってもらえると嬉しい。」

「体が取り換えられるとい ₹ 1 · のかな。 女同士の体の交換じゃアニメにならないけど。」

りとがクスっとして。

「そうだね。とりあえずこの話は終わってから。」

一人は服を戻しながら、りとがまりに尋ねる。

「ところで、スクーパーズはいくつ来た?」

「黒いスクーパーズが2体。1体は残って、 1体は渋谷の方に向かった。

「私の方も黒いのが2体。じゃあ、 あの1体とあともう1体いるということか。

ていられないか。みさちゃんとことこがまだ外にいるし。」

「じゃあ、二人で一緒でやっつけよう。」

「やってみようか、まりが見える位置の方が守りやすい。」

「ごめんね、足手まといで。」

「分かった。 怪我もだいぶ良くなかったら、 何とかする。 頑張って、 りと。

「うん。じゃあ行くよ。」

ガーチューンは少し離れた上空から休みながらPARKの様子を伺っていた。

「あと1分だ。」

すると、二人がPARKから飛び出して来た。

「今度は、二人同時か。挟み撃ちにするのか?」

それほど急がずにランダムに動きながら、 しかし、二人は離れなかった。 ーパーズの間に入るような位置取りをして、回っていた。ガーチューンは渾身のビー 力を溜めていた。 りとはPARKの上空へ移動していった。まりに話しかける。 ガーチューンは距離を取りながら、 二人の周りを大きく回っていた。 照準が付けられない りとは、まりとスク ムを放つべ ように、

「合図をするから、ビームを撃って。そしたら、 PARKの屋上の物陰に隠れて。」

りとが何をするのか気になったけれど、短く、

「わかった。」

とだけ答えた。時間が経過して、ガーチューンがつぶやく。

5分経ったぞ。 これだけあればゼクールたちは脱出できただろう。

が届かないのだろうと考えていた。 ゼクールに通信してみたが、返答はなかった。たぶん囲い の外に出て、 戦艦の中に € √ るため通信

少しだけ降下すれば、 逃がして、棒人間がこっちに飛び込むつもりか。 「しかし、何のタイミングをはかっているのだろう。 まりが隠れることができそうな位置に来た時、 ならば、 射撃手が撃った後、 相手が攻撃した瞬間にいくぞ。」 りとが叫んだ。 位置的に射撃手を下に

まり、撃って!」

ムを連続的に放った。りともスクーパーズが下降した瞬間、 した。ガーチューンは下にビームをかわし、迫ってくる棒人間をより先に射撃手に向かってビー の左側を通っていった。まりはビームの発射が終わると、下降して建物の陰にかくれようと降下 まりが発射すると同時に、りとはスクーパーズめがけてダッシュしていた。まりのビー 下降してスクーパー ズとまりの間に割って入った。 真正面から強力のビー 自分ではなくまりを狙っていると直 -ムが来た。 ムが りと

「避けたら、まりがやられる。」

正面からビームを棒で切り裂きながら、 そのまま前進する。 ガーチューンもできる限りのエネル

ギーでビームを発射する。

「この化け物め。落ちろ!」

飛び散ったビームがりとに当たっても、 りとはひるまずに前に進んだ。

「まりには手を出させない。」

逃げても追われるだけと覚悟したガーチュ ムを放ちながら前進する。

「連隊の仇だ。思い知れ。」

ガーチューンは考えていた。 ルぐらいに近寄ると、ビー ムの圧力で両者が近寄れなくなった。 お互い が目を見ていた。

「どうする。ビームが出なくなったらやつに切られるだけだ。左に少し避けながらビー それとも少し下がるか。 しかし、 動いた瞬間が危ない気がする。

りとも後ろのまりが気になっていた。

「この強力なビームを浴びたら、 隠れていてもまりが危ない 正面から受けるしか。」

まりは隠れながらリア銃のエネルギー充填を急いでいた。

「早く充填が終わって!りとが。」

膠着状態が続いた。それでも、 りとはまりが少しでも安全になるように、 スク パ ーズを道の方

に少しずつ押し込んでいった。

「なんて力だ。推力にパワーを回すとビームが弱くなるか。」

「このスクーパーズ、ここで殺さないと。 絶対まりには手を出させな

りとはスクーパーズをPARKの向かいの 建物の扉のへこんだ部分と道が交わるところに ク

パーズを追い込む。 ビームの発射に集中していたガーチューンが気付いた。

「しまった、ここは。」

りとは全力を込めて斜め右に傾けた棒を押して、 そのまま棒で黒い スクパ -ズを押 し切ろうと

する。ガーチューンのビームが激しく飛び散る。

「壁と地面に囲まれて、 もう逃げられないはず。 後は押し切るだけ。

エネルギーの充填が終わったまりが上からリア銃を構えた。 しかし、スクー パ ズは壁で囲まれ、

りとの死角にいて射線を取ることはできなかった。そのため、 りとの背中に向かって叫 んだ。

「りと!頑張れー。スクーパーズなんかに負けるな!」

ガーチュー シは、 下右左と囲まれ、 斜め上から棒人間の棒の刃に押し込まれて

「どちらにも動けないか。」

だんだんとビームの威力も落ちていき、刃が少しずつ迫ってくる。

「今はビームに集中だ。」

を固定した。 集中してビームを発する。 しずつ食い込んでい パーズに近づき、 ができた。しかし、ガジメのときもそうだったが、ボード そして右足を棒にかけ、 やがて刃がスクー った。 ビー ガーチュ ムが棒に当たってさらに激しく飛び散る。 パーズの体に当たり、 ーンがうめく。 体重の何百倍もの力で棒を押し込む。棒はだんだんスクー から降りたりとは重力を制御して左足 1ミリ Ż トル、 少し棒を押し戻すこと 5ミリメー

うぅ。」

勝利を確信したりとが、 スク パ ズの目を見つめながら静かに話し かける。

には逃げ道はないの。」 「ずる賢いスクーパーズさん、残念ね。 今、二つにしてあげる。どんなに考えても、もうあなた

りとは微笑みを浮かべ、言葉は通じないと分かっていたが、また話しかけた。 がっていった。 りとは力を緩めず棒を押し込んでいく。それで、棒の刃がガーチューンの体に食い込む速度が上 そして刃が食い込んだため、スクーパーズはもがくこともできなくなっていた。

「あはは。そう、 あなたはこの隅で死ぬの。それは私の大切なまりを狙った報い。」

5センチメートルぐらい食い込んだ時に、ガーチューンは最後の覚悟を決めた。

「くそ、押し返せないか。ガジメ、今お前のところに行くぞ。だが棒人間、 お前も道連れだ。」

ガーチューンは通信機のスイッチを入れた。

「スクーパーズに栄光あれ!丸野王、万歳!」

それはアルドアが作成したガー さな丸い塊のようなものがスクーパーズの消えたところから落ちようとていた。りとがうめく。 ガーチューンがビームを止めた。ガーチューンが二つに切り裂かれ消滅していった。 チュ シ の生命反応が止まると爆発する対デス トロ イヤーズ用 しかし、

起き上がりながら叫んだ。

の爆弾だった。

爆弾は地面に落ちる寸前に爆発した。

まりが爆発の爆風で後ろに倒れこんだ後、